
創られる世界に入り込む、俺

椿山 昇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創られる世界に入り込む、俺

【Nコード】

N0206E

【作者名】

椿山 昇

【あらすじ】

この世界に生きる意味を見つけない自分だが、光も闇も何もない世界で消えたくない、と強く願った俺は、別の世界へ飛ばされる

始まり始まり

空は青い

周りには、草花や林が見える
呼吸もできる

ここは、地球か？

いや、地球とは何か違う

今、俺が見上げている空に

大きな物体が空を飛んでいる
その物体を何かに例えるなら
そうだな・・・

どうかのおとぎ話に出てくる龍だ

でも、俺の創造していた龍ではない

なぜなら、今、空を飛んでいる

龍は半透明でゲル状それに薄い青色が混ざっている

だが、鮮明に見える

危害は加えてこないだろう

なんとなくわかる

「ここは、どこだ？」

気がつくと、俺はここにあおむけで倒れてた

手足はしっかり動く

視野も良好

思考も・・・多分大丈夫だろう

起き上がると、目の前に

女性が立っていた

「あ、あなたは？」

女性は何も言わなかった

髪は短く、細見で身長は俺より低い

気品もあるように見える

瞳は輝いていて美しかった

けど、その瞳の中に・・

「・・・・」

「え？」

何かよくわからない言葉言っただけ

俺の視界をふさぐように手を置いた

その瞬間、誰かに後ろに引っ張られる感じがした

「ま、待って」

彼女の手をどけて

その場に踏み止まろうとしたが

周りの風景がどんどん俺から離れていった

俺が、誰かに引っ張られてるわけじゃない

ここの世界が俺を拒絶して

追い出そうとしてる

あっという間に

俺の周りには何もなくなった

光もない、色もない

声も出してみても、音もない

ただ俺の体はちゃんとある

触ってみても、その感覚は、ある

何もなくなると

闇が支配すると思っていたが

黒などの色すらない

白もない

なんて考えてるだなんて
意外と冷静だなと思ったがそうでもない
俺は助けを求めて泣きながら叫んでいた
だが、声は聞こえない
のどがダメになるまで叫んでいた
そうだ、涙は見えるのか？
そう思い手で涙をぬぐい見てみる
そしたら水滴もないが手も消え始めていた
足も消え始めていた
今、俺の顔があるのかはわからない
ただ

消えてくない　！！

そう叫んでいた
ただとにかく叫んだ
でも俺の体は消えていく

「嫌だ　　！！」

気がつくと、俺は自分の部屋のベットから跳ね上がっていた
手と足があるか確認する
しっかりある

音があるのか声を出してみる

「あ、あー、もしもし」

聞こえる

そして、俺はある事に気づく

「また、あの夢か・・・」

そして、俺は今見た夢の事を

枕元に置いてあるメモ帳に書き写す

「これで、六か月連続・・・」

はじめは偶然だろうと思っていた

だが、一か月連続で同じ夢を見た時は
さすがにヤバいと思い

精神科に行った

医者診断では、

職場でのストレスが原因だと言った

一か月を過ぎると俺は不眠症になり

睡眠薬なしでは寝れなくなった

医者に見た夢を忘れないうちにメモを

取るように言われてから

メモを取るようにした

夢の内容は

はじめはぼんやりとだったが

最近では鮮明になってきていた

洗面台に向かい

顔を洗って鏡で自分の顔を見ると

頬は痩せこけ

目には隈ができ

まるで、死んだ人間の目をしていた

睡眠薬が無くなった

取りに行かなくては

「巧真さん、私は二週間分の薬を渡したはずですよ

どうしてたったの

七日で無くなるんですか？」

「一回に二日分の薬を飲まないと言わないから」

「どうして、そんな無茶をするんですか？」

「先生がもっと強力な薬をくれないから」

「ですから、これ以上きつくしますと心身に異常をきたす恐れがあるからできないんですよ」

「もう、十分異常でしょ」

「・・・で、どうですか
まだ夢は見ますか？」

「はい」

「今回はどんな夢でした？」

「いつもと、変りないです」

「内容は？」

「メモに書いてあります」

「何か変わったところは？」

「夢がだんだん鮮明になってきました
もう、どっちが現実か分からなくなってしまうぐらい」

「そう、ですか・・・」

「そう言って医者は何かを紙に書いている

「あと、女性が出てきました」

「女性ですか・・・」

「それ以外は特に」

「巧真さん、入院してみてもどうです」

その後の話は覚えてない
入院は断ったのは確かだ
病院は家から遠いのが困る
だからと言ってバスにも乗りたくない
歩く方が楽だ

街中を歩くと人がたくさんいる
どれも同じように見える
同じスピードで、
同じ方向に歩き、
同じような格好をしている

学校もそうだ
同じ方向を見て
同じようにノートをとり
同じ時間にみんな帰る

毎日、毎日
何も変わらない
何も感じない

俺もその中の一人

だけど、俺は、周りの人間がうらやましい
どうやったら、
そんなに必死に生きれるのか
俺には分からない
だからと言って
自殺するのは怖いから無理

けど、生きるには金が必要
だから、適当に仕事を見つけて
適当に働いて給料をもらう

仕事が生きがいのあるもいる
家族が生きがいのあるもいる
貯金が生きがいの奴もいる

そんな奴の気持ち

俺にはさっぱりわからない

この世界で生きる意味が分からない

俺の存在理由は何だ？

俺は何のために生きている？

そんな事をいつも

自分に問いだしている

聞いても答えが返ってくるわけじゃないが

人混みをようやく抜けれた

あたりは夕暮れ時を迎えていた

住宅街を歩いていると

小さな公園があった

こちら辺にはもう子供はいないらしく

公園で遊んでいる子供はいない

通り過ぎようとしたら

何かに呼ばれたような気がして

振り返る

誰もいないはずの公園に

女性が一人立っていた

ただ、その女性は夢に出てきた女性にそっくりだった
これは、夢か？

彼女は口を開き何か話している

だけど、俺にはラジオの雑音のような物しか
聞こえない

「なんだって？」

そう聞き返すと

彼女は手招きをしてきた

俺はそれに従い彼女の方に向かった

すると、突然彼女の足元を境に地面が崩れた
俺はその崩れた地面と一緒に落ちていった

気がつくとそこは病院のベッドの上だった

「気がつきましたか？」

「え？」

「ちょっと待っててくださいね」

そう言って看護師はどこか行ってしまった

しばらくすると医者が現れ今までの事を話してくれた

俺は公園で倒れていた

それを発見した誰かが通報し

病院に送られて来たらしい

「とにかく、明日精密検査をするので

今日は泊まっていてください」

そう言って医者は出ていった

気がつくと俺はまた夢の中にいた

どうも理解ができない

さっきまで病院にいたはずだ

「え？え？」

目の前には彼女といつもなら空を飛んでるはずの

ゲル状の龍が彼女の横にいた

彼女は手を差し出してきた

俺はそれに手をのばそうとすると

また風景が俺から離れていった

俺はまた何もない世界に来てしまった

「くそ、消えてたまるか」

何かないかとあたりを見回しても

やはり何もなかった

脚が消え始めた

やだ、いやだ、消えたくない

俺はそう思い必死に手を伸ばした

だが何もない

消えたくない、消えてたまるか

消えてたまるものか　！！

するとゲル状のものが俺を包んだ

完全に包まれると消えていたはずの

脚も元に戻っていた

ただ、そのゲルの中はとても居心地がいい

何かから解放されたようだ

そして俺はゲルの中で眠りについた

気がつくところには病院のベッドではなく
草原に寝っ転がっていた

「どうなってるんだ？」

上半身を起こし周りを見ても

どこをどう見ても夢の中に出てきた

あの草原だ

ただ違うのは草の感触や日の光が夢ではなく

現実のように感じるからだ

そして向こうからあの彼女ではなく

白髪の交じったおじさんがやってきた

「ど、どうも」

そう言つとおじさんは突然

俺の顔めがけて薪を投げてきた

「え？」

薪は俺の顔に見事に命中した

「うん、異端者じゃないみたいだな」

そして、笑いながら俺を起こしてくれた

「大丈夫かい？」

「頭が痛いです」

「いやゝすまん、すまん

どこから来たんだ？」

「わからないんです」

「ほう、そうか家はどこだい？」

「さ、さあ・・・」

「うん、なら我が家に来るといいさ」

「じゃあ、そうさせていただきます」

やけにすんなりと俺も受け入れてしまった

「うん、じゃあついて来な」

そう言つておじさんはさつさと歩き始めた

俺はただそれになにも疑問を持たずついて行つた

しばらくすると小さな村が見えてきた

その村ではいままでも

見たことのないような野菜が並んであった

野菜だけではなく

全身体毛で覆われた豚みたいな家畜や

でかい鶏に乗っている人などがいた

人があまりに多すぎてうまく

人混みを抜けれないのに

おじさんはどんどん進んでいく

俺はただ一生懸命おじさんの後を追いかけていった

始まり始まり（後書き）

最後まで読んでいただいております
これから話が進むので

あつ、これはつまらないなとか思わないでくださいね
感想や意見お待ちしております。

ホルモンの由来は捨てるもの（放る物）

この世界にきて何日か経った

俺は初めのうち夢の中だと思っていたが
今は、こっちが現実だと思い始めていた

この世界にもだいぶ慣れてきた

いつも、やることがなければ

家でゴロゴロしていた俺も

今では、生きるために必死に働いてる

この村では自給自足

そして、物と物を交換する

物々交換でこの村の商売は成り立っていた
元の世界での紙幣などはここには存在しない

「巧真君、ちよつと薪拾いに行ってくる

から留守番よろしく」

「いや、ケイトさん

俺も行きますよ手伝わせて下さい」

俺を拾ってくれたおっさんの名前はケイト

この村で村長をやっている

とても村長らしく見えないが

そして、俺はケイトさんの家に住ませてもらっている

「いやいや、客人にそんなことさせれないよ」

「もう、俺は客人ではありませんよ」

「そっかい？じゃぁ手伝ってもらうかな」

この世界に来てからは

俺も少しは変わった

あの、夢も見なくなり不眠症もなくなった
死んだ目をしていた俺にも

少しは活力が出てきたような気がする

「今日は、どこの森に行くんですか？」

「北の方に行こうと思ってるんだけど」

「わかりました」

そう言つて外に出ると

強い日差しがやってくる

「今日も快晴ですね」

「うん、そうだな」

ここの世界ではほぼ雨が降らない

俺がここに来てからまだ一度も降っていない

「ケイトさん、牛を連れてきますね」

「うん？今日も使うのかい？」

「それ以外にいつ散歩させるんですか？」

「ちょっと待っててください」

牛と言つても

元の世界の奴とは違つて

全身黒い体毛で包まれた奴の事だ

しかも、体がでかい2m以上はある

性格は大人しく、人懐っこい

鳴き声は、やっぱり牛だった

別に牛と言う種類ではない

この世界に牛は存在しない

ただ俺が森で見つけて人懐っこく

なかなか離れてくれなく

ケイトさんに助けを求めると

ケイトさんの家で飼うことになり

俺が牛と言つ名前をつけた

牛は俺の姿を見ると俺に近づいてきた
動きは遅く

走るとはめつたにない

「牛、散歩だぞ」

そう言つて薪拾いに使う道具を
牛に乗せていった

何とか、道具をのせ終わり

ケイトさんのところへ向かった

「ケイトさん、準備できました」

「うん、わかった」

そう言つとケイトさんは

牛に上手に登りまたがった

「うん、じゃあ行くか」

「はい、わかりました」

「巧真君も乗ればいいのに」

「勘弁して下さい」

牛の乗り心地は悪く

上下運動が激しい

一度乗つてみたが、案の定酔つた
それ以降、俺は乗らなくなった

村の広場では

毎日、物々交換で人がたくさんいた
さすがに牛を使って

広場を横切ることとはできないので
少し回り道をする

そして、人にすれ違うと

村長に挨拶をする人がほとんどである

「いい村ですね」

「うん、これが普通じゃないのかい？」

「私の世界ではこんなことありませんでしたよ」

「へえ、そうかい」

「はい」

この村では

村人全員が一人一人の顔と名前を知っている

それだけではなく互いに助け合って生きている

俺はこの村が好きになっていた

「それにしても今日は広場以外でも

人がたくさんいますね

何かあるんですか？」

「うん、今日は祭りがあるんだよ」

「祭りですか」

「うん、今年の豊作を祈って

夜にお祭りをするんだよ」

「へえ、そうなんですか

どんなお祭りなんですか」

「それは、夜になってからのお楽しみ」

「楽しみです」

北の森には初めて行く

ちなみに牛は東の森で見つけた

「ケイトさん、ここには

獰猛な動物とかいないんですか？」

「獰猛な動物？」

例えばどんな？」

「例えば・・・牛を主食とするような奴？」
牛が一瞬ビクついた

「うん、いないと思うよ

この村ではこいつが一番強いのだ

なあ、牛」

牛が自信ありげに鳴き返した

「そうですか」

そう言つて、俺はため息をついた

「なんだ残念そうだな」

「いえ、何となく納得しました

肉食動物がいないから

牛みたいな草食動物が

こんなに大きくなつたんだ」

「うん、肉食動物だなんていないよ」

ケイトさんの嘘つき

あの会話が終わった後

森の手前に到着し

牛は歩き疲れその場で倒れこんだ

牛はここに置いておく事にし

二手に分かれて

薪拾いをするにしまでは

良かったが

俺は今、俺とほぼ同じ身長のだ

二足歩行のトカゲ

いや、小さな恐竜と表現した方がいいかな？

とにかくそいつと

にらみ合いをしている

明らかに犬歯が発達している

どう見ても肉食だ

俺は背中の籠に入れてあつた
薪の中で太そうなものを選び
構えた

構えたままでは良かったが

一瞬にして俺は仰向けにされ

トカゲが上から襲いかかろうとしていた

何とか逃げようともがいたが

どうにもならない

トカゲが俺の頭に噛みつこうとした時

とっさに薪を使ってガードした

トカゲは薪を噛み砕こうとしていた

ヤバい死ぬ

そう思った時

俺は体の底から何かが

込みあがってくるのを感じた

すると、横から木をなぎ倒しながら

突進してきた牛がトカゲに体当たりした

まともに喰らったトカゲは

飛ばされ木にぶつかり

その場で死んだ

俺にすり寄ってくる牛に対し

「牛、助かったよ」

と頭をなでてやった

しかし、俺は今、妙なものを持っている
それはトカゲが噛み砕こうとした薪である
俺の周りにはトカゲの牙が転がっている
そして、明らかに木材ではなくなっている
薪を俺は今、持っている
牛が突進してくる前
木材を砕こうとした
トカゲの牙が砕けるのを
俺は見た
軽く叩いてみると金属音のような
響きが薪から出てきた
「なんだこれ・・・」

「おい、何の音だ？
巧真君大丈夫か」

俺は、何故かとっさに薪を隠した

「大丈夫です
牛が助けてくれました」
「うん、そうか」

ケイトさんにこのトカゲの事を聞いても
見たことが無いらしく
とりあえずこのトカゲを
二人係で持ち帰ることにした

「うん、南の村はずれに
物知りの人いるからその人に聞くといい」
そう言ってケイトさんは

祭りの準備があるらしく
どこかへ行ってしまった

俺はその村はずれの人に会いに
行くことにした

一人では持ち運べないので
トカゲを牛に乗せようとする
と牛が嫌がった

そんな死骸なんか乗せないでくれと
なんとなく目で訴えられた

「頼む」と、お願いすると
しぶしぶトカゲを上に乗せてくれた

南側は俺が拾われた場所だ
だが、物知りの人は
それよりもずっと奥の方だった

牛もだいぶ息が上がってきた
「少し、休憩しよう」

そう言くと牛は大きな巨体を
上手に折り曲げその場に座った
その巨体に俺はよしかかる様に座った
牛の体毛は軟らかくとても気持ちがいい

そう思いながら俺は薪を一本取り出した
俺は、トカゲに殺される
そう思った瞬間、薪に変化が起きた
つまり、俺が何かをして薪が変化した
一体何をしたのか

あの時は、恐怖心、
それと何か感情が高ぶったように感じた
あの時の気持ちを再現できれば
また薪が変化するかもしれない
そう思い一生懸命念力を込めるが
薪に何も変化はなかった

やっぱり、俺の力じゃないのか
そう思いきっぱり諦めた

「よし、休憩終わり

牛、行くよ」

牛はゆっくり起き上がった

しばらく進むと、俺は大きな扉を発見する
扉なのに裏側には草原があるだけ
扉だけしかない

草原の中にただ扉が一つあるだけだった
どうやって立ってるんだ？

「なんだこれ？」

「異端の門だよ」

振り向くと牛に乗せていたトカゲを
降ろそうとしているおじさんがいた
そのおじさんは、身長は小さいが
がっしりとした体格で
髪型は坊ちゃんで白髪交じりだ

「あなたは？」

「さっきまでは、物知りのおじさんだ」

「はあ？」

「だが今は、好奇心旺盛なおじさんだ」

そう言って降ろしたトカゲを隅々まで見ている

牛はトカゲを降ろされて少し喜んでるように見えた

「はじめて見たなこの生物は」

「そうですか」

「この世界には肉食はいないはずなんだよ

あえて言うなら人間だけだ」

「じゃあ、このトカゲは？」

「わからん」

「あの、異端の門って何ですか？」

「なんだ、そんなことも知らないのか」

「ええ、まあ詳しいことは」

「知りたいのか？」

「ええ是非」

そう言うとおじさんは

俺のほうに手を出した

「何ですか？これ」

「情報料」

「お金取るんですか？」

「お金？何のことだそんな物は

この世界に存在はしない」

「ああ、そうだった

何が欲しいんですか」

「そうだな・・・

その生物を俺にくれ」

「このトカゲですか？」

「おお、トカゲというのかこの生物」

「そうじゃなくて、俺が勝手につけただけです」

「別にかまわん

存在するものには名前がなくては

で？くれるのか？」

「ええ、いいですよ」

「そうか、ありがとう」

するとおじさんはその生物を解体しはじめた
腹を開くところまでは見れたが

内臓を取り出すところまではさすがに見ていらなかった

解体も終わリトカゲは

肉と皮と骨になっていた

気分が悪そうな俺と牛を見て

「なんだ、解体するところを見るのは
初めてか？」

「ええ、マグロの解体ショーなら
見たことありますけど」

「マグロ、ああまあい
いで？何を聞きたいんだ」

ああ・・・しばらくは肉料理食べれないかも

「ええっと、異端の門についてです」

「異端の門とはその名の通りだ

この村には存在しないものが住む別の場所だ
扉は別の所につながっている」

「この村に存在しないもの？」

「ああ、形は人なんだけどな

人じゃありえないことをするんだ」

「人？人間なんですか？」

「人間なんだがこの村では人間扱いはされない
異端者と呼ばれている」

「酷い事をするな・・・」

「向こうも酷い事をするんだよ

だから、この扉が存在する

互いに干渉しない為に」

「この扉は閉まってるんですか？」

「いや、押せば簡単に開くぞ」

「そうなんですか？」

「だから、向こうからも開くってわけさ、村の人はここにあまり近づかない」

「おじさんはどうして？ここにいますか？」

「そんなことより、ここにいていいのか？」

「え？どうしてですか」

「そろそろ、祭りだろ行かなくていいのか？」

「ああ、忘れてた

祭りは一体何をするんですか」

「なんだ？そんなことも知らないのか」

「あの、俺この村に始めて来ましたから」

「なるほど、だから何も知らないのか

今回の祭りは村で取れた食材を

広場の巨大な鍋に放り込んでゆでるんだ

そして、ゆであがってら村人みんなでおいしく

いただくってわけよ

それ以外にも鍋を中心に全員で踊ったり色々だ」

「面白そうですね」

「だから、急いでいけ

遅れちまうぞ」

「おじさんは？」

「俺は、後から行くから心配するな

それからこのトカゲの肉少し持っていけ」

せつかくトカゲのことを忘れていたのに
思い出してしまった

俺は断ろうとしたが鍋に入れて欲しいと頼まれ
嫌々受け取ってしまった

牛に持たせようとしたら

今回ばかりは牛も必死に拒否した

結局、俺が持つことになり

手には生暖かい肉の感触が伝わってくるのが
嫌で大きな草に包めて持っていくことにした

行きは良い良い帰りは疲れる！！

「おお、巧真君どうだった？」

「ケイトさん、あれのどこが村はずれなんですか
俺達、結構歩きましたよ」

牛と俺はかなり息を切らしていた

「うん？そうかいどこまで行っただんだい？」

「ええっと、異端の門まで」

そう言つと、ケイトさんの顔が一瞬曇つた

「ああっ、ごめんなさい」

なんで、俺謝つてるんだ？

「うん、いいよ、いいよ」

それあの人からの捧げものだね

預かつておくよ」

「え？なんで知ってるんですか？」

「うん？だってさっき来たから」

「もう来てるんですか？」

「うん、多分そこらへんにいるんじゃないのかな？」

それじゃ、この捧げものを鍋に入れてくるから

そこら辺で遊んでなさい」

そう言つてケイトさんはどこかへ行ってしまった

俺はとりあえず牛を

ケイトさんの家に置いて来ることにした
家に到着し、しばらく考え事をしていた

今、俺が隠し持っている薪の事

異端者について

人じゃありえないことをする

一体どんな事をするんだ？

俺も異端者なのか？

ケイトさんまであんな顔をするほど

異端者はこの村では迫害されるのか？

考え事をしている俺が心配になったのか

牛がすり寄ってきた

「牛・異端者ってなんだろうな」

「知りたい？」

気がつくとも目の前にあの女性が立っていた

だが今回は彼女のキレイな声も聞こえる

ただ俺は茫然としていた

「知りたいですか？」

よく状況が理解できない

どうして、俺はいままで彼女に気づかなかったのか

「あの、聞いてますか？」

「はい？」

「まあ、いいですよ要件だけ言います」

「要件？」

「正直に言います。」

あなたは、この村で言う異端者です

そろそろ、力が目覚める頃ですちから

「え？」

「ですから・・・」

彼女がそう言いかけた時

ケイトさんが俺を呼ぶ声が聞こえた

「それじゃ、私はこれで

それから私がここにいたと言うことは「内密に」

そう言っただけ彼女は消えたしまった

何だっただけ今の？

牛は不思議そうにこつちを見ていた

「牛、今の見たか？」

そんな事を聞くと

俺の頭の中に彼女の声が聞こえてきた

「ちよつと、何はじめから

約束破ってるんですか？」

「え？どこかで見てるんですか」

そう言つてあたりを見回しても誰もいない

「ご内密つて言つたじゃないですか」

「そんなの知りませんよ」

「でも、残念でした

私の姿はあなたにしか見えませんから」

「そんなの信じませんよ」

「そうですか、ならこつちに来てください」

そう言つと、突然俺は何か見えないものに手をつかまれ

引つ張られどこかに連れてかれた

そんな中、ケイトさんはようやく家の

裏庭に到着し巧真がいらないことに気づく

「あれ？おい、牛

巧真君ここにいなかったか？」

牛も首をかしげるだけだった

俺は人気も何もない所

まで連れてこられた

「あの、どこまで連れて行く気ですか？」

俺は見えない何かに話し掛けた

「まあ、ここまで来れば大丈夫でしょ」

そう言つて、手を離れた

すると、また目の前に彼女が現れた
うまく状況が理解できない

俺の頭がおかしくなったのか

「大丈夫、あなたの頭は正常です」

「え？」

「今、私とあなたは通信中なのだから
心の中で思っていることも伝わるの」

??

「今、通信を切りましたから大丈夫ですよ」
バカ、アホ、マヌケ

「ああ、そんな・・・ひどい」
通じてるじゃん・・・

「いえ、あのそうじゃなくて」

「誰ですか、あなたは？」

その質問に対し彼女は悩んでいた
そして、ようやく出てきた答えはあまりにも
理解できなかった

「ええっと、私は神様です」

・・・

「あ、でも別に変な宗教とかじゃないですからね」
「ならどういう意味ですか？」

「ええっと、そんなまの意味なんだけど」

そう言つて、彼女はまた考え込んでしまった

これじゃちが明かない

「異端者つて一体なんなんですか？」

「ええっとね・・・」

話が進まない

すると彼女は突然、少し離れ

まるで、ピッチャーが投げるちよつと手前みたいな形になり

「とにかく、これでも喰らいなさい」

そう言つて手に何も持つていないのに手を振り下ろした

いや、確かに何も持つていなかったはず

それなのになぜか刃物が飛んでくる

マジで？

そう思つたとき、一瞬だが刃物が止まつてるように感じるどうなつてゐるんだ？

刃物を避けるか取るかを考える時間まである

いや、取るのは危ないだろう

そう思い、俺は避けた

「ちよつと、なんで避けるのよ」

危ないじゃないか　！！

そう言おうと、口を開く前に彼女が言つてきた

「いや、危ないから・・・」

「普通なら取るでしょ？」

「いや避けるだろ」

「そう、おかしいわね」

そう言つて彼女は首をかしげた

それにしても、今の感覚は？

「あつ、そうそう何か感じた？」

彼女はやけに目をキラつかせ俺に聞いてきた

「飛んでくる刃物が一瞬だけど

止まつてるように感じた」

「そうそうそれから？」

「いや、それ以外には特に」

そう言っと、彼女はなんだか残念そうに肩を降ろした
「でも、これが異端者と何が関係あるんですか？」

刃物が飛んでくるんだったら

普通の人間でも避けるはずだし

「そう、ならこれは？」

そう言って彼女は右手を振り始めた

すると、俺は後ろを振り返ってもいないのに
後ろから刃物が飛んでくるのがわかった

俺は避けるために必死にジャンプした

そしたら、俺は見事な宙返りをし着地した

「どう？異端者の意味わかった？」

何となくだが理解した

無意識のうちに俺は力をコントロールしている
手や足を動かすのとはほぼ同じことだ

「これだけじゃないんだけど

今はこれだけでいいでしょ？」

「これ以外にもあるのか？」

「そうよ、こんなのみんなできるんだから」

「異端者はあんたみたいに突然消えたり

現れたりできるのか？」

「これは私だけの能力

個人によつて違う能力も出てくることもあるの」

「俺もそんな能力があるのか？」

「いつかね、でも

個人の特殊能力が出てくる人は少ないの」

「そうなの」

「とにかく、あなたはこの村にいてはいけないの
早くこっち側に来なさい」

「なんで？この能力なら別に隠し通せるじゃないか？」

「そうじゃないの

とにかくあなたは危険なの」

「危険？どうして」

「この村にあなたはいてはいけないの

あのトカゲがいい例よ」

「トカゲと俺に何の関係がある」

「分からないの？トカゲはあなたが作り出したと
言ってもいいくらいよ」

理解ができない

俺が作った？何を言ってるんだ？

「それにあの村はそろそろ

トカゲ達に襲撃されるはずよ」

「なんで！？」

「なんでも、そういう風になってるから」

「それなら、助けに行かないと」

「そんなの駄目よ、

あの村は滅ぶんだから」

「だったら、なおさらだよ」

そう言っただけ俺は村に向かって駆け出した

「ちよつと、行ったら駄目だって

あなたは、その村にいてはいけないの」

村につくとひどい有様だ

広場の方では火の手が上がり

まだ悲鳴が聞こえる

俺は広場に向かった

向かう途中

その場に倒れている人や

逃げた人達とすれ違った

広場につくと

そこにはたくさんの特カゲがいた

そして、トカゲと必死に戦う人々もいた

その中にケイトさんやあのおじさんもいた

俺もその場に落ちている鍬くわを拾い

力を使おうとした

しかし、力がまったく使えない

さっきまで使えていたのに

「どうなってるんだ」

そんな事を思っていると

向こうでおじさんがトカゲに肩を噛まれていた

俺はそれを助けようとその場に向かい

トカゲの首を目掛けて鍬を思いっきり振り下ろした

トカゲの首の骨が折れる感触が鍬を伝って感じた

「大丈夫ですか？おじさん」

おじさんは悲鳴をあげ肩を押さえながら

のたうち回っていた

その時、俺は体の底から

何かが込み上げてくるものを感じた

俺は手に持っていた鍬を刀に変え

トカゲの群れに向かっていった

少し集中すればトカゲの動きが遅く見える

トカゲの攻撃をかわし

それに合わせてトカゲに攻撃をする

一撃でトカゲを倒すことでさえ楽に感じた

ただまわりから見ると

俺は尋常じゃないスピードでトカゲを

倒しているように見えていた

最後の一匹を倒す頃には俺の体は
トカゲの血で赤く染め上がっていた

しばらくすると、けが人などを
治療し始めた

ただ、俺と目を合わせようとする人は誰もいなかった
そこに、逃げ出していた人達も

何かを袋に入れて戻ってきた

袋の中身はトカゲの子供だった

その袋の中から一匹取り出し

その村人は突然、踏みつけ始めた

「おい、何やってるんだよ」

俺は必死に静止させようとした

「じゃまをするなこいつらのせいで

俺の妻と息子は死んだんだぞ」

「だからと言ってこいつ等に責任はないだろ」

「やかましい、こいつらのせいで村もめちゃくちゃになったんだぞ」

「なんだと、村を見捨てて逃げ出したのは

お前たちの方だろうが

トカゲと戦おうともしないで逃げ出して

弱い者に対して力を振るうだなんて最低な奴がやることだ」

「異端者のお前なんかそんなこと言われたくないね」

その言葉に対し俺はキレた

「ふざけやがって、お前の妻や息子が

殺されそうになった時お前は何をしてた

どうせ、逃げ腰なお前の事だ

その場から逃げ出したんだろ」

すると、ケイトさんがやってきた

「巧真君、言いすぎだ」

「でも・・・」

「みんながみんな強いわけではない
逃げ出す奴もいる

それに彼は村の掟に従っているだけだ」

「掟？」

「根絶だよ、この村に災いをもたらすものは根から絶つ

この村が長く平和だった理由さ

肉食動物がいなかった理由でもある」

「だからと言ってこいつ等まで殺すんですか」

「大人になってこの村を襲わない保障はどこにもない」

俺は言葉が返せなかった

「とにかく、私の家に戻ってなさい

体が汚れている」

「わかりました」

そう言っただけは周りからの冷たい視線を感じながら

広場から立ち去った

雨の日の前日から髪がよじれます

この村にやってきて初めて雨が降り始めた

「それじゃあ、巧真君これから

村の集会があるから行くね」

「はい、わかりました

俺も出かけるのでそれじゃあ」

トカゲの襲撃から何日かたった

そしてそれ以来、雨が降り続けている

俺はあれ以来、村の中心部には行っていない

行けば村の人たちから迫害される

そう思うと怖くて行けない

村長とも何か隔たりができたように感じる

ただ唯一、牛だけはいつも通りに接してくれる

雨が降り続くもんだから牛に小屋を作った

村長はここ毎日集会で朝になるとすぐに出かける

俺を今後どうするかを

話し合っているのかもしれない

集会で何を話してるのか聞きたいが

聞けずにいる

あれから、彼女も出てこないし

俺はどうすればいいのか悩んでいる

誰にも相談できないでいる

村はずれで一人で悩んでいると

誰かが後ろから近づいて来るのを感じた

「なんか用ですか？」

そう言っただ俺は後ろを振り返ると

雨除けを着たおじさんがいた

「よう」

「怪我はもういいんですか？」

「ああ、意外と傷は浅かったみたいだ」

「そうですか」

「しかし、異端者って言うのは便利だな

雨除けを着なくてもいいのか」

俺はあれ以来、少しなら力を使えるようになっていた

「ええ、これくらいの事なら」

雨が降っているのに俺は全く濡れない

雨が俺を避けて降ってくれる

いや、正確には俺が俺の周りに見えない壁を作った

「そっか」

「俺なんかと話をしてていいんですか？」

「どうして？」

「だって・・・」

俺が続きを言えないで困っているのを見て

「村人たちがお前をどう思おうと

俺には関係ない所詮は個人の価値評価だ」

「はあ・・・」

「それに物好きな奴が個々の価値評価だけで

相手を見下したりしていいと思っっているのか

それは物好きの名が泣くってもんよ」

「はあ、そうですか」

そんな、曖昧な返事をしていると

突然、本題をぶつけてきた

「巧真君・・・だったっけ？」

君さ、日本から来ただろ」

俺はその言葉に驚いた

「ど、どうして？」

「いや、この世界に無い

名前だなんて思ってたんだけど

お金だのマグロだの言ってたしさ」

「どうして、日本だと思ってたんですか？」

「まあ、決め手は刀かな？」

「ありや、どう見たって日本刀だ」

「いや、そうじゃなくて

日本だなんて言葉どうして知ってるんですか？」

「俺も、日本から来たんだよ

俺の名前は甘次郎、名前の由来は二十二男坊だから」

「にじゅっ・・・」

「なんだあ、その目は疑っているのか」

「いや、驚いているんですよ」

「いや、日本から来たって言っても

誰も信じてくれなくてさ君がいて本当に良かったよ」

「俺だけじゃ無かったんだ」

「そう思うと何となくホッとした

「ところで、また鍬を刀に変えたり

できないのか？」

「それが、できないんですよ」

「じゃあ、あの時の自分の状態はどうだったの？」

「あの時は、とにかく村を守ろうと必死で

おじさんが倒れた時に感情が

高ぶったような気がしました」

「君の力は感情で左右されるのか

じゃあその時の事を思い浮かべて

力を使ってみたらどうなんだ？」

「俺も試してみたんですけど

それで、俺の頭の上に見えない壁を作るだけなんですよ」

「そっか・・・」

「あの、俺も聞きたいことがあるんですけど」
「ん？なんだ」

「か、神様って信じますか？」

そんな質問をするとなんかやな顔をされた

「いや、そう言う訳じゃなくて

もちろん俺だって信じていませんよ」

「この世界では未来を見通すことができる
いや未来を創っている人がいる

それをこの世界では神と呼んでいる」

「未来を創る？」

「ああ、本当かどうかは知らないが
未来を自分の好きなように

変えられる人がいるらしい」

「俺は信じれません」

「俺だってそうだよ

でも、実在したら今回の事件も神によって
創られたものかもしれない」

「まさか、彼女が・・・」

「彼女？」

「俺、そんな人に会ったんです
ここにいてはいけない、

早くこつちの世界に來い

この村は滅ぶだとか俺に言っただけなんです」

「この村が滅ぶ」

「でも、それは俺が食い止めたよ」

「そうでもないかもしれない」

「え？」

「つまり、神はこの村を滅ぼすと決めたんだろ？
ってことは今度はトカゲではないもので

滅ぼすのかもしれない」

「まさか、運命じゃあるまいし」

「そうだよ、まさに運命だよ」

「でも、運命は変えられるんじゃない」

「まさか変えられると本気で思ってるのか？」

「変えようと思ってること」

「自体が運命だとは思わないのか？」

「それに、運命は何本にも枝分かれしていて・・・」

「それを神が一本にしたらどうなる」

「それが未来を創ると言うことだよ」

「そんな」

「とまあ、そんなことより

俺は村に行かなくちゃな」

「どうして？」

「なんでも、川の水があふれる寸前なんだそうだ」

「川？川なんてありましたか？」

「あるだろ、広場の真っ二つに割っているだろ」

「そんなのありませんよ」

それを聞いた甘次郎さんの顔色が変わった

「なんだって？」

「え？無いですよね？」

「そうか、もともとはなかったのか」

「は？」

「いいか、今は川が広場にあるんだ

そして俺達は昔からそこに川があると思っている」

「何を言ってるんですか？」

「いや、疑問に思ったことは前にもあったんだよ

俺は毎日のように日記を書くようにしてるんだ

そして日記にはある場所に

でっかい畑があつたと書いてあつたが

そんな場所にはそんな畑なんてないんだよ
そして、もともと、ないと俺も思っていた」

「どういうことですか？」

「神は未来だけでなく過去も創れるってことだよ」

「まさか、信じられない」

「どうして、信じない？」

「出来すぎてる、どうしていままで

そんな事に気付かなかつたんですか？」

「そんなの簡単だ疑問に思わなかつたからだ」

「どうして疑問に思わなかつたんですか？」

「過去まで修正されてるんだぞ

無理に決まってるだろ」

「俺はこれからどうすればいいですか？」

「わからん、それは自分で決めろ」

「あの、甘次郎さんは集会に出てるんですか？」

「ああ、出てるよ」

「そこでは、言ってい何の話をしてるんですか」

「今は川について話し合っている

この前まではお前について話し合っていたがな」

「やっぱり」

「そう落ち込むな、みんながお前を追い出せと

言ってるわけではない」

「そうなんですか？」

「まあ、村長だけなんだけどな」

「やっぱり」

「この村嫌いになつたか？」

「そんな事はないです、ただ

もう、この村に俺の居場所がないんじゃないかと思って」

「そうかもしれないな」

「でも、この村を滅ぼすわけにはいかない」

「それは無理だろ」

「これは運命だからな」

「何か手はないんですか？」

「無いと思うけどな、それじゃ俺は村に行ってくる」
そう言つて村の方に歩いて行つてしまった

俺はどうしたらいいんだ？

この村を出ていかなくてはいけないのか？
やっぱりこの村は滅びるのか

雨が強く降ってきた

広場では村人たちが一生懸命

砂袋を積み上げていた

「ケイトさん、これ以上は無理だ」

「大丈夫だ、まだ砂袋はある」

最後まで積むんだ」

そこへ、甘次郎が到着した

「ケイトさん」

「おお、来たかこの水位の高さを

どうにかしたいんだ何か案はないか？」

「んゝそうですね」

そう言つて川を覗きこもうとすると

突然、地面が揺れ始めた

「何が起きたんだ？甘次郎さん」

「俺は何もしてない」

ただ、水位が急激に減つていき
流れが穏やかになってきた

「どうなってる？」

「わからない」

ただ上流のほうを見ると

大量の土砂が流れているのが見えた

「やばい、鉄砲水だ」

「鉄砲水？」

「土石流だよ　！！」

みんな死にたくなかったら

なるべく川から離れて

これで村を滅ぼすつもりなのか」

そう言つて全員が川から離れ始めた

そんな中、一人川に向かう奴を甘次郎が見かけた

「巧真君・・・」

俺は土石流の周りを見えない

壁で覆い始めた

すべてを抑えることはできない

ただ村を守ればいいんだ

だから土石流のルートを変更させた

村から外れるようにした

地響きも納まり俺は一安心した

力を使うと疲れがたまる

周りからは村人たちの視線が痛かった

俺は一言も話さずこの場を離れようとした

すると、村長がやってきた

「俺、この村から出ていきます」

「どうして、ここにいればいいじゃないか

村のみんなには私からちゃんと説明するから

巧真君はこの村を二度も救ったんだぞ」

「だとしても

これ以上この村に迷惑はかけられません

「あ、あと牛のことよろしく願いします」

村長がまだ何か言いたそうだったが

俺はそれを見殺し広場から立ち去った

俺は向かうところは決まっていた

異端の門だ

しばらく進むと甘次郎さんが後を追いかけてきた

「どういふつもりだ」

「何がですか？」

「どうして土石流を受け流した

あれで村が壊滅しても被害はそんなに出なかった

これで村が滅んでも

復興にはそんなに手間はかからなかった

この後この村に何が起こるか分からないのに

それを君がまた守るとも言うのか？」

「大丈夫です

もう村に災いは起きないはずですよ

「なぜ」

「彼女はあなたは危険とこの村にいてはいけない

村は滅びると言ってたんですよ

つまり、俺がこの村にいる限り災いが起こるんですよ

俺がいなければ村は滅ばない」

「なるほど」

「運命だなんてこんなものですよ」

「それでもないぞ

結果的に君は向こうの世界に行くことには

変わらないんだから」

「そうかもしれないですね

まあ、ここにはもう戻りませんよ

それじゃ、行ってきます」

今まで雨を降り続けていた雲の間から
強い日差しが差し込み始めた
そんな中俺は異端の門へ向かって行った

苦しい時こそ満面の笑顔

俺は今、異端の門の前にいる
目の前から見るとやけにでかい
変な絵柄もなくただ石できている
押せば簡単に開くと言うが
本当に開くんだろうか

気合いを入れて力いっぱい押したのだが
本当に簡単に開いてしまい
バランスを崩すくらいだ
あたりを見回すとそこはもう草原ではなかった
目の前には一直線に伸びる石段があり
石段の左右には
商店街やレンガでできた家などが広がっていた
そして、背中に斧を持つ人や
腰に刀やナイフをぶら下げた武装した
人たちがやけに目立った

しばらく、ぶらぶらとしてっていると
細い道から広い場所に抜けた
その中心にはどでかい噴水があつた
思わず見惚れてしまうほどきれいな噴水だ
そんな事を思っていると後ろから方を叩かれた
振り返ると見上げてしまうほどの身長で
こわもて
強面の太ったおじさんが

「おい、商民のくせになに道を
塞いでるんだよ」

そう言つて片手で俺を持ち上げ

噴水の方に投げ飛ばした

噴水に激突した俺は

結構痛いぞ、なんて言う余韻には浸れず

気がつくとおじさんはナイフを俺に向かって

投げてきていた

俺はなんとか力を使い避けることができた

ナイフは噴水に突き刺さり

そこから水が漏れ始めていた

「ほう、レベル1はなんとか使えるみたいだな」

レベル1？何のことだ

けど、何となくだがあいつの正体がわかってきた

「あ、あなたは、異端者なのですか？」

「異端者だあ？てめえ、扉の向こうから来たのか」

「は、はいそうです」

そう言うと、突然背中から斧を取り出し

俺に襲いかかってきた

俺は力を使い避けようとしたが

力を使ったのにも関わらず

おじさんのスピードも落ちなくて

避けれないそう思った時

とっさに何もないところから

俺は刀を出し鞘で斧を止めた

斧の衝撃は重く片膝を付くほどだった

「ほう、変った力を使ってるな」

何がどうなってるんだ

周りの人間もただ見ているだけだし

誰も助けようとはしてこない

「見たことの無い刀だ

扉の向こうではそんなものを使って

生活をしているのか？」

この人はいったい何者なんだ
どうして、俺を襲ってくるんだらう？

駄目だ、頭がうまく働かない

「苦しいか？」

今樂にしてやる」

そう言つて少し離れ

何も無い所で斧を振り下ろした

すると何かが衝撃波のような物が

飛んでくるのが見えた

何かはわからないがとにかくあれに当たるとヤバイ

俺は片膝を付いた状態で刀を腰のあたりに構え

衝撃波が来るのを見計らい

鞘から刀を抜いた

刀によって衝撃波は横にそれ噴水に直撃した

噴水は粉々に碎けた大量に水が噴き出していた

頭がガンガンする

視界が揺れてくる

意識が遠のいて来る

あれをもう一度くらったら防ぎきれない

そう思った時、周りが突然蒸気に包まれた

周りも混乱している

そして、俺は蒸気で顔が見えないが

誰かに担がれて

その場から脱出した

「だ、誰だ」

「いいから、黙ってな

安全なところまで連れて行く」

俺はその後意識を失った

気がつくと俺は布団の上で寝ていた

屋根はやけに高い

横を向くと髪はショートで

背の小さい女性が

地べたに座りながら俺をジッと見つめていた

「うおっ　！！」

俺は驚いて飛びのいたが

彼女は眉ひとつ動かさず

無反応だったが

突然立ち上がり

軽い駆け足で部屋を出て行った

すると、向こうで何やら会話が聞こえてきた

「ん？気が付いたか

よし、今行く

わかったから服を引っ張らないでくれ」

二つの足音がこっちに近づいて来る

一人はさっきの女性だったが

もう一人は髪は坊主に近く

身長も俺と同じくらいかな？

体格はがっしりしていて

おそらく三十代前半だろう

「気が付いたか？」

「ここは、どこだ？」

「宿泊施設だよ

俺の家は宿屋なんだ

安全な場所まで連れて行くって言ったろ？」

「俺を助けてくれたのか？」

「ついでに怪我の治療もな

よくもまあ、噴水に頭ぶつけておいて

あそこまで戦ったな」

頭に手をやると包帯がついてる事に気が付いた

「最初っからフラフラしてたのに

あいつの攻撃を防いだのはすごかったな」

「あいつはいつたい何者なんだ？」

「知らないのか？」

本当に扉の向こうから来たのか」

「ああ」

「あいつは^{ソルジャー}兵士だよ

しかも結構有名だな」

「兵士？ここでは戦争でもあるのか？」

「ないない」

「じゃあなんで兵士なんて」

「戦争があれば戦うかもしれないけど

今の兵士達の仕事はリングで戦うことだよ」

「は？」

「とりあえずついて来な見してやるよ

ああ、それから異端者だなんて言葉

使っんじゃないぞ

そんなの使うのは扉の向こうから来たやつだけだ」

「ならなんて言えばいいんだ？」

「そうだな能力者かな？」

「なんで疑問形なんだ？」

「ここにいる人が全員そうだからな

これと言って名称が無いんだよ」

「それじゃああなたも？」

「そうだよ、ちなみに俺の名前はテニム

この子はお前と同じ宿泊者でチコ」

「俺の名前は巧真」

「変わった名前だな」

「ここではそうだな」

みんな、能力者なのか」

「そうだよ、異端者だなんて呼ばれたら
ちよつとムツとくるぜ」

「そうか、ごめん」

「いいさ」

それより早く行こうぜ闘技場」

「あ、ああ」

「チコお前も来るか？」

すると、チコは首を横に振るだけで
それ以外の動作は何もしなかった

「そうか、じゃあ留守番よろしくな
ほら巧真行くぞ」

そう言つて俺とテニムは出発した

「なあ、テニム？」

「なんだ？」

「テニムの力つてなんなんだ？」

「はあ？なんで？」

「いや、聞いてみたかったから」

「力つて言つても色々あるぜ」

まあ、巧真を助け出す時にも使つたな」

「あの蒸気か？」

「そう、でもあれは水が無いと

出せないんだよ」

「そうなんだ」

「けど、巧真の能力の不思議だよな

あの刀はどこから出したんだ？」

「いや、俺もあの時は必死だったから」

「もしかして、自分の力が何かわからないのか」

「そう言ったらそうだな」

使える時と使えない時があるんだよ

使える時は体が教えてくれる」

「変わってるな」

「そうなの？」

「周りの奴等はヒョイヒョイ使ってるけどな

まあ限界はあるけど」

「そっぴゃ

あの斧を持っただおっさん

力を使ってもゆっくりに見えなかったな」

「はあ？そんなの当たり前だろ

向こうも使ってるからだよ」

「ああ、そうか」

「本当に何も知らないんだな」

「まあね、来たばっかしだから」

「そうだな

ああ、そんな話しているうちに

着いたぞここが闘技場だ」

目の前を見ても何もなかったが

ただ下を見ると

地面にコロッセウムが埋まっているかのように

いや、地面を掘ったのか？

とにかくコロッセウムを

上から見ているような感じのものが

下に広がっていた

「すごい」

「だろ？」

「でも、ここでもしかして
戦いでもやるのか？」

「そうだよ」

「そんな、死人が出るんじゃないのか？」

「いや、めったにないな

その前に相手が降参するか

審判が止めに入る」

「そうなんだ」

「ああ、だから兵士たちは命張ってる

俺達が一番偉いと思って

俺達商人を見下すようになったのさ」

「そうだったのか」

「さてと、帰るか」

「もう帰るのか？見ていかないの？」

「見ていきたいのか？」

俺は何と言うか血なまぐさいのは苦手だ

「ああ・・・いやいいわ」

「じゃあ、帰ろう」

帰り道は闘技場の中の話や

この街について色々と聞かされた

「ところでチコの事なんだけど」

「どうかした？」

「テニムの妹じゃないのか？」

「いや、道端で倒れてるのを見かけて

拾って来たんだよ」

「なんだそれ？」

「いやゝなんか小動物みたいでかわいそうでさ」

「捨て猫かよ！！」

チコの能力っていったいなんなんだ？」

「それが俺も知らないんだよ

力を使っているところ見たことないしな

あと声を発してる所も・・・」

「俺、チコに嫌われてるんじゃないかな？」

「そうか？俺には好かれてるように

見えるけどな」

「どこが？」

「チコつてめつたに部屋から出てこないんだぜ

それなのに巧真が気が付いた時に

珍しく部屋から出て来て

俺を呼びに来ただろ」

「へえ・・・え？」

「どうした？」

「チコつて違う部屋があるんだよな？」

「ある訳ないだろ

そんなに俺の家がでかく見えただか？

同じ部屋だぜ」

「うそ」

そう言えばあの部屋もう一個

布団があつたような気が・・・

テニムの顔を見るとやけにニタニタしているような

「大丈夫だ

若い男女が二階で何をやっていようが

俺は気にしません」

「冗談だろ

いくらなんでもチコはまだ若いだろ」

「いや、巧真

お前も若いだろ

どう見たって二十はいつてないだろ」

確かに十八歳です

「たしか、チコ

名簿には十九とか書いてあつたかな？」

「えっ俺より年上？」

「それ嘘だよ絶対嘘だ経歴詐称だよ」

「いやゝわからないぞ

まあとにかく家に着いたら

力について教えてやるよ」

「なんだかやけに落ち込むな・・

白い砂地は眩しい

あれからしばらく経つが
宿代について心配になったが
どうやら、この世界も紙幣はないらしく
家事などを手伝ってくれれば
いくらでもいていいらしい
テニムから力について色々聞いたが
よく理解できなかった

ただほとんどの人が

何も無いところから何かを取り出すことはできないらしい
無から有は生まれない

だから俺の能力はまれらしい

チコについてだが一度も声を発さず

テニムと俺はもしかしてチコは

声が出ないんじゃないか？

と話し合いながら枕カバーやシーツを取りに

部屋に行くとチコはどうやら

着替えをしていたらしく

チコが一瞬だが小動物が鳴いたような声を出した

「声出せるんじゃないん

かかわいい声出しやがって」

なんて俺が間抜けな事を言ってるうちに

チコは近くにある硬いものを取って俺達に

投げてきた

テニムはうまく避けれたが

俺は顔面に花瓶をクリティカルヒットさせた

テニムは逃げ出したが

俺はその場で倒れていた

気がつくとチコはすでにワンピースを着ていた

「いや、悪気があったわけじゃないんだ」

チコは頬を膨らませ顔は赤くなっていた

「いやあの、許してくれ」

そう言うと

チコはコクリとうなずいた

「あの喋らないの？」

またコクリとうなずくだけだった

「そっか、さあ朝飯にしよう

準備できたら降りて来い」

そう言つて俺は降りて行つた

「おい、大丈夫だったか？」

「頭が痛いかな？」

「また包帯をまいとくか？」

「いや、いいや」

「そうかい

まあ噴水にぶつかったときの方が

血を流してたからな」

「あの時は死ぬかと思つたよ」

「確かにな」

「なあ、この後、闘技場にでも行かないか？」

「俺は別にいいけど」

「じゃあ決まりな

さっさと飯食うぞ」

そう言つてやけに嬉しそうに飯を食っていた

「おい、早く行くぞ巧真」

「ちよつと待てくれ」

チコお前も行くか？」

チコはただ首を横に振るだけだった

「そっかわかった」

そう言つて俺はテニムの後を追つた

「ところでどうして闘技場に行こうだなんて
言い出したんだ？」

「今日は闘技場が一般開放されるんだ」

「中に入れるってこと？」

「そう言うこと」

「へえ、面白そうだな」

「だろ？」

武器とかも木製だけど使つて遊べるんだぞ」

「まあ俺は本物を持つてるけどな」

「でも出せないだろ」

「まあね」

いつか出せるようになるんじゃない？」

俺の力はだんだんと成長していた

今では遠くのものに触らずに

近くに寄せることもできる

テレビのリモコンが届かない時に

この力があつたら便利だろうな・・

まあ、この世界にテレビはないけど

あと壊れたものを修復する事もできるようになっていた
ただ、刀を取り出すことは相変わらずできなかった

闘技場は上から見ると凄かったが
下から見るともっと凄かった

周りは観客席に覆われ

当たり前だが屋根はなく

地面はすべて白い砂が敷き詰められていた

「おい、巧真」

そう言つてテニムは俺に木の剣を投げてきた

俺はそれを掴んだ

「勝負だ勝負」

そう言つてテニムは手招きしてきた

「いいよ、参ったつて言わせれば勝ちなんだろう」

そう言つて俺は剣の形を

一振りして木刀に変えた

「おお、すごいな」

「まあね、行くぞ」

そう言つて俺はテニムに飛びかかった

俺がこんなに動けるとは思つてもいなかった

右からの攻撃をかわし

突きをくらわす

テニムは突きをかわし

素早く遠くに下がる

最初は悪ふざけのつもりだったが

やっていく間にだんだんと面白くなってきた

テニムもかなり強い

互いに遊びでやっているのに

知らない間に周りには観客が集まってきた

しばらくして

互いにつばぜり合いになり

同時に後ろに下がり

俺はもう疲れたので

「テニム、もういいでしょ？

疲れたよ」

「ああ、そうだな」

そう言つて互いに刀を下した

それで俺は一礼しようとする

「敵から目を放すなあ」

そう言つてテニムは俺に襲いかかってきた

テニムは頭上から剣を振り下ろしてきた

俺はそれを刀で受け止め

そのまま刀を滑らせ

テニムの腹に一撃を喰らわせた

「胴　　！！」

テニムはその場で片膝をついた

周りからは

「いいぞ、兄ちゃん

久しぶりにいいもの見させてもらった」

などと歓声があがった

「いってえー最後のー撃

取ったと思つただけだな」

「テニム大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ

けど巧真よくあんなに動けたな」

「うん、俺もびつくりしているよ
剣道だなんてやったことないのに」

「剣道？」

「いや、なんでもない」

「今度その刀の使い方教えてくれ」

「ああ、いいよ」

そんな話をしていると

俺とテニムに向かってナイフが飛んできた

俺は手で取りテニムは剣ではたき落していた

「商人ごときがなに盛り上がってるんだよ」

そこにはいつしかの

太ったおっさんがいた

ああ、あと強面・・

「いきなり何するんだよ

今日は一般開放の日のはずだ」

「一般開放だなんて俺は認めてねえ

ったく俺達の聖地に商民ごときが

勝手に入ってきやがって」

なんとなく俺も一言いいたくなり

「図々しいにもほどがあるだろ

帰れデブ」

だなんて言ってしまった

すると、おっさんの顔がだんだんと赤くなってきた

横ではテニムが爆笑している

「どうした？」

聖地の砂が熱くてこんがりと焼けてきたか？」

周りにいる人たちも笑い始めていた

するとおっさんが俺に指をさし

「貴様、次の試合で俺はお前を指名する」

意味がわからず無言でいたが

周りがどよめき始めた

テニムも笑う事を止め真剣な表情になっていた

「楽しみにしてな」

そう言い残しおっさんは立ち去って行った

「テニム、どういうこと？」

「んゝヤバい事になったな」

「まじで？」

「うん、闘技場であいつと戦わないといけなくなってしまった」

「きよつ、拒否することは？」

「できない、闘技場の中で戦いを

申し込まれた場合、拒否することはできないんだ

兵士が商民に戦いを挑むだなんて

こんなの前代未聞だ」

「なんだよそれ・・・」

落ち込む俺を横目にテニムは

「よし、まあそうと決まったら練習だ」

なんてやけに気合いが入っているし

落ち込みながら

家に帰るとすぐにテニムは練習を開始した

「いいか、巧真まずは基本中の基本

レベル1からだ」

「ところで気になってたんだけど

レベルって一体何なんだ？」

「そこから説明しなくちゃいけないのか」

そう言つてテニムはかなりうなだれていた

「いいか、レベルって言うのは

力にも色々とランクがあるんだ例えば目に集中して物の動きがゆっくり見えるのはレベル1

ある物がある所に瞬間移動するのはレベル2」

「ある物がある所に？」

「例えば、あそこにチコがいる」

チコが珍しく一階に下りてきていた

そのチコに対しテニムは手を向けて

「あそこにいるチコを

目の前に持つてくる」

向こうにいたチコが一瞬消え

目の前に現れた

チコは自分が瞬間移動したのにも驚かず

ほとんど無反応だった

「おお、すごい」

「でも、これ難しいんだよな」

「どうして？」

「どうしてつてそりゃあ、ねえ色々と・・・」

何やら曖昧な答えが返ってきた

チコがまた向こうに歩き出そうとしていた時

「俺もできるかな？」

「いや、やめておいた方がいいと思うぞ」

「なんで？」

そういいながら俺はすでにチコに手を向けて力を発動していた

それを見たテニムは黙って風呂場に向かっていた

その意味がわかった時には遅かった

チコを目の前に持つてくることには成功したただ服を持つてくることに失敗した

「あゝっ」

その瞬間、俺は突き飛ばされ

チコの往復ビンタの嵐を食らっていた

そこへテニムが現れチコにでかいタオルを一枚差し出した

チコはそれを羽織り二階に駆け上がっていった

「おい、大丈夫か？」

「顔と心が痛いジンジンする・・・」

「そうか・・・ところでチコの服は？」

あたりを探しても服がどこにもなかった

「俺、どこかに飛ばしちゃったのかな？」

「なあ、チコってワンピース以外の服

着てた事ってある？」

「まさか、あれしか服無いとか？」

「お前・・・どうするんだ？」

チコをこれからタオル一枚で生活させる気か？」

「ああゝそれもいいかも・・・

って何言ってるんだ俺

だ、大丈夫だ

俺が何も無いところから何かを取り出せばいいんだ

有から無を・・・じゃなくて反対だ

無から有を作りだす」

そう言って俺は集中し

右手である物を掴み取り出した

「おお、さすが上達しているな巧・・・真？」

俺の右手にはメイド服が握られていた

「な、なんだ？このヒラヒラな服は？」

「い、いや何でもない

ちよつと失敗したらしい今度こそ」

そう言って掴みだした物は

「セーラー服かぁ・・・」

「なんだぁ？そのセーラーって」

「俺ってそういう趣味だったのか？」

「ま、まあこれ渡しに行ったらどうだ？」

「わかった・・・渡してくる」

二階の扉を開けると

俺がさつき直しておいた花瓶がまた頭を直撃した

「あの・・・申し訳ございませんでした」

ふ、服は私が選んだものでございます

お気に召しませんでしたら私目に注文してください

結構でございます。何なりとお申し付けください

それでは失礼します」

そう言つて俺は服を置き一階に下りて行つた

「お、おいどうだった」

「俺にぶつけられる花瓶って可哀想

そして俺も」

「??」

まあとりあえず力の説明を続けよう」

「・・・はい

ところで俺のこの能力ってレベルなんぼなんだ？」

「うーん、俺も考えてたんだけど

よくわからないな」

「じゃああのおっさんの斧から出てくる衝撃波みたいなやつは」

「あれはレベル2だよ

俺も何とか出せるからな」

「じゃあ、俺も出せるのか？」

「駄目だ、やらなくていい」

「いや、わかつてるよ

それじゃあ壊れたものを直すのは？」

「あれはレベル1だ」

「テニムの蒸気を発生させる能力は？」

「あれは俺の個人能力」

「個人能力・・・だったら俺のあの能力も」

「いや、巧真の力によくわからないけど

そう決めつけるのも駄目だろ」

「そっか難しいな」

「そうか？」

すると、上から降りてくる足音が聞こえた
俺とテニムは階段のほうを見ると

そこにはセーラー服を着たチコがいた

それをまじまじと見ていたテニムは

「おい、巧真」

お前の服のセンス結構いいかもな」

「ええ、まじで？」

「ああ・・・いいかもしれない」

男は黙ってローキック！！

力の使い方については

テニムから大体の事は教わった

俺は今、闘技場の中いる

会場の入口から顔を出すと

観客席はいっぱいになっていた

「なあ、テニム

観客席ってこんなに混むものなのか？」

「そりゃあ、いつもより多いだろ

商民対兵士だからな

見物なんだろ」

「なんだよそれ」

「まあ、商民はみんな味方だと思っていいぞ

商民が兵士をボコボコにするのを

見たいとか言ってたぞ」

「兵士は逆に商民がボコボコにされるのが見たいんだろ」

「まあな、よくわからんが

ストレス解消になるんだろ」

「ところで俺防具とか付けなくていいの？

向こうのおっさんは色々付けてるぞ」

「いや、付けてたって無駄だろ

直撃は避けるよ

下手したら死んじゃうぞ」

俺はなぜか普段着に木刀一つだった

「いや、無理だって

そもそも武器もないんだぞ

武器持参だなんて聞いてないぞ」

あれから色々試したが

結局、刀を取り出すことができなかった

「大丈夫だ窮地に立たされたら

出すことができるさ」

「はぁ、帰りたい・・・」

「頑張れよ応援してるから

チコも珍しく外に出て見に来てるんだから」

あれからチコはほとんどの時に

セーラー服を着るようになった

メイド服姿も見てみたいが・・・

「ああ、チコ

俺が死んだ時は声を出して泣いてくれよ」

「ほら、そんな冗談を言つてないで

向こうも中に入ってきたぞ

木刀持ったか？」

俺達の反対側の入口からおっさんが

威勢良く入場してきた

「はぁ、じゃあ行ってくるか

あのさ最初の攻撃を防がれたら

俺、降参するからな」

そう言つて俺も闘技場の中に入つて行つた

観客は俺が入場してくると

歓声が一気に上がった

地面が揺れてるようにも感じた

「うわっ、凄いな」

そのまま、中央に進んでいくと

審判が長々と俺とおっさんの説明をしていた

その間、強面のおっさんが

「おい武器はどうした？」

木の棒だけじゃないか」

正直に言うのはやめておこう

「いや、おっさんなら

これで十分かなって思っ

ても、もう少し小さくても良かったかな？」

すると、おっさんはまた

だんだん顔が赤くなってきた

「ふざけやがって

まずは参ったなんか言わせないために

喉を潰してやる」

「わかったから

早くかかってこい一撃で終わらせてやる」

「舐めやがって」

そう言っておっさんは斧を両手で構えた

審判が太鼓を鳴らした

その瞬間おっさんが俺に向かって

飛びかかってきた

「くたばれっ商民」

俺は木刀を腰に構え

相手が近くまで来ると

一呼吸置き

木刀を横に振った

すると、木刀から

衝撃波が出てきた

それをモロに喰らったおっさんは

おっさんが出てきた入口まで吹き飛ばされた

観客は何が起こったのかわからないのか

とても静かだった
審判はおっさんの様子を見に行き
頭の上で両手で振った
戦闘不能の合図だ
観客がより一層盛り上がった

「はい、どうも」

そう言つて俺は入口の方に向かった
そこにはテニムとチコが待っていた

「おい、やったじゃん」

「最初の一撃が当たってくれてよかったよ」

「お前は商民のヒーローだぞ」

「いや、良かった」

「けど、これからしばらくは

闘技場通いだな」

「え？なんで？」

「だって、あのおっさんを倒したんだぞ

兵士たちはあんなヒョロイ奴なんか

簡単だなんて思つて挑戦しに来るに決まってるだろ」

「冗談だろ？」

「本当だよ

まあ、頑張つて10連勝したら神に会えるらしいぞ」

「え？」

会場では観客席から

降りてきた兵士たちが俺に挑戦を求めてきていた

「まあいままで、最高が

さっきのおっさんの5連勝かな」

「神つてあの神？」

「どの神も何も無いだろ

彼女の事だよ」

「会ったことあるの？」

「ああ、ごくまれにだけ街中歩いてるぜ

一度しか見かけたことないけど」

神って一体なんなんだろう

「ほら、それより

早く指名してこい拒否権はないぞ」

「まじかよ・・・

なあ、チコもし俺が10連勝したら

笑顔で頑張ったねって声に出して言ってくれる？

まあ冗談だけど・・・じゃあ行ってくる」

そう言って会場に向かった

チコはしばらく動かなかったが

コクリと頷いたところをテニムは見逃さなかった

俺が会場に入ると

兵士たちは次は俺だと言わんばかりに

俺に向かって猛アピールしてきた

おそらく、俺と戦ったら

一勝は楽に取れると思ってるんだろう

兵士の数を数えてみると

ちょうど10人いた

偶然かそれともこれも神が創ったのか？

「おい、選ぶの面倒くさいから

全員でこい

今日は商民が兵士をボッコボコにする

「記念日にしてやる」

そう言つて俺は軽く手招きをした

太鼓が鳴つた瞬間

兵士たちが俺に襲いかかつてつきた

はじめはただ向こうの攻撃を避けるだけで良かった

目の前に剣を二本持った奴と

槍を使う兵士がいたが

互いに一步も譲らず俺に攻撃をしてきたため

武器が交差したり

互いに傷つけあったり

二刀流に関しては剣を一本落してしまった

グダグダになっていた二人に

さらに追い打ちで

後ろにいた兵士の一人が大量にナイフを

俺に向かって投げてきた

俺にはなんとか避けたが

槍と二刀流はおそらく実力の半分も出さないうちに

飛んできたナイフのお陰で戦闘不能になった

その瞬間を見計らつてか

また丸々と太つた奴が俺に突進してきた

向こうではナイフ野郎が

またナイフを投げていたので

飛んできたナイフを何本か掴み

突進してくる奴に向かって投げた

避けようとしたみたいだが

ナイフが一本脚に刺さり

怯んだ瞬間、俺が木刀で思いつき

殴つた

所詮は即席で編成された仲間
チームワークもなければ

団結力もない

確かに一人ずつ戦うと厄介かもしれないが
まとまってかかってくれば

うまくいけば共倒れをしてくれる

それに気づいた敵もいて

残りの奴等に言おうとしていたが

ナイフ野郎を蹴り飛ばした時に

偶然そいつに当たってしまい

気を失っていた

そんな感じで四人まで倒せた

客席からはあと一人コールが叫ばれていた

最後の一人は

さっきまでの戦いには参加しないで

ずっと見ているだけの奴だった

目も髪も赤く

見るからに怖そうなやつ

身長は俺と変わらないのに

威圧感があった

向こうは全く動く気配はなかった

「どうした？ かかって来ないのか？

早くこいよ」

「相手を怒らせるように発言したのも

この結果が見えていたからか？」

「まあね

怒れば攻撃も単調になるし」

「自分で考えたのか？」

「いや、テニムに聞いた

それよりかかって来ないの？」

そいつはよく見ると

武器を何一つ持っていなかった

「俺疲れちゃったからさ

降参してくれない？」

そう言つてため息と一緒に下を向くと

「テニムに教わらなかったのか？」

敵から目を離すなど」

「え？」

気がつくと

離れた所にいたはずの赤髪が

目の前にいた

俺はとつさに木刀で防御しようと思ったが

赤髪は手刀で木刀を切り落とした

「んな、馬鹿な」

俺は赤髪との距離を取ろうと

後ろに身を引いた

赤髪の両手はなんと炎に包まれていた

「なんだよ それ熱くないの？」

その返事は聞けず

ただ俺の方に手を向けて

火の玉を飛ばしてきた

何とかかわせたが

一瞬にして赤髪は巧真の前に移動した

そして巧真の顔の目の前に手を置き

火の玉を飛ばし爆発させた

会場にどよめきと叫び声が充満した
巧真の顔から黒い煙が上がり
その場で立ち尽くしている
赤髪は勝った余韻に浸っている

ところが頭から黒煙が上がっている体が
赤髪に下段蹴りを喰らわせた

完全な不意打ちを食らった
赤髪は体制を崩し
立て直そうとしていた

その時、赤髪の喉元に刀が突きつけられた

「動くなよ」

「お前の負けだ」

「あの炎をどうやって防いだ
絶対に直撃したはずだ」

「いや、見えない壁って炎にも使えるんだな
初めて知ったよ」

「はあ？なんだそれ」

「まあいいじゃん」

「とにかく、お前の負けだ降参しろ」

「誰がするかよ」

「俺は諦めが悪いんだ
次で決めてやるよ」

また赤髪が消えたと思うと
すぐ横に現れ手刀を振り下ろしていた
「しまった・・・」

赤髪の手刀は刀と俺の腕を切り落とした

実は左利きです

右手が切り落とされた

そこから大量の血が噴き出してきた
左手で止めようとしても止まらない
声が出なくなるほど痛い

「腕が・・・くそっ」

赤髪は俺にとどめを刺そうと

手刀を頭めがけて振り下してきた
避けないと

体が動かない

誰かに押さえつけられてるようだ

「くそっ、放せ」

速く避けないと・・・

あれ・・・おかしいな

右手はないはずなのに

誰かに握られている感触がある
誰だ・・・

気がつくと俺は

テニムの宿で寝ていた

「あれっ？」

やけに部屋が散らかってる

横ではチコが必死に

俺の右手と体を押さえていた

「チコ？お前何やってるんだ？」

チコと目が合うとチコは俺の体から離れた

「おお、目が覚めたか

いや、それにしてもひどい揺れだった」

部屋の向こうからテニムが現れた

「どうなってるの？」

「何が？」

「俺、赤い髪の奴と戦ってた」

「ああ、おしかったな」

でもバイロが相手じゃ無理だったな

あそこまでやるとは思わなかったよ」

その時、俺はそいつに右手を切られたことを思い出した

「そうだ、右手」

右手を見るとちゃんとそこには右手が付いていた

「あれ？」

「ああ、右手はチコが治してくれたんだよ」

理解ができない

「ああ覚えてない？もしかして」

「全く」

テニムは戦いの時の事を教えてくれた

俺が刀と右手を切られたあと

赤髪は俺を選手の入口まで蹴りで吹き飛ばし

それを見た審判が戦闘不能の合図を出し

試合は終了した

とにかく止血をしなくてはいけなかったが

どうやら俺は意識は失っていたが無意識のうちに

力を使って止血をしていた

宿まで運ぼうとすると

チコがいなくて

あたりを見回すと会場の方から

俺の右手を両手で抱えて

走ってるみたいだがトテトテとゆっくり

こっちに戻ってきた

そして俺の腕に右手を近づけ
力を使いくっつけたらしい

そのほかにも擦り傷なども治してくれたらしい

「そうだったのか

ありがとうな、チコ」

すると、チコはぎこちない笑顔で

「が、頑張ったね・・・」

そう言っているとだんだんと顔が赤くなってきた

「え？今、喋った？」

なんで、俺ってこんな返事しかできないんだ

今回はビンタではなく

グーが飛んできた

そしてチコは部屋を飛び出し

一階へ降りて行った

「おい巧真、もっと気の利いた返事はできないのか」

「いや喋った事に驚いちゃって」

「チコは腕だけじゃなく

刀も直してくれたんだからな」

「俺の刀、消えてないの？」

「ああ、一階に置いてあるぞ」

「それにしてもやけに部屋が散らかってるな

なんかあったの？」

「なに言ってやがる

お前がやったんだぞ」

「俺？」

「巧真の力は

どうやら俺達とは違って

感情で左右されてるみたいだな

お前がうなされてるとき

勝手に力が発動したんだよ

まったく地震が起きたかと思っただよ

チコも何とか抑えようとして必死になって

お前を押さえつけてたんだぜ」

「そっだったのかごめん」

「俺に謝るなよ

チコにちゃんと謝ってきな

腕は治してくれるしお前に抱きついてくれてたし」

「おい、表現が違っぞ」

テニムの目が突然笑い始めた

「それとお前の服の着替えも

やってもらっただけからな」

「はっ？」

「あれ？知らなかった？」

おまえ二日間も寝てたんだぜ

チコって頼んだら断れない体質だからさ

頼んどいたんだよ」

顔が熱くなってくるのを俺は感じた

「ははっ冗談だよ、そんな事頼まないから」

「本当だろうな？」

「さあ、どうだか・・・」

テニムの顔もニタニタしてきた

「とにかく、ちゃんと

謝ってこい色々のご迷惑をおかけしましたってな」

「ああ、わかった」

そう言っただけで部屋を出て行こうとしたが

テニムがまだニヤケているから立ち去り際に

「本当に着替えはさせてないんだろっな？」

「大丈夫、大丈夫」

下に降りると

階段にチコが座っていた

「チコ」

そう言つて横に座った

相変わらず無表情のままだった

「いや、悪かったな」

気の利かない返事なんかしちゃって」

「別に、期待してなかった」

「・・・」

落ち着け喋った事に違和感を持つんじゃない
そこには触れないように話を進めていくんだ

「う、腕だけじゃなくて

刀まで直してくれたんだってな

ありがとう」

「直すのに腕も刀も関係ない

どちらも同じようなこと」

「そ、そうか・・・」

あと俺がうなされてる時に・・・」

その続きを言おうとすると

チコの顔がだんだんと赤くなってきた

「どうした？顔が赤くなってきたぞ」

「別に何でもない」

その時、テニムがやけにニヤニヤしてた事を
思い出した

「もしかして、うなされてる時に

俺何かやらかしたのか？」

「別に・・・ない」

そう言つて小刻みに震えてきた

「いや、本当の事言つてくれ

何をしたのか全く知らないんだ教えてくれ」

「だ・・」

「だ？」

しばらく止まっていたが

突然、俺に顔を向け

なんともまあ、乙女チックな顔と大声で

「抱きついてきた　！！」

「なに　？」

それを階段の上で話を聞いていたのか

テニムが大爆笑する声が聞こえる

「ど、どうということ

なえ誰が誰を？チコ教えてくれ」

チコは口を開こうとはしなかった

「巧真、俺が説明してやる」

笑いすぎたのか

涙を拭いながらテニムが階段を降りてきた

巧真を闘技場から宿へ運び終わった後
テニム
俺は夕飯の支度をするため

一階の台所にいた

しばらくすると突然、地面が揺れだし

皿が飛び出したり

とても立っていられる状態じゃなかった

ところが、地面の揺れが突然収まり

宙に浮いていた皿は地面に

たたきつけられて割れた

これはただ事じゃない
宿が崩れるかもしれないと思い
巧真達を非難させようと
二階に上がりドアを開けると
巧真がチコを思いつきり抱きしめていた
「はあっ？何だよそれ意味わかんないし」
「話はちゃんと最後まで聞け」

俺も一瞬、何が何だか分からなく
その場でフリーズしてしまった
ただ、チコが
恥ずかしかったのか
息ができなくて苦しかったのか
どちらかはわからんが
顔を真っ赤にして
巧真の背中を必死にタップしていた
「それは、明らかに苦しかったからだろ」
「話の途中に首を突っ込むな　！！」

で、何とか巧真から
チコをはがし終えたんだが
何があつたのかチコに聞いても
何も言ってくれないから
ここからは俺の勝手な推測なんだが
巧真が突然、布団の中でうなされた
それを心配になったチコは様子を見に行き
巧真の枕元まで行くと
突如、地面が揺れた
この宿、ボロいから崩れるかもしれない

そう思ったチコは

「自分の宿、あっさりとボロいって
言っちゃったぞこの人」

「うるさいチコが思った事を代弁してるんだ」

ボロ宿が崩れるかもしれない

そう思ったチコは

巧真を連れて外に出ようと思った

そして、何とか巧真の

上半身を起こすことに成功した

あとはお姫様だつこで・・

「おい、やめてくれ普通逆だろそれ」

「うるさーい　！！」

そう思った瞬間

突然、巧真がチコを力強く抱きしめてきた

何が何だか分からないが

嬉しいような、理解ができないような

混乱と興奮のなか

揺れがピタリと収まった

だが巧真は全く離そうとはしない

だんだん息苦しくなり

顔も赤くなり

いや、もともと赤くなっていたが

より一層赤くなり

声を出し助けを呼ぼうとしても

声が出ず

ただひたすら巧真の背中を

タップし続けてる所に

急いで階段を駆け上がってきたテニムが登場した

「そうなのか？チコ」

チコはコクリと頷いた

「俺、そんな事をしていたのか」

かなり落ち込んでいると

テニムが何とか話を変えようと

一階に置いてあった

刀を拾い眺めながら

「しかし、本当に見たことが無い武器だな」

「へえそお・・・」

「おいいつまで落ち込んでやがる

ほら、俺にこの武器について教えてくれ

扉の向こう側の武器なのか？」

「いや、俺の国の武器だよ

日本刀って言うんだ詳しい事は知らないけど」

「変な名前だな」

「そうか？俺はしつくりくると思うけど」

「まあ、頑丈そうだな」

「そう言えば、赤髪の奴

テニムの事、知ってるようなこと言ってたぞ」

「そうだよ俺の友達だバイロって言うんだ」

「え？」

「ただ、あいつは上の階の住人だから

下の階に下りてくるだなんて思いもしなかったよ」

「上の階？」

「ああ、そうか知らないか実は」

そう言いかけた時

宿に誰かがやってきた

「よお、テニム久しぶり」
そう言ってバイロがやってきた

石段は叩いて壊す？

「よう、テニム久しぶり」

そう言つてバイロと言う奴がやってきた

「おう、久しぶりだな

それにしてもあの戦いはやりすぎだぞ」

「いいんだよ

あれくらいやっておかないと」

「ズルまでして勝ちたかつたのか？

まったく大人げない」

え？ズル？

「あつ、やっぱりバレてた？」

「当たり前だろ

リムと一緒に来てたんだろ」

「え？ちよつと

ズルって何？いかさま？」

「なんだ、もう意識を取り戻したのか？

とにかくテニム後で上の階に來い待つてるから」

「おお、わかつた」

「じゃあな」

そう言つて赤髪は出て行つた

「テニムなに今の？」

「どの事だ？

上の階の事かそれともバイロの事か？」

「りよ、両方だよ

ズルって何？上の階って何？」

「じゃあまずは上の階から説明するか

巧真は扉の向こうから來た時、目の前に

一直線に伸びる石段が無かったか？」

「ああ、そう言えばあったような」

「で、その階段を上ると」

「このような街があるんだよ」

「それが上の階？」

「こことどう違うの？」

「んゝ能力者のレベルが違うとか

あと、強面のおっさんは上の階には行けないな」

「どうして？」

「言ったら、レベルが違うって

レベルが低いと上に上がれないんだ

上がろうとすると

階段の目の前に見えない壁ができるんだ」

「レベルが上がれば上に行けるってことか」

「いやレベルが上がるだなんてことはない

潜在能力ってやつだよ限界があるんだよ」

「バイロは上の住人なのか？」

「ああ、俺も元そうだ」

「どうして、降りてきたの？」

「いやゝこの方が俺にあつてると言うか

なんとなくだ」

「じゃあ、ズルって言うのは？」

「ああ・俺からは言いにくい

バイロから聞いてくれ」

「なんだよそれ」

「まあ、ズルが無ければ

巧真の勝ちだったかな？」

「マジで？」

「まあ、バイロも油断してたしな」

「なんだ、なら俺10連勝してたんじゃない

「おしかったな」

「なに言ってるの」

「あれ勝ってても2連勝だろ」

「え？」

「確かに十人と戦ったけど」

「戦った回数は一回だから」

「一回としかカウントされないぞ」

「そんなあ、俺頑張ったのに」

「まあ、お陰さまで商民の立場がよくなったのは事実だよ」

「俺はてつきりあと10人倒せば神に会えると思ってたのに」

「俺がちゃんとルール教えておけばよかったな」

「ああ、なんだか疲れがどつと来たような気がする」

「まあとにかく、俺はちよつと上の階に行くけど巧真も来てみるか？」

「俺も行けるの？」

「ああ、おそらく巧真はレベル3だから行けるさ」

「ちなみに、テニムはなんぼなの？」

「俺はレベル4」

「結構高い方だぞ」

「じゃあバイロも」

「てか、あいつの火は一体何？」

「バイロもレベル4だ」

「火はあいつの特殊能力」

「でもテニムは蒸気を出すのに水が必要だろ」

「バイロは火種もいらなの？」

「多分、どこかで誰かが」

火を使つてたんじゃないかな
そこから持つて来たんだよ」

「便利な能力だな」

「俺もそれは思うよ」

「ちなみにチコモレベル3だと思うぞ」

「マジで」

階段に座つてゐるチコの方を振り返ると
俺に向かつてVサインをしていた

「取れた腕をくっ付けたりしてたしな
レベル3以上じゃないとできないよ

俺とかはできないけど」

「そうだったんだ」

「とにかく」

上の階に俺行つてくるから」

そう言つて宿から飛び出して行つてしまった

「あれ？連れてつてくれるんじゃないの？」

上の階が行つてみるか

「なあ、チコ上の階に行つてみない

一人じゃ心細いしさ」

すると、コクリと頷いた

「おつマジで？やった

なら行こうぜ」

そう言つてチコの手を掴み宿から飛び出した

飛び出したまでは良かった

「ここはどこ？」

気がつくわけのわからない場所に出ていた

「方向音痴・・・」

「はい、その通りです」

この街は道が入り組んでいて
とても一人では歩けない

宿に戻るうにも戻り方がわからない

「こつち」

そう言つてチコは俺の手を掴み歩きだした

「おい、チコその道はさっき来た道だろ」

「・・・それはあつちの道」

「あ・・・そう」

そんなこんなで石段の前に到着
後ろを向けばあの扉があり

前を向けば石段が一直線に続いてる

「これ登らないといけないの？」

「そう」

「何段あるんだよ、上が見えないぞ

いや、嘘見えますちよつと大げさでした」

「大丈夫、一瞬だから」

「え？そうなの」

「そう、行こう」

息を切らせながらようやく上についた

「やっと、上についた

チコこれのどこが一瞬なんだ

何百段あつたんだろう

数えるの途中でやになつたぞ」

「ね、一瞬だった」

「え？どういう意味？」

「何でもない」

あたりを見回すと

目の前にはまた石段が一直線に伸び

周りは下の階と比べて道幅は広く

人の数も少ない

ただ武装した人間は少ないが

変な人が多い

いや変ではないんだが

ジャグリングをしている人の

手の数が明らかに多いのがいたり

郵便物が空を飛んでいた

中でも驚いたのが

歩いてもいないのに

おじさんが物凄いスピードで

スライドしながら俺達の目の前を

通り過ぎて行った事だ

チコの様子を見ると

相変わらず無表情なのかと思ったが

どうやらそのまま固まっているようだ

「おい、チコ大丈夫か？」

「大丈夫」

「すごい所だなここは」

目の前には石段が続いているが

石段の上には城のようなものが建っていた

「チコ、あれは何だ？」

「・・・わからない」

「そうか」

ところでデニムはどこに行ったのかな」

「きっとバイロのところ」

「いや、それはそうだけどさ

どこかなって思って」

「そう」

何となくだがここに来てから

俺の力が膨れ上がってるような気がしていた

「どうかした？」

「え？いや何でもない」

しばらくその場で立ちすくしている

「おう、お前等が来てるってことは

テニムも来てるってことか？」

どこからかバイロの声が聞こえてきた

あたりを見回すと

建物の上にバイロがいた

「あんたに会いに行っただけと思っただけど

会ってないの？」

「なら、家に向かったのか？」

そう言っただけを見回し始めた

「家はどこにあるの？」

「ああ家？ええつとだな・どこだろ」

「もしかして迷子か」

「違う、テニムを探して

あたりを走り回っていたら家に帰れなくなったから

高いところから家を探してるだけだ」

「方向音痴だな」

だなんて馬鹿にしていると

チコが

「似た者同士」

とボソツとつぶやいた

「坊主、礼儀を知らない奴だな」

「そっちこそスポーツマンシップを知らない奴め」

「はっ、お前になんかズルをしなくても
楽勝で勝ててたね」

「口先だけではなんぼでも言えるよな」

「試してみるか？」

「もちろん」

チコはそれを聞くと

俺の近くから離れて物陰に隠れた

バイロは拳と拳をぶつけあい

両手に火を着火させた

「武器は持たなくていいのか？」

「いらないよ、そんな必要な時

出せばいいだけだし」

「それと、ひとつ言いたいことがあったんだ」

「何さ聞いてやるよ」

「目上の奴には敬語を使いやがれ」

そう叫んで建物の上から飛び降りてきた

「俺は50歳過ぎた奴にしか

敬語は使わねえんだよ」

俺は下でバイロを待ち構えた

ところが

「コラ　！！二人ともこんな所で
力を使つて戦うな」

テニムが向こうから大声で叫んでやってきた

「テニム？」

「坊主、何よそ見してやがる」

「ちょっと待ってテニムが・・・」

バイロは気づいていない間に合わない
そう思い

バイロのパンチをかわしその腕を掴み
落ちてくるスピードを利用し

地面にバイロを背中から叩きつけた

「があっ・・・」

「これぞ柔術成り」

昔話は眠くなる

「これぞ柔術成り」

そこへテニムが登場した

バイロのたたき落とされて割れた地面を見て

「はあ、良かった

この程度で済んで」

その場で伸びてるバイロの肩を持ち

「巧真、手伝ってくれ

こいつを家まで運ぶぞ」

「うん、わかった

ああちよつと待ってチコ行くぞ」

そう言う

チコが物陰から出てきた

「テニムはどこに行ったの？」

「バイロの家だよ

行っても誰もいないから俺を探しに行つて

迷子になつたんじゃないかって思つて探してたんだよ」

「おお、鋭い」

「それなのに

バイロとまた喧嘩しようとしやがって」

「いや、ごめん

でもなんで止めたの？」

「馬鹿か？あんな所で戦ったら

周りの建物に被害が出るだろ」

「ああそうか

でも、俺が勝つたぞ」

「はいはいそうですね」

何とか、家まで運び

部屋まで連れて行くと

やけに立派な布団が置いてあった

「何これ、めっちゃフカフカじゃない？」

「ああ、バイロ布団はこだわってるからな

たしかなんかの動物の毛だったような

ほら早くこいつを寝かせるぞ」

「はいよ」

俺達は、バイロの目がさめるまで

ここで待つことになった

「なえ、バイロは何をテニムに伝えたかったんだ？」

「さあわからないな

リムならわかるかもしれないな」

「リム？」

「ん？聞いてないのか？」

ならズルの事も聞いてないのか」

「その前に戦闘開始になってましたから」

「そっか

俺とバイロ、リムは昔はヤンチャばかりして

ここでは少々有名な悪ガキだった

バイロは炎、リムは・・・」

「なえその昔話、長くなる？」

「え？ああ、まあ長いかな？」

「パス」

「おいおい、聞けよ

そんでもってこの街で俺達の事を・・・」

「なえ、チコ」

チコって本当はいくつ？」

「19」

「本当なの？」

「本当、今年で20になる」

「だってさあ」

「こんな幼稚体け・・・」

チコの強烈なアップーが俺の顎にさく裂した

気がつくとテニムの長かった話も終わり

バイロが目覚めてやってきた

「テニム、来てたのか」

「当たり前だ、家で待ってる

と言っておきながら出かけてるんじゃないよ」

「来るのが遅いから心配になったんだよ」

「俺はお前の方向音痴の方が心配だよ」

「それより、宮殿の仕事が決まったんだ

テニムも来てくれ」

「はっ？何で俺が？」

「俺たちじゃ入れないだろ」

「向こうから迎えが来るんだ

そいつらについて行けば入れるらしい

リムも一緒に行くんだ」

「リムも？」

「ああ」

「リムはどこに行ってるんだ？」

「さあ、お前を探しに行つたんじゃないのか？」

「いやバイロを探しに行つたんだろ」

「そうかもな

とりあえず、石段の所に行くぞ」

「ええ？なんで」

「いいからいいから」

そう言ってテニムを連れて行ってしまった

「チコ、後を追うぞ」

「どうして？」

「え・・えつとなんとなく」

「わかった」

「よし、あれ石段の場所ってどこだっけ？」

「私、覚えてるこっち」

「さすがチコ頼りにしてるよ」

チコの後を追い、家を出ると

目の前に青色の長い髪の女性が現れた

「バイロを見かけなかった？」

「石段に向かったよ」

「そう、ありがとう」

そう言って一瞬にしてどこかへ消えてしまった

「なんだ？今の」

「何してるのこっち」

「ああ、わかった」

石段に到着すると

テニム達とさっきの女性が立っていた

「久しぶり、テニム」

「ああ久しぶりだなリム」

どうやら、リムとは女だったらしい

男だと思ってたんだけどな

「おい、テニムお前は石段の上に入れるか？」

「俺は入れないよ」

「バイロも入れないんだろ」

「そ、そうだけどさ
とにかく、手だけでも入れてみるよ
入るかもしれないぞ」

さつきから何の話をしてるんだ？

「なあ、チコ」

あの石段にみんな上ることができないのか」

「わからない」

ただ、テニムも上がることができないのなら
レベル5以上が必要」

「チコってなんぼだっけ？」

「私は実はレベル4」

「テニムと同じか」

なら俺が試してみよう」

そう言っただけ俺は石段の方に近づいて行った

「巧真、やめとけ」

俺だっただけの通りだぜ」

そう言っただけ、石段の何も無い所で
ノックをすると

何も無い所が歪んで見えた

「見えない壁か・・・」

俺はゆっくりと石段に近づいて行った

右手を前に置きゆっくりと進んだ

「おい坊主、止めておけ無理だっただけ」

お前はせいぜいレベル3だろ」

「俺は坊主じゃない巧真・・・」

自分で自分の足に躓き

体制を崩してしまった

「だああ・・・」

俺はヘッドスライディングの体制で見えない壁に突っ込んで行ってしまった

ぶつかるとい思い目を閉じていたが

ぶつかるといにはぶつかったが

石の感触がした

何とか起き上がり後ろを向くと

みんなが啞然としている

俺の立つてる場所を見ると

なんと見えない壁を通り抜け

石段の上に立っていた

「・・・あれ？」

「まじかよ、信じられない

あの坊主・・・え？リムということ？」

「ええっと、つまり彼の潜在能力も5以上ってこと？」

「そうかもしれないな

巧真の能力は謎が多すぎる」

何やら、向こうで話し合ってる

俺はどうしたらいいんだか

「まあ、巧真とにかくこっちに戻ってこい」

「ちょっと上の方見に行つてきてもいい？」

「なっ、駄目に決まってるだろ

そこに入るには本来なら許可が必要なんだ」

「つまり滅多に見れないってことだろ？」

「じゃあ、行ってくる」

そう言つて、俺は石段を駆け上がろうとした

だが首元を誰かに掴まれたかと思うと

気がつくとか確か、リムとか言う

人の横に立っていた

「あれ？」

「リム、助かったよ」

「あれ？テニム？」

「リムの個人能力だ」

「??？」

「物質移動だよ、しかも特殊のな」

「俺、石段にいなかったっけ？」

「そうだぞ」

「なんで、元の場所に戻ってるんだ？」

「リムの場合、俺等がやる物質移動

より早くて的確に移動させることができるんだよ」

「誰かに首元を掴まれたような気がしたんだけどな」

「リムは、自分の手だけを飛ばして

捕まえたものを好きな所に置くことができるんだ」

「へえ、便利だな」

「闘技場でバイロが突然消えたりしただろ？」

「え？じゃあ、バイロのズルってこの人の能力だったの？」

「そう言うこと」

「俺達みたく遅くないし服が消えるってこともない」

「なるほど」

「とにかく、一度バイロの家に帰るぞ」

「ここにいるても何も始まらん」

「そう言ってみんなが歩き始めた

その時、俺は頭の中で耳鳴りのような物が

聞こえ頭に痛みが走った

「痛っ・・・」

その異変に気が付いたチコは

「どうかした？」

「いや、なんでもない

先に行っていてくれ」

「そう、わかった」

そう言つて、テニム達の後を追つて行つた

俺の頭の中にあの神の声が

聞こえてきた

「石段を上つてきて」

どうして？

「いいから」

許可がいるんじゃないのか？

「私が許可します」

なんだそれ？もしかして城の中にいるのか？

「うん、もちろん

神様だもん」

どこにいるんだ？

「探してみて、かくれんぼ」

おもしろい、いいよ

そう言つて俺は石段を駆け上がって行つた

何とか階段を駆け上がると

城の尋常じゃないでかさに驚いた

確かに遠くから物を見ると小さく見えるが

いくらなんでもこれはありえない

この中から探すのかよ・・・

「そうよ、頑張つて」

制限時間とかないよな？

「ないない」

まあ、とりあえず
中に入るか・・

中に入るとそこは西洋風というか
本当におとぎ話に出てきそうな建物だ
入口から入ると目の前には階段があり
左右対称に建物が建てられたいる
「ううっわ、すごいな・・」

人は誰もいなくガランとしていた
しばらくそこら辺を歩いていると
向こうに人影が見えた
神の場所でも聞こうかと思い
その人に近寄り
声をかけた

「いい忘れてたけど、他の人に
あなたが見つかったら駄目だから」
本当に言い忘れてたのか？
わざとなんじやないだろうか？

声をかけるとその人は
俺を見て、驚いた様子で
しばらくフリーズしていたが
だんだんと顔が強張っていき
思いもよらない一言が飛び出した
「し、侵入者だ　！！」
「えええ　？」

昔話は眠くなる（後書き）

最後まで読んでいただき

ありがとうございます

何とか10話書くことができました
これからもしよろしく願います

愛は障害が無い方が楽

「貴様、どこから侵入した」

「どこからって入口から堂々と」

「嘘をつくな」

「商民ごときが入れる訳ないだろ」

「今時の商民は兵士より強いんだぜ
知らないの？」

「やかましい、てか止まれ　！！」

「冗談じゃない」

俺は神に呼ばれてここに来たんだ
何で捕まらなきゃいけないんだよ」

頑張つてね、捕まったら君の負けだから

「おい、どうなつてやがる」

俺が鬼で探す方じゃなかったの？

なのになんで鬼が第三者に追われてるの？」

愛と言うのは障害があるほど燃えるものなの

「はあっ？意味わかんないし」

「貴様、さっきから何を独り言を喋ってやがる」

「うるせえ、神との会話中に首を突っ込むな」

どこにいるんだよ神様」

んゝどこでしょうねえ・・

「ノーヒント？」

イエス

「死ねっ　！！」

ああ、そう言うこと言う？

せっかく追っかけてる人どうにかしてあげようと思つたのに

「すみませんでした神様

もう死ねだなんて言いません」
じゃあ、次の廊下を右に曲がって
「わかった」

だが、右に曲がるとそこには
城の警備員のな人が二人立っていて
こっちに振り向きしました

「・・・あ、あれ？」

「侵入者だ　！！」

「どうなってるの？神様」

あれ、おかしいな

じゃあ次は左

「し、侵入者だ　」

結果は警備員がまた増えました

「わざとだろ、絶対わざとだ

未来創ってる癖にこんなにミスるだなんて

おかしいもん」

バレた？

「やっぱり、これからは俺の勘で行かせてもらっからな」

そう言つて、巧真は

上にジャンプをして姿が消えた

「き、消えたぞ？どこに行った」

「あいつの特殊能力は瞬間移動か？」

「くそっ探すぞ」

そう言つて、警備員達はバラバラに散って行つた
しばらく静かになると

突然その場に巧真が現れた

「ドウハァー、駄目だ息が続かない」

巧真は、ただ単に姿を消していただけだった
ジャンプして姿を消し
静かに着地しゆつくりと壁側に移動していた
あとは警備員がここから立ち去るまで
息をひそめ壁に張り付いているだけ

ズルい・・

「何がズルいだ

だったら警備員に教えれば

よかったじゃないかよ」

神様が教えたりしたらいけないでしょ

「なんだそれ？」

まあ、とにかく私探すの頑張つてね

「はいはい」

こんなおとぎ話に出てきそうな城だ
お姫様は最上階にいるに決まってる

「おし、上に行くか」

確か、入口の所に階段はあったよな・・

入口ってどこだっけ？

帰り道もわからん

階段の場所のわからん

「ああ、なら作ればいいんだ」

そう言つて壁に手を置き

力を込めると大きな音を立てながら
上に続く階段を作ってしまった

ちょっと、お城を勝手に作り変えないで
「いいじゃん、減るものじゃないし」

でも、階段が増えた・・

「そこまでだ侵入者」

振り向くと周りは警備員で囲まれていた

まあ、無理もない

でかい音を立ててしまったし

「よう坊主、侵入者ってお前のことだったのか」

なんと警備員の中にテニム達も

混ざっていた

「え？なんでここにいるの？」

「いや、実はだな

バイロの家についた時まで戻るんだが

家につくと・・（長いのでカット）」

ええつとつまり、家につくと

城からの使者がいて

緊急事態だから来てくれと

使者に連れられて石段の中に入ると

侵入者がいるから捕まえてほしいと頼まれ

現在の状況に至ると

「おい巧真、今俺が説明しただろ

何で繰り返してるんだよ」

「テニムの説明は長いんだよ

そんな使者の名前がどうか身長がどうか

そんな説明要らないし

どうせ使者 A とかでこれ以上登場しないから」

「とにかく、坊主

これは俺の就職がかかってるだから捕まれ」

「やだね、てか坊主って言うな

俺の名前知ってるだろわざとだろ

一瞬で負けたことがそんなに悔しいか？」

バイロから火の玉が飛んできた

「うわっ、危な何するんだよ」

「うるせい、バゝカ」

「はあ、馬鹿って言う方が馬鹿なんだよ

この馬鹿が」

「何いゝ？」

そんな、餓鬼みたいな口喧嘩をしていると
火が城に燃え移ってしまった

「だああ、城が燃えてる」

「バイロ、これどうにかできないの」

「無理無理、消すことは俺できないの」

「いや、両手に炎を持つてくればいいじゃん」

「馬鹿、あれすごく熱いんだぞ

こんな大量に取れる訳ないだろ」

「やつぱり、熱いのかよ

テムム、水出してよ蒸気出すみたいにさ」

「いや、水が無いと俺蒸気出せないし

水は出せません」

「え？どうするのこれ？」

「だ、大丈夫だ警備員がどうにかしてくれる」

警備員は慌ててどこからかホースを持ち出し
火を消していた

「それよりも、坊主

悪いようにはしないから捕まっちゃえよ」

「断る、俺は神に会いに行くから」

「なら力ずくで捕まえてやる」

「やめといた方がいいよ

俺、ここにきて

今までにないくらい力がみなぎってるんだ

多分、今最強だよ

見てよこの階段だって俺が作ったんだよ

今までにはない力が使えるようになってるんだ

と言う訳で、俺行ってくるから」

「巧真」

「何さテニム？」

「確かに、力は成長しているみたいだな

でもなみんなに囲まれてるってことを

忘れてるんじゃないのか」

「なに言ってるの？」

後ろに階段があるじゃん」

「無理だ、それ以上は巧真も俺達にも入れない」

「なんで？入れるじゃんほら」

そう言っただけ階段の中に入って見せた

すると、全員が驚いた

「馬鹿な・・・ありえない」

「何に驚いてるの？」

テニムはゆっくりと階段に近づき

階段の手前で何も無い所に手を置いた

すると、何も無い所が揺らぎだした

「見えない壁・・・ここにもあったの

じゃあ、俺の潜在能力はレベル6以上ってこと？」

「いや、巧真の潜在能力は神クラスだ」

「え？」

「どういうことだ？」

「いや、それはこっちが聞きたいよ

まあ神に会って聞いてみるよ」

そう言つて巧真は階段を駆け出した

何となくだが、神がいる部屋の場所もわかった

「ここか・・・」

目の前には巨大な扉があつた

まるでまた別の世界につながつてそんな扉だ

これも軽いのかな？

そう思い軽く押してみると

そんな事はなかつた

見た目通りの重さだ

体全体に集中し

力を一気に扉にぶつけた

「破つ！！」

扉は勢いよく開き

そして勢いよく戻つてきた

「うっそ、なんでこう言うオチ」

気を取り直して

今度はジワジワと扉を開いた

扉の向こうには

巨大な背もたれのある椅子に神が座っていた

いや本当にでかい背もたれだ

「神様、見つけた」

「鼻血出てるよ

やっぱりさっきのでぶつけた？」

「もちろん、結構痛かつたよ

俺の勝ちだな」

「うん、そうだよ」

「で？」

「え？」

「なんで、俺を呼んだの？」

「あなただって会いたかったでしょ？」

「そりゃあ・・まあ」

「だから呼んだの」

「俺が色々と聞いてもいいってこと？」

「そう」

「じゃあ、俺の力は神クラスって言うのは本当？」

「もちろん、潜在能力はね」

「まだ使いこなせてないみたいだけど」

「じゃあ未来を創るって言うのはどういうこと

そんな事が出来るのか？」

「案の定やつてるでしょ」

「人の生死にまで操ることができるのか？」

「それは、無理

たえできたとしても彼女が許してくれない」

「彼女？」

すると、突然だが神の風陰気ががらりと変わった

そうだなさっきまでは積極的で

明るさが空回りしてると言うかそんな感じだったが

今は、なんと言うか

大人しいと言うか

夢に出てきた彼女に似ているかな？

「あの、神様？」

神は俺の方を向きにこやかに

「はじめまして、巧真さん」

と言ってきた

「はあっ？なに言ってるの」

「わ、私とは初めて会うじゃないですか」
オドオドしながら俺にそう言ってきた

「???」

「あ、あの・・・そのつまり」

「つまり？」

「私は多重人格者なんです」

「はあ・・・」

「気づくの遅い、なんで私に言わせるのよ」

「今も変わったのか？」

「そうあの子は引っ込み思案だから」

「聞いてみたかったんだが」

多重人格ってどっちかがベースとかあるの？」

「彼女がベースよ」

「どっちだよ」

「私じゃない方よ」

あの子が私を生み出したの」

「どうして」

「退屈してたから」

「はあっ？何言ってるの？」

「な、何よその反応　！！」

あなただっていつかはなるんだから」

「いや、ならないし」

「本当になるの　！！」

「???」

「まあいいわ

本題に入るから」

「本題？」

「どうやって、未来を創ってるかについてよ」

「そんなこと教えてくれるのか？」

「うん、もちろん」

「言っておかないと大変なことになるし」

「で？どうやって未来を創ってるんだ？」

「私達は物語を作ってるの」

「はあ？なんだって」

「物語よ、私達がいいと思うように話を作ってるの」

「そしたらみんながその通りに動いてくれる」

「この世界は、私達の理想を描いてくれる」

「理想？」

「そう、争いもなく」

「毎日が穏やかで平和なのが私達の理想」

「そうやって、この世界は続いてきた」

「だけど突然あなたがやってきた」

「俺？」

「そう、あなたは私達の物語には存在しない」

「そしてどんなに操ろうとしても」

「あなたは私達が思い描いたことと違う事をする」

「だから、あなたは危険な存在だった」

「それで俺を殺そうとしてあの村を」

「トカゲに襲撃させたのか？」

「それは違うわ」

「あれは私達が考えた物語じゃない物語を書いてるとしても」

「完璧な訳じゃない」

「突然話が変わることだってある」

「でも、村が滅ぶと教えてくれたじゃないか」

「それは、事前にわかって」

忠告しただけ

そしてトカゲの襲撃をあなたが救った後
本当なら、村からひどい迫害を受け
あなたはこちら側に来るはずだった
だけど、村の中に理解者が出てきた」

「村長の事か？」

「もう一人、甘次郎さん

あなたに影響を受けたんだと思うけど
物語とは違う行動をとるようになった
本人たちは自覚はないだろうけど」

「そうだったのか」

「否定しないの

私がやってることは人間の支配みたいなものよ
もつとこう、なんでそんな事するんだとか
こんなの人間のすることじゃないとかさ？」

「別に・・・これまでもこれで

平和にやってきたんだろ？」

それをどうこう言える立場でもないし

悪用してるわけでもないのにそんなこと言えないよ」

「変わってるのね」

「そうか？自覚はないけど

ところで、俺も神クラスってことは

未来を創れるってことか？」

「わからない、神クラスを

私以外に見たことが無かったもの」

「じゃあ、可能性はあるってことだな？」

「どうだろうね？」

「神様がそう言う設定にすればいいじゃん」

「だから言ったでしょ

あなたは完全に独立してるの

私にはどうする事もできない」

「そうか、残念だな」

「どうして？未来を創りたいの？」

「そりゃ一度はやってみたいだろ」

自分が思い描く未来

それが現実になるだなんて素晴らしい事だ」

「そんなことないよ」

むしろ、こんな能力ない方がいいわ

少なくとも彼女はそう思ってる」

そう言って、神は暗い表情になった

スーブは熱いのでお気を付け下さい

「どうして？」

未来を創るだなんていい能力じゃないか？」

「本当にそう思う？」

はじめは確かにいいかもしれない

でも、人に話しかけても

自分の思ってる返事しか返ってこない

闘技場で戦ってる人も

どちらが勝つかまでわかってしまう

そんなのつまらないと思わない？」

「確かに・・・」

「それがやになって

彼女はここに引き込まれる様になった

そして私が生まれた

この能力を自分以外の人に渡したかった

でも渡すこともできない

そして考えた結果、私を生み出した」

「多重人格とはそうやって生まれるものなのか？」

「知らないわよ、そんなの

ただ私はそうやって生まれた」

「ふゝん」

「ちょっと、何でもかんでも受け入れすぎよ

少しは否定しなさいよ」

「俺この世界に来てから

何が起こつても全て受け入れようと思ってさ」

「変なの、普通なら帰りたいとか思わないの？」

「どこに？」

「日本によ

少なくとも甘次郎さんは

今でも帰りたいと思ってるはずよ」

「帰る方法はないのか？」

「わからないわ

やっぱり帰りたい？」

「いや、全然そうは思わないな

この世界結構面白いし」

「向こうの世界に未練はないの？」

「さあ、どうだろ

ところで、これからどうすればいいんだ？」

「どうして私に聞くの？」

「そんなの決まってるだろ

俺一人がどうこうしたって

世界の全体的な未来が変わるわけでもない

でも、もし俺が影響を与えてしまったら

またトカゲや洪水が起こるかもしれない

俺も影響を及ぼさないようにしたいんだ

だから

そこら辺には近づくな、とかあったら教えてくれ」

「別にないわ」

「そっか、なら俺帰るわ

あああと俺もう侵入者じゃないだろうな？」

「大丈夫よ

そんな大げさなことには

ならなかったことにしてるから」

「よかった、あんな状態だったら

俺あそこに帰りずらかったよ」

「ちゃんと帰れる？」

「ああ、わからない

「帰り道どっち？」

「ずっと真つすぐ歩いて行きなさい

そしたら階段があつて出口もあるから
階段本当なら一個しかないはずなのに
勝手に作つちやうんだもん」

「いいじゃん、創られた未来以外のものが
見れたんだろ？」

それじゃあな、ああバイロをちゃんと
採用してやつてくれよ」

そういつて俺は城をでた

警備員的な人達は俺を見ると

「どうも、お疲れ様です」

なんて言つてくるようになっていた

どうやら本当に侵入者ではなくなっているようだ

「ねえ、出口つてどこ？」

「目の前にあるじゃないですか

あの階段ですよ」

「ああ、ありがとう」

明らかに年上の人に敬語を使われると言つのは
何となく違和感がある

もう、日も暮れていて

周りが薄暗かった

階段を降りるとチコが階段の横で座っていた

「うわっ、チコ

何やつてるんだこんな所で」

「迎えにきた」

「へ？」

「方向音痴」

「そ、そうだったな」

「それに私だけこの中入れてない
使者の人、私を連れて行ってくれなかった」

「テニム達は？」

「バイロとリムは城の中

テニムは宿で夕飯の支度してる」

「そっか、なら帰るか」

チコはコクリと頷き歩きだした

城を離れていくと

だんだんと力が衰えていくような気がした

「おお、二人ともお帰り

夕飯できてるぞ」

「テニム」

「ん？なんだ」

「俺ってなんで城に行っただけ？」

「はあ、何言ってるんだ？」

神様に呼ばれたとかで勝手に入って行っただろ」

「そうなの」

「そつだよ、あれから大変だったんだぞ

侵入者が出たとかで

下は大騒ぎになったんだから

でも、神がなんとか誤報だとか説明して

静まったんだけどさ

はい、スープ」

「どうも、それより俺の潜在能力は神クラスだったさ」

「はあ？何言ってるんだ

んな訳ないだろ

確かに入れたかもしれないけど」

「本当だって城の中で姿だって消せたんだぜ」

「はいはい、わかったから
冷めちまうぞスープ」

「ああ、信じてないな
見てろ」

そう言つて俺は立ち上がり力を込めた

「巧真、これ以上はダメだやめとけ」

「え？なんで」

そう言つて、自分の姿を見ると

見事に服だけが消えていた

「あれ・・・？」

しばらくフリーズしていた

チコがハツと我に戻り

俺に向かって熱いスープを投げてきた

「危なっ」

そう言つて避けれたが

投げたスープの行先は

宿に偶然入ってきたバイロの顔面に直撃した

「ああっっ！！何これあつつっっ」

遅れて入ってきた

リムは状況を理解したのか

やけに冷静だった

「まあ、立派なものぶら下げちゃって」

「いや、これはちよつと・・・」

そんな弁解をしようとしているうちに

チコの第二攻撃が俺のあれに直撃した

「はあああ・・・チコ・・・貴様・・・」

名前の間に『ン』を入れたら・・・」

続きを言う前にまた花瓶が俺の顔面に直撃した

そんな大騒ぎの中

テニムはふる場からタオルを持ってきてくれた

何とか收拾がつき

落着きを取り戻した

「まったく宿に着いたら

スーブが飛んでくるとは思わなかったよ」

「なえ、なんで俺はまだタオル一枚なの

寒いんですけど」

「バイロが突然叫びだすから

何事かと思ったら、いやゝ面白い物を見たね」

「俺、これ顔に水膨れ起きるんじゃないか？」

「いや、バイロそんなこと言わないでくれ

そしたら俺はあそこが水膨れだぞ」

「お前は自業自得だ、俺は被害者だぞ」

「俺はあれを女性二人に見られたんだぞ

結構ショックだぞ」

「はあ？何言ってるの？」

「え？何が？」

「あつ、そう言うことか」

??

「リム説明してやれ」

「何??」

「巧真君、私こんな形なりをしているけど

実は私は男だ」

頭の中で『私は男だ』が何回も繰り返されている

俺だけではなくおそらくチコもなっている

顔が動いていない

いや元々無表情だけどそうじゃなくってさ、わかるでしょ？
それを見てテニム達が笑っている

「いやゝ毎回毎回この表情を見るのが面白いね」

「まったくだ、ここ最近見てなかったしな」

「嘘だ、絶対に嘘だ」

リムが男のわけがない

確かに胸はないかもしれない

でも、チコよりは・・・じゃなくて

髪も長いし

身長も俺より高いし

肩幅もがっしりしていて・・・

胴周りも腕回りも・・・」

やけにしっかりしてるな

男か・・・

「なんで、そんな格好してるの

俺の第一印象は

ひどくても若造りしたきれいなおばさんだったのに・・・」

「んゝ趣味かな」

「巧真、無理もない

俺とテニムもガキの頃はしばらくの間

リムは女だと思ってた

男だっってわかってから俺は一週間寝込んだ」

「どうして、男だっってわかったの？」

「それは・・・まあ色々と・・・」

「若気の至りっってやつだ

バイロの奴リムに告ったんだ」

「テニムでめえこの野郎なに言ってるんだよ

ああ、もうこれ絶交だ、絶交」

「いいじゃないか本当の事なんだし」

「そうだよ、バイロ」

私に告白して真実を知った瞬間

赤いくせに青ざめて行くのは見物だったわ」

「だぁぁ、くそっせっかく記憶を

消去しようとしてたのに振り返ってきた

しかもやけに鮮明だよ」

これはしばらく立ち直れないかも

「俺、ちようどタオル一枚出し

風呂入ってくるわ」

そう言つて、立ち上がり風呂場に向かおうとすると

何かにぶつかった

「痛っ」「キヤッ」

小さくだが誰かの声が聞こえたような気が

目の前に何かいる

そう思ったが

何となく誰かわかった

俺は何か見えない物を掴み

二階へ上がった

「どうした巧真？」

「なんでもない気にしないで」

部屋に入ると扉を閉めた

「何やってるんだ？神様」

すると、目の前に神様が姿を現した

第一次産業、万歳！！

「何やってるんだ神様」

「あ、あの・・その」

「どうやら、今は主人格が出てきているらしい
「城から出てきていいのか？」

あの警備の人たちは」

「あれは、ただ見せかけ見たいな感じだから」

「それで、神様はなんでここに来たんだ？」

「か、神様だなんて呼ばないで」

「そう言つてやけにむきになってきた」

「わ、私は神様なんて名前じゃない」

「じゃあ、なんて名前なんだよ」

「ま、真由です」

「つてことは」

「やっぱり、日本から来たのか」

「は、はい」

「で？なんでここに来たの」

「・・・」

「おい、なんか言ってくれ」

「あんた馬鹿？気づきなさいよ」

「ん？入れ変わったのか？」

「そうよ、まったくなんで私が出てこなくちゃ
いけないのよ」

「まあ、その方が話も進みやすいけどな」

「いい？普通、宿に来るだなんて」

理由はわかるでしょ？」

「泊まりにきた？」

「そう、私達は客よ」

二人で料金は一人分って言うのは最高ね」

「この世界は金がないぞ」

「ああ、そうだった」

「で？客がどうして姿を消してるんだよ
ん・・・ちよつと待てどこからいた？」

「え？それは・・・」

鼻のあたりをかき始めた

「始めからか？始めからだろ

あの時もいたんだろ見てたのか？」

「さ、さあどうだったかしらね

私じゃなくて彼女だからいたのは」

「やっぱりいたのか・・・」

「そ、そもそもあんなものを見せるから悪いのよ」

「おい、あんなものと言うな

結構傷つくぞ」

「この　　が」

「おい、　　言うな　　！！

レディが　　だなんて言うもんじゃありません」

「何よ、あなたは私の親か

って言って何が悪いのよ

この　　」

「泣いていいかな？俺・・・」

の　　中身は想像にお任せします

今までもそしてこれから・・・

「とにかく、私達は客よ

部屋まで案内してくれない」

「多分、俺と同じリアクションになると思っけど
部屋はこれ一個しかないんだ」

「え？冗談でしょ？」

あなたと同じ部屋だなんて考えられない」

「いや、チコもいるぞ」

「まさか、あなたとチコはそう言う関係なの？」

「ちよっ違っからね」

まだ俺何もしないからね

そもそも俺はどう・・・ああいや何でもない」

「はあ？あなた　なの？うっそ」

「おい　！！口に出すな

レディがそんな言葉口に出すな

俺がせつかく途中でやめたのに」

「向こうの世界で週刊誌とか読まなかったの？」

の平均年齢は・・・」

「こらっ！！言うなって

そう言うっお前はどうかんだよ？」

「れ、レディにそんな事を聞くんじゃないやありません」

その言葉と一緒にグーが飛んできた

「おい、巧真

上で何をドタバタしている」

そう言ってテニムが扉を開けてきた

その時、ちょうどグーで殴られて

飛んできていた巧真にテニムがヒットした

「のわああ」

「あっ、ごめんテニム大丈夫？」

「巧真てめえ、一人で一体何を・・・」

そう言っつて、真由を見つけた

「ああ、テニムお客さんだよ」

「おうそうか、驚いたよ

突然知らない女性がいるんだから」

「え？」

「じゃあ、後で下の名簿に名前を書いておいてくれ
それじゃあ下で待ってるわ」

そう言つて、テニムは一階へ降りて行つた

「テニムは一度、お前に会ってるはずなんだが」
「なに言ってるの」

初めて会つわよ」

「街で見かけたつてこの前言つてたぜ」

「それは、私がそうさせてるだけよ」

みんな一度は神を見たことがある事にしてるの
そうやって親近感を持たせてるだけ

だから誰も私を神だなんて思わないわ」

「お前は神様を否定しないんだな」

「どうして？」

「主人格は否定してたぜ」

私は神様なんかじゃないつて」

「当り前でしょ、この能力が嫌で

私を生み出したのよ

彼女は能力を私に渡したと思ひこんでるわ」

「どうして、お前は真由つて呼ばないんだ？」

「ん？私も真由よ」

「ああそうか」

「それから、私達はしばらくここに泊るけど
彼女を泣かせたりしたら私許さないからね」

「はあ？」

「不束者ですがどうぞよろしく」

そう言つて深々と礼をしてきた

また戻つたのか・・・

「ああ、こちらこそよろしく
さてと俺は風呂に入ってくるか」
そう言つて頭をあげると
今までどんなに動いても落ちなかった
タオルが今頃になつて落ちた
それを見た真由の叫び声は
宿中に広がった

「ん？おお巧真上がったか
それにしても初登場の人を泣かせるだなんて
ひどいな

今二階で引きこもっちゃってるぞ
チコよりも重症かもな」

「俺も死のうかつて思つて
風呂場で溺死しようと思みたけど
狭くて頭が入らないんだよ」

「それは、遠まわしに俺の宿に対する嫌味か？」

「ああ、どうしよう神様に殺される」

「なんのことだ？」

まあいい本題に入るぞ」

「本題？」

「こつからは俺が説明する」
「俺つて言つても読んでも人は誰かわからないぞ」
「うるせえな、バイロだよ」
「そうそう言う風に言わないと」
「巧真いつかぶつ飛ばしてやる
それで、俺とリムが宮殿で

仕事が決まったんだけど

何故か巧真とチコも宮殿で仕事が採用されたんだ」

「え？なんで」

「俺が知るか

しかも、俺達みたいな宮殿の見回りなんかじゃなくて
政治的なものだそうだ」

「どういうこと？」

「ちよつ俺聞いて来るわ」

「おい、どこに行くつもりだ
なんで二階に行くんだよ」

「いや、だから・ああそうか」

「とにかく、明日からお前らも
宮殿に行くことになったから

それを俺は言いにここに来たんだよ

それなのにスープは飛んでくるし
やな思い出がよみがえってくるし

今日は散々だ。それじゃあな」

そう言つて、バイロとリムはいなくなつた

「なんで、俺が働くなくちゃいけないんだよ」

「おいおいその発言は駄目だろ」

「働いたら俺負けだと思つてるから」

「えっ？」

「冗談だよ

でも、何で俺が宮殿で？」

「さあ？チコも呼ばれたんだろ

俺前らが働いてないからじゃないのか？」

「えっ？そんな事で就職口が政治的なものの
いくらなんでもそれはないだろ」

「さあ・・・どうだかな？」

「まあとりあえず寝るわ
お休み」

そう言つて二階に上がったんだが
問題が発生した
扉が開かない

「あ、あれ？なんで？」

・真由か！？開けてくれ俺が寝れないじゃん
「い、いやです」

絶対いやです」

「大丈夫だ、俺はそんな男じゃない」

「どこがですか？」

さっきは私にあんなものを見せてきたくせに」

「ちよっ、違うから」

ありやどう考えたつて事故だろ」

なんて、言い争いをしてると

横にチコがやってきた

「おい、チコお前もなんか言つてやってくれ」

「真由ちゃん、私は入れてくれるでしょ」

「う、うん」

すると、扉が開きチコが入って行つた

俺はどうする事もなく

いやそうじゃなくてチコが普通に喋つてるとか
ちよっとおどいちゃつて

ただそこに立ち止まっていた

「じゃあ、お休み」

そう言つてチコが勢いよく扉を閉めた

「あ、あれ・・・？俺は」

やべー俺どこで寝ればいいんだよ

下の居間か？あそこは隙間風ひどいんだよな・

「あつちよつと

聞きたいことがあるんだけど」

「なんですか」

「なんで扉越しなんだ？」

「いやでもチコがいるから聞かない方がいいのか？」

「別に大丈夫ですよ

チコさんも宮殿の中に入るんですから」

「じゃあ聞くけど

俺なんかがそんな仕事をしていいのか？」

「別に大丈夫ですよ

全体的なことは変わらないんで

それに変わってもいいんですよ」

「でも、したらまたトカゲのようなことが

起こるんじゃないのか？」

「そんな事はないと思いますよ

別に巧真さんのせいではないと思いますよ」

「そうなの？」

俺はてつきり俺のせいで物語が変わって

その反動でリバウンドあんなことが起こったのかと」

「そんな根拠はありませんから」

「つてか、俺らみたいに何も生み出さないような

仕事って食って行けるの？」

「大丈夫ですよ

この世界は大体が配給制みたいなものですから」

「そうだったのか

第一次産業とか関係ないの？」

「この世界ではそれが当り前ですから」

「そっか・・宿屋が潰れないのもそれが原因か」

「その通りです」

「で？俺はこの部屋で寝れないんですか？」

「変態・・・」

「はっ、何言ってやがる

男は誰でも変態・・・じゃなくて

寝るところがないんだって頼むよ」

「おやすみなさい」

「え？ちよつと・・・返事がないんですけど
まじで？俺、居間？」

超能力、俺も使いたい

「ん？あれ巧真

お前寝に行ったんじゃないのか？」

下に降りてくると

テニムがミルク的なものを飲みながら聞いてきた

「追い出された」

「言っておくが

俺の部屋は狭くて無理だからな」

「やっぱり・・・

増築しないのこの宿？」

「無理無理」

「じゃあせめて居間の隙間風をどうにかしてくれ」

「それは、考えとくよ

しばらくは巧真はここで寝そうだしな」

「なるべく早くね」

そう言つて俺は右手をどこかに突っ込み

どこからか布団を取り出した

「相変わらず、変な能力だな」

「変つて言わないでよ

俺思つただけどさ

リムの能力はどこにでも飛ばせるの？」

「そうでもないぞ

リムの場合目で見える範囲にしか飛ばせないんだ

それに飛ばすだけじゃないんだぞ

見える範囲だったら自分を飛ばすことだってできる」

「へえ」

「それから、ひとつ勘違いしてるみたいだから

言っておくけど俺の特殊能力なんだか覚えてるか」

「え？なんか蒸気を出すみたいな

三人の中で一番しょぼいと言うか」

「やっぱりな・・・」

俺の能力はそんなものじゃないからな
いや、確かに蒸気は出せるけど

わかるだろ蒸気を出す方法はなんだ？」

「水を温める？」

「正解よくできました」

「おお馬鹿にしてるのか？」

「いやだから、俺の能力は

物の温度を上げることなんだ

だから、蒸気もでる」

「へえーじゃあ人間もできるの？」

「考えたくもない」

「考えてみたらこの能力って使いようによっては
人も殺せるんだな・・・」

「そうだな・・・」

さてと、しんみりしてきたことだし

俺も寝るかな

お休み」

「はあ、俺ここで寝るのか・・・」

寒さのお陰で目覚めは最悪だった

「はあーさみー」

テニムの能力で体温って

上げることができるのかな」

「やってもいいが

死ぬと思うぞ」

後ろを振り向くとテニムがいた

「あれ？起きてたの」

「宿屋の朝は早いんだよ」

両手に野菜や肉を抱え台所へ向かって行った

「おお、ちょうどいいから

二階に行つてチコ達を起こしに行つてやつてくれ」

「んゝわかった」

俺は布団をどこか見えない所に押し込み

二階へあがって行った

扉を開けようとした時

待てよ、寝ていればいいが

着替えとかしている時に

俺が入っていったらどうなる

花瓶とかじゃなくてなんかもっと凄いものまで

飛んで来そうだな

どうする？開けるべきか開けないべきか

なんて悩んでいると

扉が勢いよく開き

当たりそうになったが

予想はしてたので何とかかわした

「ふっ、甘い」

なんて余裕をかましていると

花瓶が飛んできて顔面にヒットした

「いった・・・」

なんて片膝をつくと

真由が駆け足でやってきて

どうやら今は主人格じゃない方が

表に出ているらしい

「シャイニングウィザード」

とか言って攻撃してきた

「うつそ〜ん」

シャイニングウィザードが

こめかみに見事に決まり

その場でダウン

チコと真由はその場でハイタッチ

あの余計な動きを見せない

チコがハイタッチ

これが男には分からない女の世界なのか・

「この変態が」

「いや、違うだろ

開けるかどうか迷ってたんだぜ

紳士とは呼ばれても変態とは違うね」

「でも開けようとしたでしょ？」

「ぐ・・・」

「凶星か？」

「その方が何かとおいしいかと・・・」

とどめの一撃を喰らいました

「さあ、早く城に行くわよ」

「ちよつと待ってくれ

今チコに怪我を治してもらってるから」

チコは俺の頭に片手をのせ

力を使っていた

「ちよつと、早くしてよ

なんでそんな怪我してるのよ」

「お前のせいだろ

最後の一撃ありやないだろ
流血してたんだぞ」

「終わった」

そう言つてチコは片手を下ろした

「チコのその能力は自分が怪我をしても
治せるのか？」

「できない」

「そっか・・・便利なのか不便なのかわからないな」

「じゃあテニム行つてくるわ」

「おおわかった

ところで真由ちゃんはどうして行くんだ？」

俺は真由の方に顔を向けると

やけに困つた顔をしていた

自分は神だ、なんてさすがに言えないしな

「ええっと・・・

私も城の警護です」

「へえそうなのか

大変だな頑張つて」

「はい、ありがとうございます」

そう言つて一礼し出発した

俺がボソツと

「猫かぶりめ・・・」

そう言つと

真由から強烈なひじ打ちをくらった

石段の前に到着すると

「それじゃあ、私先に行つてるから
早く来てね」

そう言つて真由は一瞬にしてどこかに消えてしまった

「なんで一緒に行かないんだ？」

「さあ、神様だから」

「チコ知つてたのか？」

「昨日聞いた」

「思つたんだけど」

「チコ達にとつて神様つて何？」

「わからない」

「でも必要な存在」

「よくわからないな」

「私達を守つてくれてる」

束縛してるつて言い方もできるな・

「まあ、とにかく行くか」

「この石段上がるのめんどいんだよな」

「大丈夫、一瞬だから」

「は？」

「ようやく着いた・

俺にはまだ一瞬の意味がわからない」

「一瞬だった」

「・・・わからない、いやわかつてはいけない」

「行こう、神様が待ってる」

そう言つて城へ歩きだした

あの重い扉を何とか開き

部屋に入ると

「遅い、いくらなんでも遅すぎる」

「いやちよつと理由が・・・」

「なにさ」

「迷った」

「どうしてよ？一直線でしょ
どうやったら迷うのよ」

「わ、わからない」

「まあいいわ」

特にやることないけど

まあくつろいで行つて」

「え？俺等の来た意味は？」

「無いわよ、あえて言うなら暇つぶし？」

「おし、チコ帰るか」

そう言つて回れ右をした

「ちよつと、冗談よちゃんとあるから」

実際のところ何も無かつた

ただ椅子に座つて

この街の事について真由が淡々と喋り

それを俺達が聞くだけだつた

この世界ではやることが決まってるから

特に問題も起こらない

政治的なことと言つても

何もすることが無い

まあそれがいいのかもしれないな

「はい、今日はおしまい

お疲れ様」

「なるほど、確かにやること何も無かつたな」

そう言つて立ち上がろうとすると

突然の轟音と地響きが襲つた

何かにしがみつかないと立ってられない状態だ
揺れがようやくおさまり

何やら部屋の向こうが騒がしくなってきた

「何があつたんだ？」

真由の方を見ると

なんだか動揺してる

「真由、どうした」

「わからない、誰かが物語を書き換えてる」

「そんな事が可能なのか？」

「無理よ、でも現実に起きてる」

「この後はどうなる」

「見えない、わからない」

「・・・とりあえず、外の様子を見てくる」
そう言つて

扉の外に出た

階段を降りると

警備員が忙しく駆け回っていた

「ちよつと、何があつたんだ」

「侵入者です」

「侵入者？どうやって入つて来たんだ？」

「おそらく、壁の向こう側からです」

「壁の向こう？」

「向こうは武器も所持しています

負傷者も何人か出てるみたいです」

「場所は？」

「こつちです」

巧真は、警備員の後を追つて行つた

超能力、俺も使いたい（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございます
これから、作風をガラリと変えようと思います
いや、元に戻すと言いますか・・
とにかく、よろしくお願いします

主観と客観

しばらく進むと

そこでは侵入者と警備の人たちが
闘っている声が聞こえてきた
そっちに向かうと

怪我人が周りに倒れていた

「おい、案内はもういい

怪我を治せる奴を呼んで来い」

「わかりました」

巧真は声のする方へ急いで行つた

警備の人たちは

侵入者が逃げないようにか
周りをぐるりと囲んでいた

何とか人混みをかき分け

侵入者のいるところに行くことができた

そこでは数人の警備の人

バイロとリムも戦っていた

その侵入者の方だが

肌の色は茶色く

目の色は金色

変わった能力を使つていて

自らの手足などを剣に変形させ

警備の奴に襲いかかっていた

今まで見たことのない能力だ

「なんだこいつ等は・・・」

「危ない　！！横」

警備の人にそう言われ
横を向くと

侵入者が俺に襲いかかってきていた
右手の指を刃物に変え

俺に突き立ててきた

何とかかわし

木刀を出しそいつに振り下ろした

まともに喰らった侵入者は

その場で倒れた

「捕らえとけ」

何人かが侵入者に飛びつき

抑え込んだ

その時、リムの悲鳴が聞こえた

「リム？」

悲鳴の聞こえたほうを見ると

身長は2 m以上あるような大男が

リムを捕まえていた

意識がないのか

ピクリとも動かない

大男が他の侵入者に合図を出すと

侵入者は大男の周りに集まり始めた

誰かが

「逃げるきだ」

そう言くとバイロや他の警備の人達が
侵入者に向かって行った

大男が何か力を使っているのが見えた

その時、何となくだが

その力で廊下の壁が崩れるとわかった
ほかのみんなは気づいていない

「駄目だ、みんな離れて」

そう叫んでも誰も聞こうともしない

その時、壁が一斉に崩れ始めた

みんなが気づき慌ててるすきに

侵入者たちはいなくなった

俺は力を使い落ちてくる瓦礫を

途中でとめた

「早くどいてくれ

力が持たない」

全員が瓦礫の下から抜け出したことを確認し
力を使うのをやめた

「すまない、巧真助かったよ」

「それより、リムが連れ去られた

どこに行ったんだ？」

「おそらく、壁の向こうだ」

「壁？」

「神様の所に行つてこい
緊急事態だ」

「あ、ああわかった」

階段を上がり

神の部屋に入ると

真由はいなかった

ただ五人の老人が座っていた

「あれ？神は」

「何の用だ、今は会議中だ」

「リムがさらわれた

助けに行かないと」

「怪我人の治療が最優先だ

幸い死者は出てないみたいだからな」

「なに言ってるんだ

さらわれたんだぞ助けに行くのが普通だろ」

「今回、我々は壁の向こう側へは

一切関与しない」

「つまり、助けに行かないってことか？」

「そうだ」

「ふざけるな　！！

神はどこに行った直接話す」

「これが神の意志だ

我々の考えが神の意志だ」

「どうして、助けに行かないんだよ」

「我々が向こう側に侵入すると言うことは

宣戦布告を意味するからだ」

「なに言ってるのかさっぱりわからないよ」

「会議の邪魔だ出て行け」

そう言つて老人の一人が俺に

右手を向け衝撃波を出してきた

それを喰らい部屋から追い出されてしまった

「あの野郎・・・」

「巧真、大丈夫か」

横には何故かバイロが立っていた

「なんで？中に入れないはずじゃ・・・」

「緊急事態の場合、壁は全てなくなるんだ
それより、どうなった？」

「どうもこうもあるか

助けに行かないらしい」

「なんでだ？」

「知るか

もう一度行ってくる」

そう言つて扉に手をかけた時

「無駄よ」

横に真由がいた

「おい、ということだ

何で助けに行かないんだ」

すると真由は何かの力を使った

周りを見ると

バイロや他の人たちが突然動かなくなった

「ちよつと、気を付けてよね

私が未来を創つてるとかはみんな知らないんだから」

「これも考えた未来なのか？」

「違うわ、誰かが書いた物語だわ」

「誰が書いたんだ？」

「わからない」

「つて、なんで会議に出てないんだよ

お前から言つてくれよ」

「だから、言つたでしよ無理だつて

確かに私は神だけど

緊急事態になると

私はお飾りみたいなものなるの」

「政権が変わるってことか？」

「そう、あの老人たちにね

私は今何も出来ない

ただどうなるかはわかってる

この街は私の意思も反映されてるからね

このまま助けには行かないわ」

「なぜだ？意味がわからん」

「いい？壁の向こうとは

簡単に言えば一つの国なのよ

そして互いに

干渉はしていないけど

敵対してる

些細なことで戦争になりかねない

それなのに助けに行つてごらん

適当に言い訳を付けて戦争が始まるわ」

「でも、明らかに向こうが仕掛けてきただろ」

「だからと言つて

こつちから戦争をするつて言うの？

馬鹿言わないでよ私はいやよ戦争だなんて」

「それじゃ、リムを見捨てると言うのか」

「一人の命と住民の安全

天秤にかけるまでもないわ」

「俺は納得いかないぞ」

「でしょうね

主観的に見ても駄目よ客観的に見ないと」

「・・・力を解いていいぞ

バイロにこのことを話す」

「いい？私が未来を創つてゐることは」

「わかつてる、言わないよ」

「ならいいわ」

バイロや周りの人たちが動きだした

「バイロ、どうやら本当に

リムを助けにはいかないらしい」

「くそっ、どうして」

「それがこの街の方針らしい」

「やっぱり、駄目だったか」

そう言つて、どこかへ歩きだした

「バイロどこに行くんだ？」

「時間はあまりない

俺一人でも助けに行く」

「そうかその手があるか．．

俺も行く案内してくれ」

それを聞いた真由が

「ちよつと、さっきの話聞いてなかったの

向こうに行つてみなさい

戦争が始まるわよ」

「この国は関与していない

それでいいんだろ？」

つまり俺とバイロの単独行動

俺達が捕まっても

一切の関与を否定すればいいんだ」

「そんなのが許されると思つてるの？」

「もちろん、無理だと思う

だから急いで

知られる前に行く」

そう言つて俺はバイロの後を追いかけた

「ねえ、バイロ

壁の向こう側って何？」

「ああ？今まさに

そこに向かつてる最中だよ」

「いや、そうじゃなくて」

「扉の向こうの世界と同じだ

別の世界につながってる」

「それがどうしてこっち側にやってきたんだ？」

「さあ、向こうの要求もわからないままだしな」

「わからないことだらけだ」

「とにかく、リムの救出だ

それ以外はどうでもいい」

「わかつてる」

「着いたぞここだ」

そこは城の中で

目の前には城の壁とは色が違う

レンガでできた壁があった

「うん、壁だ・・・」

だが入口が無い

「バイロ、入口はどこ？」

「レンガに手を入れてみる」

言われたとおりにしてみると

何にも抵抗がないまま

レンガに手が入って行った

「わかつたろ？」

「見えない壁の反対バージョンみたいな感じだな」

「うん？まあそうだな

入るぞ」

「待った、待ち伏せされてるってことは？」

「それはないな

「向こうの世界では待ち伏せしても意味がない」

意味もわからず

俺達はレンガの中に入って行った

単独行動は命がけ

レンガの中をくぐると

辺り一面霧で何も見えなかった

「うわっ視界ゼロだ」

「馬鹿、力を使え

少しだが気配は感じるようになる」

力を使うと

横にバイロがいるのを感じた

地面はまるで泥沼でうまく動きが取れない

「こんな所に本当にいるのかよ」

「ああ、しばらく進むと

城が見えてくるはずだ」

「・・・？」

ここに来たことがあるの？」

「さあ・・・？」

来たことはないと思うが

何でかな来たことがあるようなないような」

「??？」

「とにかく、行くぞ

敵に見つからないようにな」

「わかった」

集中すると

辺りがよく見えてきた

遠くではカエルのような物が鳴いている

そのまま、進んでいくと

遠くで何か大きな翼を羽ばたく音が聞こえた

バイロはまだ気づいていない

「バイロ・・鳥だ、でかい鳥がこっちに向かってくる」

「鳥？何のことだ？」

「わからない、けど数が増えてきた

5、7、10

もつと来る、もしかして向こうにバレたんじゃないか？」

「それはないと思うが、巧真

刀を抜いておけ」

そう言っでバイロは炎とナイフを取り出した

俺も刀を取り出し

強く握った

しばらく、静けさと緊張状態が続いた

だんだんと翼の音は大きくなってくる

しだいにバイロにも聞こえてくるようになった

「確かに数は多いな・・

来たぞ」

霧でうまく見えないが

まるで翼を生やした鬼が目の前に

現れた

肌は霧に紛れるためか白く

頭には角を生やし

手足に鋭い爪のような物がついてる

声は高くキヤーだかギヤーだか叫んでる

「なんだ、あの生物？」

そんな事を言ってるうちに

バイロは鬼にめがけて

炎を飛ばした

鬼たちはヒラリと交わし

一斉に俺達に向かって急降下してきた

俺は鞘から刀を抜き
構えた

戦闘はしばらく続いた
巧真は相変わらず
敵の攻撃をかわし
その後に一撃を食らわす
大勢で来れば衝撃波を出して
数を減らす
バイロの方もナイフと炎
体術を巧みに使い
鬼の数減らしていった

最後の一匹を斬り
戦闘は終わった

「おしつ、終わり」
そう言つて刀を鞘に戻そうとすると
誰かに足元を掴まれた
下を見ると

そこには人間が倒れていた
俺は驚いた

そいつは腹を切られていて
大量に出血していた
どう見ても刀の傷だ

多分、この傷じゃもう・・
ただ、まだ意識がハッキリしているようだった
「た、頼む・・この傷じゃ

もう助からない・・ら、楽にしてくれ」

俺はかなり動揺した

今まで俺は鬼のような生物を斬っていたはずだ
人間は斬っていない

「た、頼む・・・」

そう言っただけ俺の脚を強く握ってくる

「え・・・え?・・・」

俺は突然怖くなった

手や足が震えだし

刀も待つていられずその場に落とし

腰をついた

それを見ていたバイロがやってきて

俺をどかし

その人に向かつて

「言っただけおきたいことはあるか?」

「最後に家族に会いたかった」

それを聞くと

そいつの胸にナイフを突き刺した

「ば、バイロ・・・これということ」

何とか、冷静を保とうと

必死だったが

目は焦点が合わない

呼吸は荒く何とか深呼吸をしたりしていた

霧が少し晴れて行くと

周りには鬼の死骸ではなく

人が大量に倒れていた

「どうということだよ　!!これ」

倒れている人は全員が刀傷などで倒れている

「お、俺、いままで人を斬ってたのか？」

「・・・ああそうだ」

「知ってたのか」

「薄々な体の一部を变形させる

能力者が侵入してきたんだ体全体を变形させる

奴がいたっておかしくはない」

「で、でも・・・」

「・・・斬ったのは初めてか」

「人だって・・・し、知らなかった」

涙が大量にあふれてきて

俺は両手で顔を覆った

「落ち着け、斬らなきゃ

俺達がやられてた

それにあいつ等は人間じゃない」

「何を言ってる

どう見たって人間だろ」

「違う、そうじゃない

扉の向こうと同じだ

人間扱いはされない」

「なに言ってるんだ・・・？」

「・・・」

「人を斬った・・・」

動揺してる巧真を見て

「お前はここに残れ

足手まといになる」

そう言っただけは先を進もうとした

「なあ、バイロ

「この世界はもともとあったのか
俺が今まで知らなかっただけで」

「ああそうだ」

「昔はこことも戦争をしていたんだ」

「戦争？ そんな事知らないぞ」

「・・・いや、俺も知らなかった」

「バイロ？」

バイロの様子を見ると

何かを思い出してるのか

片手で頭を押さえしばらく固まっていた

「・・・そう言うことが」

「バイロ？」

「思い出した」

「なにを？」

「立て、悪いが」

「お前も連れて行かないといけなくなった」

巧真の肩を掴み無理やり立たせた

「バイロ、どうしたんだよ」

「そうだ、俺達はここと戦争をしてたんだ」

俺達の立場を守るために

あと少しで俺達の勝利が確定するところだった」

「バイロ？」

「そこに神が現れたんだ」

そして、俺達に線を引いた

記憶も書き換えて」

「何を言ってるんだ・・・」

「これも想定済みってことか」

「バイロ・・・もしかして」

「行くぞ、巧真

お前が鍵なんだからな」

「物語が見えているのか」

「・・・そうなのかもしれないな」

「この後は何が待ってるんだ」

「・・・さあ、よく見えないから

わからないな

ただ言えることは自分を受け入れるって事だ」

「何を？」

「全てを、今やったこと

これから起こることその全てをだ」

「・・・」

「もう落ち着いただろ

行くぞ」

「ああ・・・わかった」

そう言っつて巧真は刀をその場に置き

バイロの後を追った

進んでいくと

霧がだんだんと晴れてきて

城が見えてきた

「リムがいるのは

地下だ」

「見張りがいるんじゃないか？」

「大丈夫だ、バレないようになってる

だからいいか、俺の言うとおりに動けよ」

リムは牢獄に入れられていた

手足は縛られ

目隠しをされ

能力を使える状態ではなかった

何とか、目隠しが取ればどこかに

移動ができるかもしれないと

外そうと必死にもがいてた

見回りの奴に怒られようが関係なくもがいた

しびれを切らした見回りが

牢獄の扉の鍵を外し扉を開けた

その時、鈍い音が聞こえ

扉を開いた見回りの奴が倒れた

リムは状況が理解できず

ただひたすらもがき続けた

すると目隠しが外され

そこには巧真がいた

「リム、大丈夫？」

助けに来たんだ早く逃げよう

バイロも来てる」

「ど、どうして

神が許すはずがない」

「俺達の単独行動

さあ、早く」

そう言つて牢獄から脱出した

廊下で見張りをしていた

バイロと合流し

城から脱出しようとした

だが、広間まで来ると

そこには敵が待ち伏せしていた

「諦める悪いようにはしない」

向こうは降伏を要求し

俺達を囲い始めた

後ろではバイロがリムに説明をしている

出口は向かい側にある

バイロの合図で

そこまでリムの力で移動しようと言ったことになった
敵はジリジリと近寄って来た

「今だ」

その合図で

リムの肩を掴むと

一瞬にして出口まで移動した

だが、それを読まれてたらしく

上から大男が降ってきた

直撃はなかったが

バイロが深手を負い

その場に倒れた

背中を肩から腰に掛けてバツサリと切られた

追い打ちをかけようとする大男に

リムが力を使い

敵のいる方へ大男を移動させた

俺はバイロの方に近寄り

「バイロ、しつかり

なんで避けなかったんだよ」

バイロは意識がしつかりとしていなかった

「くそつ、チコはどうやって

傷を治してたんだよ・・・」

「い・・・行け」

「駄目だ、バイロも」

「こ、これで・・・いいんだ」
「・・・？」

すると、リムが俺の首を掴み
力を使って移動しようとしていた
「待って、リム

駄目だ、放して・・・放してくれ」
そう言ってるうちにリムと俺は

城の外に脱出した
それを見計らってか

バイロの体から大量の炎が吹き出し
敵の足止めをしていた

「バイロを助けないと」

「駄目、巧真

落ち着いてあれじゃもう助からない

バイロもそれをわかっててこうしたの」

「でも・・・」

そう言いかけた時

炎が突然止んだ

敵がバイロの胸に剣を突き刺していた

そして敵がたくさんこっちに押し寄せてきた
俺は悲しさと

助けられなかった悔しさが

入り混じり言葉にならない

声を叫びながらその場に崩れた

そして感情が高ぶり

力の制御が利かなくなっていた

そんな中

巧真の頭の中に何か音が鳴り始めた
すると敵やリムが突然

頭を押さえながら叫び、もがき苦しみはじめた
苦しみの余り気を失うものもいた

その状態はしばらく続き

頭の中でブチツという音とともに

巧真は気を失い

倒れた

相変わらず、敵は苦しんでいるが
そんな中、リムは苦しみながらも
倒れてる巧真を背負い
この世界から脱出した

時が経てば社会も変わる

壁の向こうの側の襲撃事件から
かなりの月日が流れた

事件以来、ソルジャー兵士のあり方
について議論が続く

兵士のあり方を変えることになった
代表を何人か決め

その下に部下を置く

今までは部下も上司もない
横社会だったが

部下と上司が存在する縦社会になることに
抵抗を感じる人もいたが今ではそれもなくなった

そしてその代表者が
神と共に政治を動かす

そのような体制をとるようになった

テニムやリムも

バイ口の死から立ち直り始め
城も落ち着きを取り戻していた

そして、巧真は

今、扉の向こう側の世界に
二人の部下を引き連れある所に向かっていた

リムが俺を背負い

壁の向こうから脱出した後

俺が目を覚ました時には
急展開を迎え

問題がほぼ解決していた
壁の向こう側が壊滅したのだ

「壊滅？どうして・・・」

「わからない

それから、お前が捕まえた捕虜だが
今朝、自決しているのが見つかった」

「・・・」

バイロは？」

「向こうで弔ってくれたらしい」

「でも、壊滅って言うのは？」

「わからない」

「嘘だね」

「どうしてだ？」

「わからない、ただなんとなくだけどわかる」

「なに言ってるんだ？」

「動揺してる、何かを知ってる

知ってるんだろ？テニム」

「・・・」

「教えてくれ

俺だつて薄々は気づいてるんだ」

「・・・壁の向こうの奴等は

全員、頭を抱えて死んでいた

ひどい有様だったよ」

「・・・」

「ただ一人生存者がいるんだ
そいつがお前を呼んでる」

「ああ、知ってるよ」

「え？」

「壁の向こうの城で待ってるんだろ？」

「あ、ああそうだ」

それを聞くと

巧真は布団から起き上がり

壁の向こうに向かった

「俺も着いて行こうか？」

「いや、いいよ

俺一人で大丈夫だ

それに俺一人じゃないと駄目だ」

レンガをすり抜け

向こうの世界に入ると

霧は全くなかった

城の方に向うにつれ

倒れてる人の数が増えていった

まるで時が止まってるかのように

苦痛の表情をそのまま残し

死んでる

俺はただ目を背けることしかできなかった

城の中に入り

生存者に会いに行った

そこには椅子に

貫禄のあるおじさんが座っていた

「待っていたよ」

「どうも、王様」

「その言い方は止してくれ

みんな死んでしまった

私の存在理由はもう無くなったんだ

すでに王様ではない」

「バイロを弔って下さって

ありがとうございます」

「いや、私のせいで

彼は死んでしまった」

「いや、俺の力不足です・

どうして、こんなことをしたのですか？」

「聞いてないのか？」

「はい

ただ、見えるようにはなりませんでした」

「・・そうか、君も見えるようになったのか」

「ええだからそれに従わないと」

「じゃあ、これから私がすることも？」

「はい、わかってます」

「復讐・・とも言えるが

私達は人間になりたかった

いや人間扱いされたかったんだ

過去になにがあったか知っているかね？」

「いえ、まだです」

「そうか・・」

「少し教えてくれませんか？」

「全ては5年前に始まったんだ

5年前にこの世界にこの社会が生まれた」

「5年前・・」

「それ以上は言えん

本当にすまなかった

君には悪い事をしたと思ってる

とても、残酷なことだ」

「でも、その選択のお陰で

あの街は救われた」

「だが、私の国は滅んだ」

「すみません」

「君のせいじゃない」

こんなものは存在してはいけない

そう思ったからこれを選択したんだ

・・これから、頑張ってくれ」

そう言つて、王様はある物を取り出し

自分の頭に向け引き金を引いた

パンと言う発砲音とともに

王様は椅子から転げ落ちた

巧真は王様の元に歩き

王様が握っている

この世界には存在してはならない物を

王様から外した

この世界には存在してはならない物を拾い

「どうして、こんな物がここに」

巧真は拳銃を握りしめ無表情のまま

まるで決まったセリフを

棒読みするかのようにその言葉を言った

「隊長、危ない」

扉の向こうの村の子供が

俺にめがけて石を投げていた

「うん、ちょうどこのタイミングだ」

そう言いながら頭を下ろし

石をかわし何事もなかったかのように
平然と歩き出そうとしていた
だが、そうはいかなかった

部下の一人が子供にめがけてナイフを投げていた
俺は一瞬で子供の目の前に移動し
飛んできたナイフをはじ返した

「村に帰りな

別に村を襲いに来たわけじゃない」

子供はかなり怯えていた

そろそろ、親がやって来る頃だ

・・来た

子供を抱え父親の所に持つて行つた

「気を付けて下さい

危なくこの子を殺すところでしたよ」

「くそつ異端者め・・」

「力もない奴が吠えてるんじゃないねえ

惨めに見える」

そう言つて俺は部下のいるところに向かつた

「おい トイ、なんでナイフを投げた」

「農民ごときが

隊長に石を投げて来たんですよ」

「俺達は本当ならここにいてはいけないんだ
それにあのぐらゐの攻撃なら力を使わないでも
避けれるだろ」

「でも・・」

「文句があるなら

ついて来るな帰れ」

「・・・」

「わかったなら行くぞ」

そう言っただけは歩きだした

「隊長」

そう言っでもう一人の部下のカイが俺に駆け寄ってきた

「私達の前ならいいですが」

他の部下の前であんな態度とらないでくださいよ」

「あんな態度って？」

「農民を助けるような態度です」

隊長の威厳が無くなってしまいます」

「お前もそう思うのか？」

「いえ、私はあくまで一般論を言っただけです」

「つたく、面倒くさいな」

俺はただ

いいと思っただけ事を選択してるんだ

その後でどうこう言われる筋合いはない」

そう言っただけ俺はまた歩き始めた

「どうして、俺達

隊長の部下なのかな？」

「え？別にいいと思うけど」

「まじかよ？」

俺はリム隊長の方が良かったな」

「ええ、そお？」

「カイ、わかって無いな

あの人の下で働いてみる

毎日がバラ色だぜ

30を超えているのにあの美しさ・・・」

「おい、トイ

言いたくはないがあの人は男だぜ」

俺が進みながらそう言っただけ

部下二人が固まっていた

「ええっと・・・」

「やっぱり、隊長の元の方がいいかな？」

「でしょ？」

俺達はやけにボロいが

二階建の家の前に到着した

「着いた、ここだ

お前たちはここで待ってる

絶対に入ってくるな」

そう言つて

家の中に入って行つた

「やあ、巧真君」

「お久しぶりです

甘次郎さん」

「今日はどうしてここに来たのかな？」

「わかつているでしょ？」

「え？」

「あんたの終わりをを見に来たんだ」

そう言つて

俺はナイフを取り出し

甘次郎さんの心臓めがけて投げた

甘次郎は、何とか避けようとしたが
左わき腹をかすった

そこから血が出てきているのを
右手で抑えた

「な、何をするんだ巧真君」

「もうわかってるんですから

そんな芝居は止めて下さい」

「何を言ってるんだかわからないよ」

「あなたは異端者だ」

「そんなことはない

現にナイフだって避けられなかった

知っているぞ異端者は

無意識のうちに力を発動し

生存本能で避けるはずだ」

「そうだ、普通の異端者ならね」

「何のことだ？」

「右手を放せ」

「なんだって？」

「右手を放せって言ってるんだ」

俺は力を使い

甘次郎の右手をわき腹から離れた

すると、さっきナイフで切られたはずの

脇腹は傷もなければ切られたあともなかった

「あなたの場合、自然治癒力が半端じゃない

それがあなたの特殊能力

でもそれしか使えない

力の存在に気づいたのは

トカゲに噛まれてからもしくはもっと前」

「ああ、そうだとカゲの傷がやけに

早く治ったのに疑問に思ったのがきっかけだ」

「違うね」

「これは本当だ」

「じゃあ何でこんな村はずれに家を建てている
異端者だとばれたくないからじゃないのか？」

「違う、そんなわけじゃない」

「まあそんな事はどうでもいいですよ

本題に入りましょう」

「本題？」

「いい加減にしてください

あなたにだっで見えてるんでしょう？」

「何がだい？」

「未来が」

「そうか君も見えるように・・・」

「ええ、神が描いた未来が見えます

俺はそれに従う

バイロがそれに従ったように

それが俺にとって正しい選択だから」

「そうか・・・かわいそうに」

「なにがです？」

「本当にそれがいいと思ってるのかい？

自分が滅んでもいいと？」

「そうです

だから、ここにきた」

「未来を変えようとは思わないのかい？

君は少なくともこの村の未来を救ったんだ」

「思いません」

「残念だよ

私は君に影響を受けてここまで来たと言うのに

君がいなければ私は昔の事も思い出さなかった」

「昔の俺はもういないんですよ

さあ、渡して下さい」

「断る」

「あなたのせいで壁の向こうは滅んだんですよ」

「違う、私の言った通りにしなかったから滅んだんだ」

「王はあなたからあれを

受け取った事を悔やんでました」

「所詮は革命を拒む臆病者だったってことだ」

「あれはこの世界には存在してはいけない

あれは人を殺す道具だ」

「なら聞くが君の刀はどうだ？」

「あれも人を殺す道具だ」

「刀はもう捨てました

この世界に争いの道具はいらない」

「捨てただと？」

「お前は世界が変わる所を見たくはないのか？」

「さあ、早く渡すんだ」

「嫌だ、あれは私のこの世界での

存在理由なんだ

渡すことはできない」

「あれのお陰でどれだけの人が苦しんだと思う
渡すんだ」

「・・君は日本には帰りたくないのか？」

「突然何を言い出すんですか」

「君は神の部屋に入っただんだけだろ？」

「椅子の背もたれがやけに大きかったはずだ」

「だからなんです？」

「あれは背もたれじゃない

扉だ

神がそこに座っているのは

誰も入れたくないからだ」

「それが元の世界につながってると？」

「そうだ

神は俺達をここに閉じ込めようとしている」

「日本じゃないかもしれない」

「それはそうじゃない

私達で物語を変えればいいんだ

現に私は成功した

壁の向こうの奴等にあれを渡し

私が言った通りにすればあの街は滅んだんだ」

「俺は別に帰りたいだなんて思わない

早く渡せ

それであんたは終わりだ」

「断る　！！絶対に嫌だ」

そう言つて銃を取り出し俺に銃口を向けた

「わかつているはずだ

それを使つても俺は倒せない

未来が見えてるんだろ？」

「どうかな？

未来は変えられるんだ

これは私の物語だ誰にも邪魔はさせない」

すると、扉が突然開き

カイとトイが侵入してきた

それを見た甘次郎が細くほほ笑んだ

「馬鹿野郎、何で入ってきた！？」

「言い争う声が聞こえたので

すみません命令違反です」

「そんな事はどうでもいい

出て行け」

俺は力を使い

二人を家の外に飛ばした

甘次郎はケタケタと笑っている

「これもあなたが考えた物語ですか？」

「さあどうだか・・・」

ただこれで未来がまた変わる」

「そんなことはさせない

俺は神と理想の世界を実現させる」

「私は日本に帰るんだ」

甘次郎は俺に引き金を引いた

俺はそれをかわし

力を使い銃の温度を上昇させた

甘次郎はたまらず

銃を落とした

皮膚がただれていたがそれも一瞬にして治った

落ちた銃はそのまま温度を上昇させ

溶かした

銃のなれの果てをみて

甘次郎は大声で泣き始めた

俺はそれを横目で

家から立ち去ろうとした

「おい、待ってくれ」

「何ですか」

「私にとって

これが特別なものだ知っているんだろ」

「ええ申し訳ないと思いますが

これもこの世界のためです」

「世界のためか・・・」

「あなたが俺とは

違う時代の日本から来たのも知ってます」

「そうだ、だから私は日本に帰らなくてはならない
そのために私はあの扉が必要なんだ」

「帰っても無駄です」

「日本は負けたんです」

「そんな事はどうでもいい
帰ることに意味があるんだ」

「くだらない」

「なんだと」

「くだらないと言ったんです
日本に帰って死ぬんですか？」

「そんなことして何の意味があるんですか
戦争なんかで国を守って何の意味がある」

「未来から来た」

「奴なんかにわかる訳がない」

「わからないですよ」

「でも、戦争は憎しみ以外に何も生まない」

「その通りだ」

「戦争にヒーローだなんていない」

「いたとしても殺人鬼と狂人だけだ」

「なのになんで帰りたいがるんですか？」

「家族のためだ」

「私が日本に帰りあの場で死ぬ事に
意味があるんだ」

「私がそこで戦うことで家族が守られてる
私がそこで死ぬことで家族が守られる
そう信じて戦ってきた」

「いつでも帰れるようにあれが必要だった
それなのにお前が奪った　！！」

「申し訳なかつたと思ってます」

「感情のこもって無い

そんな決められた

セリフを言われたってなんとも思わん」

そう言うのと甘次郎は俺に日記を放り投げてきた

「持っていけ

私にはもう必要ない」

「何ですかこれは？」

「未来がある様に過去もある

未来はいくつもあるが過去は一つだ

私の最後の悪あがきだ」

「予定にない事を俺がすると思いますか？」

「これは私の賭けだ

読むか読まないかは自分で決めろ」

「とりあえず、預かっておきますよ」

そう言って俺は家を出た

外にはカイとトイが待っていた

「なんで、入ってきた」

「い、いえあの・・・その」

「俺達も正しいと思った事を選択したまでです
隊長にどうこう言われる

筋合いはありません」

「どうこう言えるのが隊長なんだよ トイ」

「・・・すみません隊長」

「俺の影響か・・・

今日の事は忘れる

お前たちは何も見ていない
いいな？」

俺達は扉へ向かった

扉の前に着くと

そこには村長が立っていた

「先に行つてろ」

「でも隊長・・・」

「大丈夫だから行け」

「わかりました」

そう言つて二人は扉の中に入って行つた

「久しぶりだね、巧真君」

「そうですね」

牛は元気ですか？」

「君がいないことがわかると

森に帰つて行つたよ

しばらくは君を探して

家の周りをぐるぐるしていたけどね

探し回る牛は見えていらなかったよ」

「そうですね・・・」

「変わったね巧真君」

「そうだと思いますよ」

「ああ、初めて会つた時の目にそっくりだ」

「ええ、自覚してます」

でも今はそれが正しいと思つてますから」

「いつでも、帰つてきていいんだよ

私は歓迎するよ」

「無理はしないでください

何とかそう思おうしてるんでしょう？

俺を見て怯えてますよ」

「いや・・・それは」

「大丈夫です

村の方にはなるべく近づきません」

「そんな事言わないでくれ」
「それじゃあ、失礼します」
そう言って俺は扉をくぐった

理性と本能

「ああゝ暇ね・・・」

そう言つて

椅子に座りながら、ダラダラとしてると

神の前に突然、巧真が現れた

「キャツ、ちよつと来るなら

ドアをノックぐらいしなさい」

「無茶を言つな

ワープの意味がないだろ

ほら、帰還報告書」

そう言つて、神に紙を渡した

「お疲れ様」

「まったく、面倒くさくなつたな

行動するのにいちいち

紙を作らないといけないなんて」

「仕方ないじゃない

あなたの単独行動でどれだけ

迷惑をかけたと思つてるの」

「ああ、すまなかつた・・・」

「それで、終わったの？」

「終わったからここにいるんだ

甘次郎さんも、これで終わりだ」

「そう・・・」

「それじゃ、俺は帰るよ」

「待つて」

「なんだ？これは、予定にないぞ」

「どうしても彼女が聞きただつてるの

あなたは、本当にこれでいいのかった？」

「何を言ってるんだ？」

お前が考えた

理想の世界を完成させようとしてるんだ

そのどこが悪い」

そう言って部屋から出て行った

扉を開け廊下に出ると、そこには

チコが立っていた

「よお、チコ」

「・・・怪我してる」

「んあ？」

そう聞いて調べてみると

右腕の裏側から血が出ていた

「あれ？いつの間に？」

甘次郎さんか？」

「動かないで」

そう言っ腕の治療を始めた

「ありがとう」

「無茶すぎ

死んじゃうわよ」

「残念ながらまだ死にません」

「真由だけじゃなくて神様も心配してた」

「そうか・・・

真由の暇つぶし相手

チコしかいなくなっちまったからな

真由の事よろしく頼むわ

じゃっ俺帰って寝るわ」

「まだ夕方」

「いいの、いいの」

「夕飯も食べてない」

「その時になつたら起きるさ

いやゝ、本当にお前だけだよ

決まつた言葉を喋らないのは

ああ・・待てよ

トイとカイも変な行動をとつてたな・・」

「・・・・」

「それじゃあな」

そう言つて巧真は消えた

そして現れた場所は宿の前

「ただいま」

「おお、帰つてきたか

今日は会議があるんじゃないのか？」

「んゝすっぱかした」

「おいおい、いいのかよそれで」

「いいの、どうせ結果は決まつてることだし」

「??」

「俺しばらく寝る

二階だれもないだろ」

そう言つて二階に上がつていった

部屋の扉を開けると

そこには俺がいた

「よう、お帰り」

「黙れ、眠いんだ俺は寝る」

そう言つて、俺は布団の中に入った

パイロの事があってから
俺にしか見えないが
もう一人の俺が見えるようになっていた

「おい、なんだよその態度
冷たすぎるぞ

相変わらず死んだ目をしてるなお前は
いい加減、俺を表に出せ

お前の死んだ目なんて一発で無くなるぞ
「だまれ」

「そんなんで楽しいのか？」
お前は、甘次郎の言った通りのやつだろ
進化を求めている

それなのに理性のお前が邪魔をする」

「だからって本能のお前を表になんて出せるか」
「なぜだ？」

そんな縛られた未来なんか
従っていいいいのか

俺は嫌だぜ」

「俺はそうは思わない」

「嘘だね、お前は嘘つきだ
本能が本心に決まってるだろ

お前は自由を求めている
自由のためだったら神だって殺してもいい」

「違う」

「神を殺して俺が神になる、そして新たな社会を創る
お前はそんな野心家だ」

「それは、お前だろ」

「だから、お前が俺なんだよ

俺がお前のように」

「だからなんだ、俺には関係ない」

「関係ないだと？」

理性がなに言っただやがる

俺を表に出せ楽しくなるぞ」

「黙ってる」

「まったく、自由を求めて何が悪い」

「お前の言う自由は間違えているんだ」

「なら聞くが」

この世界では自由はあるか？」

「少なくとも俺と神以外は自由だ」

「あれのどこが自由だ？」

創られた未来を

ただのうのうと、生きてるだけじゃないか」

「だが、それをみんなは知らない」

「知らなければ幸せってか？」

「そうだ、あともう少しで

彼女の理想郷は完成する

そこでは争いもない

だから武器なんてものも存在しない

彼女の制御によって人殺しだつて無くなる」

「それでも、制御されてるんだぜ」

「だから、言っただろ

知らなければ、幸せ

知らなければ、制御されてるとも

疑問に持たない」

それを聞いた、もう一人の俺が

俺が深いため息をついた

「それが完成する時には

お前は、この世から
いなくなってるんだぞ」

「そうだ、物語を描けるのは一人でいいんだ
三人もいらない」

「はぁ、腐ってきたなお前は
神様の目にそっくりだ」

「うるさい・・・」

そう言っただけは眠りに入った

この頃、同じ夢を見るようになった
バイロが、俺の目の前で
胸を刺される夢

そして、刺しているのは、俺だ
刺しながら、俺は笑ってる
それだけでは飽き足らず
周りにいる敵をも

斬って、斬って、斬りまくる
それに怯え逃げ去ろうとする
敵も必要に迫られる

そんな俺を、止めようと
必死に脚にしがみつき
静止させようとする
だが、俺は止まらない

全員を斬り終わると
最後に神が現れる
神は俺を見て怯える様子もない
むしろ哀れんでいる

そんな神の態度にムカつき
俺は、神に向かって刀を振り下ろす
そこで夢から覚める

布団から跳ね上がると

横には俺がいる

「よお、またあの夢か？」

俺は汗を拭きながら

「ああ、最悪な夢だ」

「あれのどこが最悪な夢だ
むしろ、いい夢だ

お前の本心を現してるじゃないか」

「あれのどこが、俺の本心だ」

「見ての通りだ

お前は、人を殺すことを好んでる」

「ふざけるな

冗談じゃない」

「現に今までの戦いでもそうじゃないか
攻撃をかわして、一撃を食らわす
それは相手が

斬られる！！そう思った時の

絶望感、目に現れる恐怖の表情

それを一刀両断する

その感覚が、お前にはたまらない」

「違う」

「今でも人斬りの感触が忘れられない
鬼だと思ってたら実は人だとわかった時
思い出すと、やけに鮮明で背筋がゾクゾクする」

「そんな事はない」

「そう、そう思いたかったお前は

あの時、心が混乱し涙があふれた」

「黙れ」

「ああら、凶星かい？」

「黙れって言ってんだろ

消えろ　！！」

耳につく笑いを残し俺は消えた
それと同時にチコが入ってきた

「どうしたの、すごい汗」

「なんでもない

どうした？もう飯か？」

「そう」

神様、今日も来ないみたい」

「そうか・・・」

「神様、心配してた」

「何をだ？」

「巧真を」

「余計な心配はしなくていいのに」

「私も心配

巧真、バイロの事があってから変」

「・・・そうかも色々な見えるようになったし

でもチコも変わっただろ」

「？」

「よくしゃべる様になった」

そう言うとチコが顔を赤くした
それを見て軽く笑っていると

チコの後ろに、俺が現れた
その事にチコは気づいていない
どこからか刀を取り出し
チコに刀を振り下そうとしていた
「なっ・・・」

俺は必死にチコを引き寄せ
何とか俺を盾にしようとした
もう一人の俺は、刀を顔の目の前で止め
それを見て笑いながらまた消えた
「くそっ」

チコは状況が理解できず
硬直していた

「あっ、わりい」
そう言つてチコを放した
殴られる、そう思ったが
「ご飯、下で待つてるから」
そう言つて、部屋から出て行つた

「どういうこと？」

突然目の前に神が現れた

やけに深刻な顔をしている

「なに、突然現れるの流行つてるのか？」

「いつから」

「？」

「いつからよ」

「はあっ？もしかしてチコの事が

いや、違うぞ何にもないぞ」

「そうじゃない（それもあるけど・・・）
もう一人の自分よ」

「・・・」

「見えてるんでしょ」

「ああ、バイロの事があつてから
本能とか名乗る俺が現れる

でも、大丈夫だ外には絶対に出さない
もう少しでで全てが終わるんだ」

それを聞くと真由は
ムツとした表情をした

「・・・？どうした？」

「私は別にいいと思うけど
本当にそれでいいの？」

「しつこいな・・・」

お前が望んだ未来だ

せつかく実現するのにどこが悪いんだ」
「でも・・・」

「おいおい、弱気だな

今はどっちの性格が出てきてるんだ？」

「・・・わからない」

「？」

「どっちでもないの」

「おい、まさか・・・」

「とにかく、夕飯を食べたら
話があるから城に来なさい」

「駄目だ」

「どうして？」

「予定にない事をしようとするな

今やってることだつて

本当なら、予定にないんだぞ」

「いいから、ここでの最後の夕飯食べたら
来なさい待つてるから」

「最後の夕飯か・・・」

最後なんだし、お前も食っていかないか？」

「予定にない事は、したくないんですよ」

そう言つて神は消えた

生き方は人それぞれ

部屋を出るとチコが横に立っていた

「あれ？」

「ごめん、降りてくるの遅かったから
見に来た」

「そっか・・・」

そう言つて、下に降りようとする
とチコが突然、俺の服を引っ張った

「最後の食事つて？」

「別にそのままの意味だよ

テニムも警護に行くんだから

しばらくは食えないだろ

俺達も城に在住するようになるんだから」

「それでも、たまにはここに来る」

「そうだな」

「だから、どういう意味？」

「・・・」

「教えて」

「二日後に俺はこの街を出て行く」

「なんで」

「何でもだ

俺はここにいれなくなる」

「意味がわからない」

「未来が来ればわかる

さあ、飯だろ食いに行こう」

そう言つて俺は一階に下りて行つた

下に降りると

テニムが、飯の準備をちょうど
終わらせる所だった

「おい、降りてくるの遅いぞ」

「ごめん、二度寝してた」

「まったく、しばらく」

「ここで飯が食えなくなると言うのに」

「ごめん、ごめん」

「あああとなんか神様に呼ばれたから
これ食ったら行ってくる」

「ん？ああわかった」

「それにしても」

「テニムもついに城にお仕事か・
大変だね」

「まあ仕方ないさ」

「こんな時期だしな」

「そうだね」

「まあ、俺は大体バイロの代わりだろ」

「・・・」

「つと、悪い」

「いいよ、俺のせいだしな」

「俺の力不足だ」

「だから、巧真のせいじゃないって」

「無理してそんな事言わなくていいよ」

「違っつて俺はそんな・・・」

「俺にとっては責めてくれた方が楽なんだけどな」

「巧真・・・俺はお前のせいだって
思ってなんかいない」

俺は、その言葉についカツとなった

「違う　！！」

テニムは嘘をついてる

心の中では俺のせいだって思ってる
わかってるんだ

そんな事はそれなのにテニムは「

巧真、落ち着け」

「御馳走さん

ごめん、神様の所に行ってくる」
そう言って巧真は消えた

「巧真の奴、バイロの事あってから
変わったな・・・」

「そんな事ない」

「え？」

「変わろうと思ってるだけ」

「そうなのかもな・・・」

「テニムだってそう」

「そうかもな・・・」

チコだって変わっただろ」

「どこが？」

「俺とも会話するようになった」

「・・・」

巧真は神の部屋に現れた
「神様、来たぞ」

「遅いまた迷ったりしたの？」

「冗談だろ」

瞬間移動で迷うかって」

「まあ、いいわ」

もう少して完成ね」

「ああ、そうだな」

お前にとっては地獄の始まりだけだな」

「私がどうしてこんなことを」

やろうと思ったか知ってる？」

「どうしたんだ？突然」

「いいからどうしてだと思っ」

「そりゃあ、争いを失くすためだろ」

誰だって考えるだろ」

「実は、私は巧真君の時代より未来から来てるの」

「知ってるよ」

第三次世界大戦が始まったんだろ？」

「うん、世界的に」

石油、重油、食糧不足

になってね・・・

化学兵器や大量破壊兵器も使用されるようになった

一部地上では、暮らせなくなるまで戦争は続いた」

「世も末だな」

「私の父親もその戦争で亡くなったわ」

「そうか・・・」

そう言っと、真由は俺を見ながら

しばらく黙ってしまった

「どうした？」

真由は深く息を吐き出し

話を続けた

「そんな中、私はこの世界にやってきた」

「それが5年前か・・・」

「そうよ、誰かから聞いたの？」

「いや、まだ聞いていない」

「私が、ここに来た時は

この世界も戦争をやっていたわ

普通の人、能力者だけどお互いに違う能力を使う人」

「壁の向こう側と、この街の事か」

「うん、そんな中に私は放り込まれた

どこに行っても戦争、戦争、戦争

大体の原因は、互いの思想の違い

もしくは、この世界のように能力があるかどうか

あったとしてもその種類の違い

たかがそんな事で、人は争う

だったら同じ人同士分けて

同じ思想を持たせれば争いは無くなるそう思ったの」

「壁や扉で分けてるのは

それが原因だったのか・・・」

「偽りの記憶も彼等に入れてね

でも、全てを変えることはできなかった」

「バイロの事か？」

「そう、あれは予想外だった」

「違うね」

「え？」

「あれは予定通りだった」

「そんな事はないわ」

「何を言ってるやがる

これからのシナリオを、言ってるか？

二日後、俺は能力を失い

この街には、いれなくなる

物語も見えなくなり

そして扉の向こうで

誰ともかわらずゆつくりと過ごす

だが、俺は相変わらず

独立した動きをする

誰とも、関わってはいないが

周りの人が、影響受けるかもしれない

それを防ぐために

神様、直々に俺を無の世界に葬り去る

これで、この世界に害を及ぼす者は

いなくなり世界は、争いもない社会が完成する

どうだ？ 違うか」

「・・・その通りよ」

「俺は、バイロの死が無ければ

物語は見えなかった

正直、あの攻撃ぐらいだったら

バイロだって、避けれたはずだ

未来が見えてなければな」

「・・・」

「つまり、あれは重要な鍵だったんだ」

「違うわ」

「バイロが死ぬ事も予定に入っていた」

「違う」

「何が人の生き死には制御できないだ

純粹そんな顔して

意外とすごいことしてるじゃないか

自ら手を下さずとも人を殺せるんだからな」

真由が突然、俺の前に現れ

頬を思いっきりはたいた

今までで、一番威力はなかったが

今までで、一番痛かった

涙をボロボロと流しながらも

巧真から一切目を離さなかった

「あ・・悪い

そんな事を言うつもりじゃなかったんだ」

「便利よね、多重人格って」

「え・・？」

「私がやったんじゃない

もう一人の私がやったのって言えば

済むことなんだし

巧真だって今、

もう一人の自分のせいにしようとしたでしょ」

「・・・」

「私、思ったの

そんなの意味がない

ただの、自己弁護だって

だから私は、正面から受け止めようと思った

何でも受け入れてた巧真君のように」

「違うよ」

「なにが？」

「俺は、受け入れてたんじゃない

ただ見ていただけだ

周りがどう変化するか、それを見て

俺もそれに合わせて変化しようとしただけだ

所詮、外から見てるだけなんだよ」

「それは、この世界に来る前の事で」

「ここに来てからもそうだ

自分は、変わろうと思っても

結局は何にも変わってなんかいない

だから、これから起こる事にも素直に従う

それが俺の、生き方だ

あいつにそう言われた」

「違うわ、もう一人の自分に

なに言われたか知らないけど

巧真君は・・・」

「とにかく！！」

話はこれで終わりだこれから

やらなきゃいけないことがあるんだ」

そう言って、巧真は部屋から姿を消した

身長なんて関係無い！！

巧真が城の入口に姿を現し

しばらく待つてると

息を切らせカイがやってきた

「隊長、探しましたよ」

「よお相変わらず」

お前の能力は便利だな」

カイの特殊能力は

能力者の場所が分かるというちょっと微妙な能力

「でも、隊長は突然消えたり

突然現れたり、どこに現れるか

わからないから困るんですよ」

「それが、カイの特殊能力の弱点だな」

そんな、気楽な返事をしていると

カイが真剣な表情をし

「そんな事より・・・」

「緊急集会だろ

わかってるよ」

言われる前に口をはさむと

「隊長、

ちゃんと今日は出て下さいよ」

なんて釘を刺された

「はいはい

それから、トイも呼んでおいてくれ」

「トイをですか？」

「うん、じゃあよろしく」

そう言うと、俺はまた姿を消した

会議室には

隊長格が勢ぞろいしていた
中にはリムもいる

「あれ？もしかして

また俺が最後かい？」

そう言いながら、俺は姿を現した
周りの隊長格の中には

「来なくても、良かったものを」
なんて、呟く奴もいる

この中には

俺の居場所はない

唯一、リムが周りを押さえる感じだ・・

まあ無理もない

周りは30代後半から50代前半

そんな中に、20歳にもならない俺

明らかに不釣り合いだ

「つたく、だから

来たくなかったんだよ

もうめんどくせえ

一応、出席したからな

会議は適当に頑張ってくれ」

そう言つと、俺は扉に向かって歩きだした

「巧真君」

リムが、俺の所にやってきた

「なんですか？」

「ここだけの話なんだけど」

そう言つと

俺に耳打ちで

「巧真君を隊長格から降ろそうとしているの」

「知ってますよ」

「今はなんとか、私と神様で

抑えてるけど

いつまでもつのか・・・」

「今日までですよ

後任もすでに、決めてるんです

大体、俺には隊長格だなんて

荷が重すぎるんですよ」

「でも、それでいいの？」

「いいんです。

みんなが、俺を追い出そうとしてる

理由だって知ってるし

丁度いいじゃない」

リムは深い溜息を吐き

諦めたのか

「・・・ならいいわ」

そう言つと、リムは自分の席に戻つた

扉の前に立つと

俺は、後ろを振り返り

隊長格全員に聞こえるように

思いつきり

「みんな、俺が怖いんだ

だから、隊長格から降ろそうとしてる

そりゃそうだよな、壁の向こうの奴等は

俺が全員nぶつ殺したんだ

それがこの世界で起こることを恐れてるんだろ

安心しろ、

今度お前ら全員ぶつ殺してやる（リムは例外）」

そう叫んで

扉を足で蹴り開け、出て行った

扉を出ると

トイとカイが立っていた

二人とも口を開かなかったが

トイが、口をあけた

「・・・隊長」

「また、盗み聞きか？」

礼儀がなっていないな」

「でも、隊長」

「もう俺は隊長解任だ。隊長だなんて呼ぶな

それで後任なんだが」

「隊長　！！」

「なんだ」

「俺をここに呼んだ理由はこれですか」

「そうだ、カイだけじゃなくて

お前も呼ぼうと思っただけ

それで隊長なんだが・・・」

「俺は、嫌です」

「んーじゃあ、カイが隊長な」

「俺は認めません」

「え？じゃあ、トイが隊長やる？」

「隊長は、隊長しか認めません」

「だから、俺は解任・・・」

続きを言おうとすると

突然、トイが俺の両肩を掴み
壁に押し付けてきた

改めて見ると、トイは俺よりも
身長が、高い見上げるほどだ
俺が身長小さいのかな・・

「どうして、そんなにあっさりと諦めるんですか
どうして、そんなにあっさりと俺達を残して
去っていくんですか」

「・・・」

すまないと思うが、これは決まったことだ」

「隊長はそれでいいんですか？」

「ああ、自分で選んだ道だ後悔はしてない」

「俺は絶対認めませんから」

そう言つてトイは、掴んでいた手を乱暴に放し
どこかへ

駆け出して行つてしまった

乱れた服を整えていると
今度はカイが口を開いた

「・・・隊長」

「部隊とトイの事、よろしく頼むな」

「俺も、認めたくありません」

トイは、俺と身長同じくらいかな？

「そう、言つな仕方ないんだ」

「どうしてですか」

「これ以上、周りに影響を与える訳にはいかないからな」
「・・・？」

「それに、お前の探查能力があれば
隊長の仕事なんて、御茶の子さいさいだ

サボってる奴が、いたらすぐにバレちゃうからな」

「隊長は、見周りはよくサボってましたからね」

「ああ・・・ばれてたかやっぱり」

「はい、でも隊長はやろうとすれば

俺にも隊長の位置見えなくなるんでしょ」

「まあ、頑張ればな・・・」

「神クラスはさすがですね」

「まあ、とにかくこれから頼むぞ

新隊長」

「・・・はい」

「それじゃ、お疲れ」

そう言つて、カイを残し階段を下りて行った

「おい、なかなかいいこと言っじゃないか？

心はこもってないけどな

まるで、心に深い穴が開いてるみたいだ」

階段を降りると

横に俺が座っていた

「黙ってる、これでお前も終わりだ」

「そんなんでいいのかよ

また、あの時見たく物語を変えようとしようぜ」

「黙ってる

それに俺には、物語を変える力はない」

「はっ何言つてやがる

壁の向こうで、無理やり変えようとしたくせに」

「違うそんな事はしていない」

「過去は、変えられない

パイロが死んだ事も変えられない
なのに変えようとした
だから、壁の向こう側の奴等は
全員、死んだ」

「違う、変えようとしたのはお前だ」

「だから、お前が俺なんだよ」

「俺はお前なんかじゃない」

「全く・・・つまらない

そんなんでいいのか？」

「ああ」

「そうか、もう昔のお前には戻らないんだな」

「そうだ

そもそも、お前が存在してる時点で

昔の俺はもういない」

「そうか・・・」

そう言つて、そいつは立ち上がり

こつちに近付いてきた

だが、何かおかしい

なぜか、あいつの足音が聞こえる

下にある石ころもあいつに当たると転がり

砂利も踏むと音がする

「まさか・・・」

「なんだ、今頃気づいたのか？」

「お前・・・具現化したのか」

「ああ、俺はなんだってできる

神クラスだからな

もう、昔のお前はいないんだろ

だったら、俺が取り返してやる」

「・・・」

「そうだな」

まずは、俺が今から、神様を殺すか
そうすれば物語がまた大きく変わる」

「そんな事はさせない」

具現化したってことは

今ならお前を潰せるってことだ」

「おいおい、自分を殺すって言うのか？」

お前の事を思っで、こんな事までしていると言っのに」

「お前は周りを不幸にする」

「周りって、どの事を言ってるんだ？」

人間なんてこの世界には、いないと思ってる癖に」

「そんな事はない」

「決められた事しかない

人形だと思ってる癖に」

「違う」

「そうだな・・・じゃあこんな物語はどうだ」

そう言っで、俺の頭の中に

新しい物語が入ってきた

「・・・止める　！！そんな事はさせない

お前をここで倒す」

「まあ、無理だけだな」

「そんな事はない」

「力は互いに五分五分

ただ、一つ俺がお前に勝ってるものがある」

「人を簡単に殺せる思っ気持ちか？」

くだらない」

「違うね・・・覚悟だよ」

そう言うと、刀を取り出し
俺に向かってきた

俺はナイフを取り出し
構えた

「はっ、そんなんじゃ

俺は殺せないぞ」

巧真の刀が俺の胴体を狙って
振ってきた

俺は姿を消し巧真の横に現れ
喉元にナイフを突きつけた

「あっけないな

これで終わりだ・・・」

「それが甘いんだよ」

よく見ると

巧真の腕と刀が無い

俺の後ろで刀が振り下ろされるのを
感じた

横に転がり直撃は避けたが

肩を切られた

「くそっ・・・」

「くそじゃねえよ、馬鹿」

片膝をついてる俺に

巧真は顎を蹴りあげられた

一瞬にして口の中に血の味がしみ込んでくる

あお向けの状態で倒れると
その上にやってきて

俺の右腕に刀を突き刺した

「
っ！！」

「俺に、とどめを刺さないから、こうなるんだよ
こうなることは、わかっていたはずだ

なのに、お前は俺を殺さなかった」

刀を刺した状態で

傷口を開くように、じわじわと動かしてくる

「がっ・・・」

「どうした？」

泣けよ、助けてくれって泣けよ

まあ無理だよな、誰も助けにこないんだからな

誰も、ここを通る予定が無い

みんな余計な動きを見せないからな

それでも、

お前はこいつ等が人間だなんて言えるのかよ　！！」

その言葉と同時に勢いよく

俺の手を足で踏みつけ

腕から刀を抜いた

「くっ・・・」

腕から大量に血があふれてくる

いつもなら止まるのに、止まらない

「全く、俺がいないと

全然駄目だな、出血を止めることもできない

俺が、いないとお前は何も出来ない

バイ口に腕を切られた時

助けてやったのは誰だ？

無の世界に入り込んだ時助けてやったのは
誰だ？・俺だ　！！全部俺が助けた」

「・・・」

「それなのに、お前は俺を否定する
・・・待つてろよ

お前のその死んだ目を俺が吹き飛ばしてやる
言っておくが、これはお前のためにやるんだ」
そう言うとき巧真は姿を消した

遠くではカイが俺の名前を呼んでいる

「カイ・・・よく、聞け」

俺は、カイにあることを伝え終わると
意識がだんだんと薄れていくのを感じた

無いよりはあった方がいい

気がつくとテニムの家で寝ていた

「気がついた」

横を見るとチコが、座っている

「チコ？」

「階段の前で倒れてるの

カイが見つけた」

「そうか・・・」

俺は、起きない体を無理やり起こした

「まだ動いたら駄目」

「そんな事を、言ってられない

神の所に行かないと」

なんだか、やけに体が重い

言う事を聞かない

体を無理やり動かしたから

部屋は無事に出れたが

階段は、一番上から転げ落ちた

「大丈夫？」

まだ安静にしてないとダメ」

上から急いでチコが降りてきた

テニムがいない

そうか・・・警備に行ってるんだ

「頼む、チコ

俺を神の所に、連れて行ってくれ」

チコは、嫌々ながらも

俺に肩を貸し石段まで連れて行ってくれた

明らかに身長差があつて歩きづらいが

まあ、ないよりは楽だ

「急がないと・・・時間が無い」

石段を上がろうとすると

俺は、見えない壁に邪魔された

「あれ？」

「どうしたの？」

俺は手を石段の方に近づけると

見えないゴムのような物に

触れて見えない壁が揺らいでいる

「チコ、俺は何日間寝ていた」

「2日間」

「そんな・・・」

「どうしたの」

「力を失った」

「そんなのありえない」

考えてみれば、今日は物語が見えない

体がだるいのも力を失ったせいかな？

なんてぶつくさ言っていると

「神様に言ってくる」

チコがそう言い残し、階段を上がろうとしていた

「いや、そんな事はなくていい」

「どうして」

「神だって、その事は知ってるいる」

「でも・・・」

「いいんだ」

俺は、このまま物語に従えばいいんだ」

「何を言ってるの？」

「チコだって、薄々気づいてるんだろ？」

「・・・」

「まあ無理もないか

俺の影響をモロに受けてるんだからな
本当ならチコは、全く喋らないはずなのに」

「だから、テニムも警備に回されたの？」

「そうだ

目の届く範囲に置きたかったんだろ」

「これからどうなるの？」

「まあ、少しくらいならいいか

チコのように、隊長格も段々と

この事に、気づいて来るんだ

俺の影響を受けた事も

でも、そんな事がバレて見る

この世界は、大変なことになる

それで、神様は責任を、俺に全てをなすりつける
だから俺は、この街にいれなくなるんだ」

「どこへ行くの？」

「んゝ扉の向こうでしばらく

暮らすつもりだ」

「どうして・・・」

「え・・・？」

「どうして、そんな事に従うの？」

「それが、俺の存在理由だ

これで、真由の理想郷が完成する」

「そんなの間違えてる」

「そうかもな・・・

でも、俺はいいと思ってこれに従うんだ
とにかく、今日はテニムは帰って来ないから
荷物をまとめて出ていかないとな」

体の調子も段々慣れてきた

「それじゃあ、宿に戻るか」

「・・・」

「ああ、肩貸してくれてありがとな

もう大丈夫だ

歩きづらいけど」

そう言いながら宿へ戻った

荷物と言っても何も無く

あるとしたら

俺の数少ない、着替えと

チコが、結局一回も着なかった

メイド服

それをテニムの部屋から勝手に拝借した

リュックに詰め込み

あと、斧と鋤を担いだ

「それじゃあ、テニムによろしくな」

そう言つて宿を出ようとした

「だれによろしくだつて？」

横を見るとテニムが、入口に仁王立ちして

待ち構えていた

「あ、あれ？仕事は？」

「今日、初めて神様に会つて

宿に急いで戻れて、言われてな

まさか、あの子が神だとは、信じられなかったが

ここでも、信じられない光景だな」

「ああ・・・いや」

「どういうことだ？」

「いや、荷物を城に置いておこうかと」

「お前、城に仕事はないだろ

知ってるんだぞ隊長クビになったの」

「ああ・・・いや」

「当ててやろうか？」

この街から出て行くつもりだろ？」

「正解！！」

なんて、ふざけてみたが

テニムは、それに乗ってはくれなかった

「ああ、お前に影響を受けてるからな」

「なんだ・・・なら話は早いよ」

「駄目だ」

「なんで、もう決まってることだ」

「そんなもの俺は知らん

お前や神が、どんな未来が見えているは知らないが
俺達には見えてないんだからな

だから、ここから出て行くのも許さん」

「それはできない

物語がまた変わってしまう」

「物語に従うことがそんなに大事なのか？」

「当たり前だ

知らないだろうけど

実際、テニム達だって従ってるんだ」

「それがどうした

これからは、自分の思った通りに行動するぞ俺は」

「でも、俺が鍵なんだ

鍵の俺が従わないわけにはいかない

テニム一人が、どうこうしようが何も変わらない」

「そうでもないさ

これから、お前を食い止めることだってできる」

「俺はもう能力者じゃないんだ

ここにいる訳にはいかない」

そう言っているとテニムの顔が、一瞬曇った

「・・・それがどうした

巧真は巧真だ」

「・・・やっぱりな」

「何？」

「嘘ついてるんじゃないよ

どうしてそうやって、嘘をつくんだよ　！！

テニムだって、俺の事、人間だって思ってたんじゃないんだろ
能力者じゃないって言った瞬間、目つきが変わったぞ
全員、そうなんだよ」

なに言ってるんだろ・・・俺

ヤバい・・・目頭が熱くなってきた

「そんな事はない

俺はただ・・・」

「バイロの時だってそうだ

心の中で、思ってる事は俺に筒抜けだったんだよ
本当の事言えよ

どうして俺を責めないんだよ　！！」

「・・・」

「今はもう、何も見えないけど

こう言う事だって、きつと想定されてた
説明書通りに、たまには動けよ　！！

お前等は所詮、人形なんだ　！！

壁と扉で線引きされた

神様の操り人形なんだ」

「お前、そんな事を思ってたのか・・・」

やけに落ち着いた表情と低い声で

テニムが話しかけてきた

ヤバい・・・少しでも気を緩ませると

涙声になりそう

「・・・ああ、そうだ

今までだって、きっと本心ではそう思ってたんだ」

「そうか、なら俺も本当の事を言おう

能力者じゃない、ってわかってから

お前を見てると吐き気がするし

虫酸がはしる」

その言葉を聞くと

テニムと俺の間にあつた何かが切れたような気がした

「・・・それでいいんだ

それが正しい選択だ」

そう言つて、俺は歩きだした

テニムの後ろではチコが涙を流してる

気づいてはいたが

ここで立ち止まる訳にはいかない

立ち止まったらこれ以上進めなくなる

「待つて・・・」

立ち去る巧真の後を追い

チコが走り出そうとしたのをテニムが止めた

「やめとけ」

「どうして？」

止めないともう戻つて来ない」

「今、止めたら確かに、止まるかもしれない」

「だったら・・・」

「けど、いつか出ていく」

「・・・」

「いつか、戻ってくるさ・・・」

ダチヨウに求愛された俺って何・・

気がつくと

野原に俺は倒れていた

上半身を起こすと

目の前に真由がいる

「よお・・・」

俺が話しかけても何も返してくれない

ただ、俺の視界を手で遮り

何かを言った

「・・・」

「なんだって？」

俺が手をどかすと

突然、この世界が俺を拒絶しはじめた

誰かが、俺の首元を引っ張ってるかのように

俺は後ろに引っ張られ

周りの風景が離れてい・・・

一瞬にして、俺は無の世界に来てしまった

光も闇も音もない

白も黒もない

あるのは俺の体だけ

俺の体も段々と消えていく

前までの俺なら必死にもがいただろう

けど今の俺は何もしない

ただ消えていく体を見ているだけ

手と足が消えた

腰から段々と消えていく

ついに首まで来た

そして俺の視野もなにもかも

消えた・・

「うをおっ・・」

俺は驚き目を覚ました

「夢か・・久しぶりの夢だな・・」

草の上で寝ていたから

体中が痛い

ただ、この世界に四季がなくて本当によかった
冬なんかあつたら

絶対に死んでた

しばらくすると

山の間から強い日差しが差し込んできた

「うわっ、眩しい」

目を閉じてても光が^{まぶた}瞼を通して

伝わってくる

まあそんな事はどうでもいい

とにかく、今夜も野宿はごめんだ

簡単なものでいいから

屋根と壁がある家を造らなくては・・

そのために持ってきた斧だ

早速使わせてもらおう・・・・

さて、ここで問題が発生した
木は時間はかかったが

何とか倒すことに成功した

ただ、運ぶ方法が無い

それと結ぶ糸もない

村の人たちはいったいどうやって

あの家を造っていたんだ？

・・・こうなったら村の方に行つて

いや、駄目だ

それじゃ村から離れて東の森に来た意味がない

「どおしよう・・・」

その時、後ろで何かが動く気配を感じた
なんだ？

まさか、トカゲじゃないだろうな

いや・・・ないないだってあの時に

村人が全滅させたと思うし

いやでも、生き残りがいるのか？

そう思いながら

腰に差してあったナイフを構え

「頼むからトカゲじゃありませんように・・・」

そう呟いて

勢いよく、後ろを振り返った

目の前には、体長2m以上あるような巨体

全身毛むくじやら

鳴き声は牛のようにモーと鳴く生物がいた

「・・・」

しばらく、フリーズしていたが

徐々に理解してきた

「もしかして・・・牛か？」

そう聞くと、軽く鳴き返してきた

「うつわ、久しぶりだな」

なんか？また大きくなってない？

ん？違うな・・・毛が生え換わっているのか？

衣替えか？」

体を触ると毛が大量に抜け

その下に太い毛が生えてきていた

「衣替え・・・？」

もしかして？冬来るのか？

ヤバいじゃん、野宿できないじゃん」

その時、ある重大なことに、俺は気づいた

「ああそうか毛むくじやらの理由がわかった・・・」

よく見ると

牛の体格は立派な皮下脂肪

それにプラス立派な毛

求愛などに使いそうな派手な色などもない

どう見ても、気候に特化した進化だ

つまり、この冬はかなりキツイ

考えてみたら

村の動物も全身に毛があったような気が（トカゲは例外）・・・

「早く家を造らないと・・・」

そう思い急いで家を完成させた

牛もいるから

意外と簡単だ。丸太も運んでくれるし

毛もどんなに引っ張っても、ちぎれない

ナイフで切ろうとしても、全然切れない

・・・こいつの毛どうなってるの？

まあ、そんなこんなで

広くて、浅い穴を掘り

中心に丸太を立てて

壁は牛の毛で

立派な竪穴式住居ができた

「おお、まあいい感じじゃないか」

俺の思考能力は、

原始人並みかと思うと、ちよつとショックだが

まあ、これで冬越せるかな？

「いい感じだろ？牛」

そう言いながら

中に入った

少し壁が、牛臭いがまあいいでしょ

その時、牛がよたつき

軽く家にぶつかってしまった

いや、確かに軽くぶつかったただけだが

丸太一本で何にも支えが無かった家は

メキメキと言う音を立てながら、見事に崩壊した

崩壊した場所に、全身毛まみれになった

俺が立っている

もし、周りに人がいたらかなり惨めに見えただろう

「……今日も野宿かな？」

日もかなり落ち始めていた・

体中についた毛を何とか落とし終わった。

ただ見える範囲だけだったのだ

まだ、背中に、びっしりと大量に毛がついてる事を、
気がつくのに、かなりの時間がかかった

「うわっ、なんで落ちてないんだよ

ってか牛、お前の毛はどうなってるんだ？」

ところが、牛は何にも反応をしないで
やけに耳を動かしている

「・・・・？」

そして、牛はある方向に目を向けた
そちら側を見ると

誰かが、こっちに近づいて来る
遠くてよく見えないが

見たことのある姿だ

「ヤバい・・・村長だ」

どうにか、見つからないようにしないと
そう思い、俺はとっさに

崩壊した家・・・いや、穴と言った方がいいかな？

とにかく、大量にある毛の中にダイブした
俺の背中には、毛が着いたまんまだし

見つからないだろう、と思っていた

「牛、俺がここにいてるだなんて言うなよ」
そう言い残し俺は毛の中に身を潜めた

どうやら、村長がやってきたようだ

牛は、村長の視界に毛が大量に敷かれた
穴が見えないように立った

「ん？牛、こんな所で何をしているんだ」
どうやら牛は、嘘をつくのが下手らしい

明らかに、様子がおかしい

それに気がついた村長は

牛の後ろ側にまわり、穴を発見してしまった

「な、なんだ・・・これは」

終わった・・・見つかってしまった

「お前の仲間が、穴に落ちてしまったのか？」
はっ？

「大変だ、助けてやらないと」

そう言つて、俺の背中についてる毛を
引っ張り始めた

止めてくれ・・・意外と力あるんですけど、この人
明らかに50過ぎてるのに
どこにそんな力が・・・？

牛も、必死になって村長を止めようとしている

「どうした？牛」

牛は必死に首を横に振る

「とにかく、助け出さないと」

そう言つてより一層

力が強くなってくる

もう無理、限界・・・

地べたに這いつくばって頑張ってるんだけど
無理、無理・・・

力を抜いた瞬間、俺は穴から引きずり出された

村長は、それを見て固まっている

無理もない、村長から見ると

毛の一部が大量に抜けたのだから
そしてその中から、人間が出てくる

俺は立ち上がり

「どうも、村長」

なるべく、感情を出さないように
棒読みした

それを見て、村長は我に返ったのか
辺りを見渡す。

何かを理解したのか？

突然立ち上がり

「着いて来なさい」

そう言って歩き始めた・・

沈黙と言つのは苦手です

しばらく、沈黙が続いた

村長は黙々と進み、

俺は黙ってついていった

その後ろを、牛がヨタヨタと付いてくる

気まずい空気が漂ってくる

もう、これ以上耐えられない

「あの・・・どこに連れていくつもりですか？」

「・・・甘次郎さんの家」

「いや、いやいやいや・・・

行けないですよ

それは無理です」

「今、空き家はそこしかないんだ」

「えっ・・・？」

一度、立ち止まってしまったが

村長は止まらなかった

「甘次郎さんは？」

「いなくなつた

巧真君が、あそこで何をしたか知らないが

それ以来、誰も甘次郎さんを誰も見ていない」

「・・・そうですか」

「甘次郎さんが、どうして

あそこに家を建ててるか知ってるかい？」

「わからないです」

「それもついでに教えてあげよう」

「え？」

「いいから、ついてきなさい」

俺はただそれに従ってついて行つた・・・

城のほうでは、カイが個室で

書類などに目を通し、サインをしていた

そんな中、後ろの扉が開き

「大丈夫かい？」

「それは、ダジャレですか？」

それとも普通に訪ねてきたんですか？

リム隊長」

「いや、隊長の初仕事で

行き詰ってるんじゃないか、って思っ

て様子を見に来ただけ、これじゃ拍子抜けね」

「ええ、隊長になる前から

この仕事はしていたんで楽ですよ」

「巧真君、この仕事もカイに任せてたの？」

「ええ、そうですよ

・・・ああ、また間違えた」

どこを間違えたのか、後ろから覗くと

自分のサインではなく

巧真のサインをしていた

「よほど、前の隊長に使われてたのね・・・」

「ええ、まあそうですね」

軽く笑いながら、カイは自分の書いたサインを

力を使って消していた

「ところで、トイは？」

「それが、隊長が、解任されてから

まだ一回も、来てないんですよ

ずっと、部屋に引きこもっちゃってて」

「ちよっと、心配ね・・・」

「ええ、そうですね」

そう言いながら、カイはペンを強く握りしめていた
そんな事には気付かず

リムは「まあ頑張つて」っと言ひ残し

部屋を出て行き、神のところへ向かった

神の部屋に入ると、何やら深刻な顔をして

考え事をしてる神がいた

「神様？」

「えっ？ああお疲れ様

どうだった？」

「何も、問題ありませんよ

一体、何を心配してるんですか？」

「何もなければいいんだけど・・・」

「ただ、いつも巧真君の後ろについていた

二人のうち一人が、来てないみたいですね」

「・・・そう」

「神様？」

「何でもないわ、もう下がっていいわ」

明らかに、無理して作った笑顔で神様はそう言ってきた

「・・・そうですか、わかりました」

軽く一礼し、リムは部屋から出て行った

リムが出て行ったあと、真由の横にゲル状の竜が現れた

「もう一回、行ってきて」

竜にそう言つと、竜はまたどこかへ行つてしまった

リムが部屋から、出ると

チコとテニムが立っていた

「ちよつと、チコはわかるけど

どうしてテニムがここに入れるの？」

「わからないけど、入れちゃった」

「はあ？」

「とにかく、どんな感じなんだ？」

「さあ、どうだか・・・」

「おいおい、それでも神様の側近か？」

「でも、巧真君が側近なんて、してただなんて
知らなかったわよ」

「カイの方は大丈夫なのか？」

「カイ君は、大丈夫だと思うけど

ただ、もう一人のトイ君については、わからないわ
二人とも、巧真君に付いて回ってたからね」

「あの巧真にね・・・」

「あら・・・彼は、結構部下には慕われてたのよ
隊長格には嫌われてたけど・・・」

「そうだったのか・・・」

「そうなのよ」

「それより、しっかりしてくれよ
下の町では大変なんだ」

「どうかしたの？」

「わからないが、何人が死人が出てらしい」

「闘技場で？」

「いや、街中で」

「どういう事？」

「だから、わからないんだよ

今までそんな事なかったから

上がしっかりしないと下から腐ってくるぞ
「そうね、しっかりしないと」

「じゃあ、俺見回り言ってくるわ」
そう言って、みんな別れた

巧真は甘次郎さんの家に到着した

「ここをしばらく、使うといい」

「ありがとうございます」

すると、村長が手招きし

「こつちだ」

そう言って家の裏側に向かった

「甘次郎さんがここに住んでいた

理由なんだが・・・」

そこで、言葉が途切れた

「どうしたんです？」

「いや、見た方が早いな」

そう言って、また歩き始めた

牛は、もう歩けないとアピールをして

その場に倒れこんだ

牛は休ませという

俺は、村長のあとを追った

村長は、深い林の中に入って行った

はじめは、深い林だったが

段々と木々が減り始め

中には、不自然に曲がった木や

何かの衝撃を受けて折れた木がそのまま

放置されていた

ここは・・・一体？

なんて思っていると

村長が語りだした

「5年前、戦争があつたのは知っているな？」

正直、私たちにはなす術がなかった

無理もない、向こうの奴等は

妙な力を使うからな

二つの勢力がぶつかり合っていた

私たち、無能力者は眼中になかったんだよ

だが、この場所はとても魅力的だった

お互いの土地で争うのは被害が互いに出てしまう
だから、この場所で争うようになったんだ」

村長に、連れられて

着いた場所は、一面の戦場の跡地だった

元は家だったような物が壊されている

「そんな・・・」

5年前のことだから、草は多々生い茂っているが

極端なへこみや、一部分だけ

草が生えていないなど

自然にできたとは思えないものがたくさんあった

「5年前だ

突然、戦争が終わった

世界は元々一つだった。それなのに

突然、扉と壁で囲まれた

そんな事は、私も含めてみんな、気にもしなかった

ただ、私は最近の事なんだが

偶然、この場所に来てしまった

その時、昔の記憶がなだれ込んできた

そこを、甘次郎さんに見つけた

すると甘次郎さんは、私に何度も謝ってきた

『私が目を離してるすきに申し訳ない』と

甘次郎さんは、自分の家から奥へは行かせないように
していたんだ

それが、私たちの幸せだと思って」

「村長が、この場所に来た時

甘次郎さんは何をしてたと思いますか？」

「さあ、わからない」

「壁の向こう側にいたんだ

王様に、ある物を渡し

扉の向こうの世界を滅ぼそうとしていた」

「向こう側で、甘次郎さんがどう思われていようが

こちら側では、必要な存在だった」

「あの人は、自分の私情のために

一つの国を滅ぼした」

「本当に、それは甘次郎さんのためだったのか？」

その時、甘次郎さんが『家族のために死ぬ』と言う

言葉を思い出し、言葉を詰まらせた

「それは・・・自分の願望を

家族に押し付け正当化してるだけだ」

「そうなのかもしれないな・・・

でも、私にも家族がいれば

そうすると思うぞ」

「でも、家族はいないでしょ」

「いたさ・・・」

「えっ・・・？」

「戦争で死んだよ」

「そうですか・・・」

「息子は、かなりひどい

殺され方をしていた」

「・・・」

「特殊能力者と言うのは酷いものだ
私の息子は体の内部を生焼けにされ
最後に心臓を一突きされていた」
その言葉を聞いて
一瞬その能力者が、頭を過ぎった

苗がほとんど霜でやられました・・

「殺せと言ってるだろ

農民一人殺せないとは何様のつもりだ」

なにか老人が若者に罵声を上げている

ここは、小さな部屋で、薄暗く

俺と老人、若者以外に部屋にはだれもいない

「俺には、出来ません」

若者は、涙声になりながら、必死に抵抗した

「こんな、子供を殺せと言うんですか？

この子は、能力者じゃない」

俺を指さしながら、若者は言った

子供と言うのは俺のことか・・

俺は手足は縛られ身動きが取れない状態だ

どうやら、囚われてるらしい

「能力者じゃないから、殺すんだ

いわば、度胸試しだ

貴様の特殊能力は、拷問には最適だからな」

「俺は、そんな事したくありません」

「殺れ　！！貴様は、我々が滅んでもいいと言うのか？」

「でも、それとこれとは・・」

話の途中に老人は

「黙れ　！！殺さなければ、俺がお前を殺すぞ」

そう言うと、老人は右手を前に突き出す

すると、若者は何か見えないものに掴まれ、宙に浮き始めた

若者は、首の所を両手で押さえ苦しそうにしている

若者の目が虚ろになった瞬間、老人は右手を下ろした

それと同時に、若者が地面に叩きつけられ

いきなり息をしようとして、咽^{むせ}ている

「殺れ、もし殺らねば、お前を殺す」

冷たいその言葉が効いたのか

若者は、フラフラになりながら

立ち上がり、「ごめん」と呟きながら、俺に右手を向けた
何をしているのかわからなかったが

すぐに、理解した

腹の中が熱い、熱さが段々痛みに代わってくる

自分の腹の中で何かが、ズルッと崩れる感じがした
痛くて、叫びたいのに叫べない

「グベツ・・・」

体から無理やり絞り出されたような声と一緒に

俺は、大量に吐血した

「もう、嫌だ
！！

俺にはできない」

若者は、ヒステリックになり

その場で、頭を抱えながらその場で膝から崩れた

「俺には、もうできない

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ・・・」

若者にとっては、それで良かったかもしれない

だが、俺にとっては最悪だ

腹の中は、完全に焼け切らず

生焼け、半殺し状態だ・・・

ただ、この状態でも、少し生きたいという気持ちはあったが

楽になりたい、と言う気持ちの方が強くなってきた

呼吸も荒くなり、息を吐くたびに

痛みと血も一緒に出てくる

「くそっ、この役立たずめ・・・」

老人が、そう呟きながら腰に差してあった

ナイフを取り出し、俺に近づいてきた

殺してくれ、声は出ないが

口をそう動かした

「止める」――！！」

そう言いながら、若者は老人に飛びかかった

だが、それにすぐに反応し

老人は右手を若者の顔に置いた瞬間

力を使い、若者を壁の方に、吹き飛ばした

若者は動かなくなった

「何事ですか？」

扉が勢いよく開き

赤い髪をした人が入ってきた

そいつは若者を見て「テムム・」と呟いた

「そいつを連れてけ」

老人がそう言うと

赤い髪の方は若者を担ぎ部屋から

出て行った

それを確認してから、老人は俺の心臓めがけ

ナイフを刺した

バリン、と言う激しい音で巧真は目を覚ました

これで家の、最後の窓ガラスが、割られたと言う気持ちとは裏腹に、
先ほどの夢を思い出し

俺は、雨が降る中、外に飛び出し、嘔吐した

荒い呼吸を整えながら

必死に、腹や心臓の所を探り

何ともないか確認する

そして、あれが、本当に夢だったと解釈する
深く息を吸い、息を一気に吐き出した
夢に出てきたのは、テニムとバイロ
そして、殺されたのはおそらく村長の・・

外は雨なので、俺は家の中に戻る

日が差し込むと、明るい家のはずだったのに
村の子供達に、窓ガラスをほとんど割られ
雨風を防ぐため、板で塞いでしまったので
家の中は非常に暗い
そして唯一の風呂場の窓も
今さつき、割られてしまった

「畑の様子見に行かないとな・・」

家の裏に回ると小さな畑がある

村長が「これなら冬でもできる野菜の苗だ」

そう言つて、いくつか持つてきてくれた

そして、その苗なんだが、とりあえず動く

根は固定されてて動かないが

葉や茎の方は踏もうとすると避ける

そして、水や生ごみを与えると

それに応じて野菜を持つてくる

初めは気持ち悪かったが

今では、もう当たり前のようになっていた
いや、ごめん嘘です。正直まだ気持ち悪いよ・・

ただ、牛との相性はいいようだ

牛の毛の間には、ゴミなどが色々と入ってたりする
それを苗は、取ってくれる

牛は、ゴミがなくなり

苗は、食糧が手に入る。そして、牛に食料を提供する
なんていう、共同生活が成立している

だから、今はほとんど、牛に野菜の世話を任せている
そして俺は、さすがに野菜だけの生活は無理がある
だから、山に行き

動物を捕まえて

生肉・・・はさすがに無理だが

木の実やキノコのようなものを取りに行っている
その作業が終わる頃には

大体、昼は過ぎている

・・・のはずだが、今日は生憎の雨なので
割れた窓を板で塞ぎ、また寝ることにする

しばらく寝ていると、子供の叫び声で

俺は目を覚ました。

どうやら、夕暮れ時だ

そんな事は、どうでもいい

とにかく、外に出ると

裏庭の方が騒がしい

裏庭に回ると、いつも窓ガラスを割っていた

子供たちが、牛に追われている

牛はやけに興奮している

「牛、何やっているんだ」

そう言つて、牛と子供の間に割つて入った

牛は、目の前に俺が、現れたからか、一瞬止まった

俺は、畑の方を見ると野菜がすべてダメになっていた

「なんて事してくれたんだ　！！

この、クソ餓鬼ども」

俺は、牛から目を離さないようにしながら
後ろで怯えている子供達にそう叫んだ
子供の一人が「ヒッ」と言う引きつった声を出し
走り出した。

それにつられて全員が走り出した

「止せっ、むやみに走るな」

走り出した、子供が視界に入った瞬間

牛は、怒りに満ちた声を発し

俺をヒラリとかわし、子供たちに、突進していった
「しまった・・・」

そんな中、子供の一人がベタにも、転んでしまった
牛は、その子めがけて突進いていった

カイは、今日の書類を書き終え

思いっきり、手を後ろに伸していると

突然、後ろの扉が開いた

「よう、トイ・・・久しぶりだな」

手を下しながらそう言った

後ろを振り向かずにかいがそう言ったのに

トイは少し驚いた

「ああ・・・そうだな」

「明日は、城の見回りだからな
ちゃんと来いよ」

「それより、聞いてくれよ」

「なんだ？」

そう言っようやく、カイは後ろを振り返ってくれた

「どうでもいいような事だったら
承知しないぞ」

「神様と隊長の事なんだけど」

「？」

「やっぱり、隊長がどうして
解任になったかわからないんだ」

「なんだ、そんな事か」

カイが呆れたような態度を取った事に
トイは、少し腹が立った

「そんな事ってなんだよ」

「別に、どうでも良さそうな事みたいだから
俺、帰るわ」

そう言つて、カイは席を立とうとした

「待てよ、お前も神様の味方をするのか？」

「そうだ。それに味方もくそもあるかよ
だれが敵で誰が味方だ？」

「隊長と神様」

「それで俺は、隊長の味方をする」

「はあっ何言つてるんだ？」

「俺は、神様を殺す」

「なっ・・・！？」

何言つてるんだ？そんな事してみろ
世界が崩壊するぞ」

「そんな事はない、隊長がいる
隊長だって神クラスの能力者だ」

「だからと言つて・・・」

「殺すのは良くないってか？」

「そんな事はない、神様だって
自分の手を汚さずに人を殺してる」

「そんな事はしていない」

「そう思いたいだけだろ？」

神様は、お前の思い人だからな」

「ち、違っ・・・いや、違くないけど、

そういう意味じゃなくて」

「え？本当で？」

「おまつ・・・適当に言ったのか？」

「う、うん・・・御免」

互いに顔が赤くなってきた

「・・・と、とにかく、俺はそれには反対だ

思い人とかそんなの関係なしに

それに、もしお前が、それを実行しようとしてるなら

俺はお前を捕まえなくちゃいけない」

そう言うのと、カイはナイフを取り出した

「カイ・・・理解してくれないか？」

「残念だが、出来ない

トイ、お前こそ、そんな事止めるんだ」

その言葉を聞くとトイは深いため息をついた

「お前は、隊長のことを、思っていないんだな」

「違っ、隊長のことを思って

俺はこれを選択した」

「カイ、俺の特殊能力って覚えてるか？」

「なんだ？いきなり」

トイが右手をカイの方に向けた

カイはナイフを顔の近くに持つてきて

防御の姿勢をとった

トイの特殊能力はたしか・・・

「俺の特殊能力は、一度見たものなら
それを復元できる能力だ

「たとえば、使用方法がわからなくてもな」

「そう言っと、トイの右手に徐々に」

「何かが出来上がってきていた」

「出来上がった物は」

「甘次郎とか言う農民の持っていた物だ」

「知ってるか？」

「拳銃って言うらしいぜ？」

「何っ？」

「拳銃と言う言葉にカイは少し驚いた」

「この、レバーを引くと」

「ここの穴から小さな玉が飛んでくるんだ」

「どんなに力を使っても玉は見えないんだ」

「それほど、玉のスピードは速い」

「それに実験してみたんだ」

「下の街で色々」と

「まさか・・お前が住民を殺してたのか？」

「トイの目つきが変わり」

「口元はニヤつき始めた」

「初めは、どんな物かわからなかった」

「ただ人に向けてレバーを引くと」

「突然、手に震動が走ったんだ」

「それと同時に、人が倒れた」

「近づいてみると、胸のあたりに小さな穴が開いていて」

「そこから、たくさん血があふれてきた」

「トイは段々、興奮しながら」

「まるで、幼い子供のようにイキイキと話し始めた」

「今まで、ナイフや能力での殺しとは違う」

「今までにない人の殺し方を俺は手に入れた」

「そうだよ、5年前の殺し方とは訳が違う」

「ただ、この拳銃には玉の数が決まってるんだ」

玉は全部で8発、初めはそんな事も知らず

8人殺したんだ。9人目を見つけたとき

俺は興奮しながら、レバーを引いた

でも、力チっていう音しかなくて

人は倒れなかった。

何回押しても力チってしか鳴らない

だから、新しい拳銃を造って

9人目も殺したんだ」

うれしそうに、喋るトイは

今まで一緒にいたトイとはまるで別人に見えた

「・・・狂ってる」

そう言って、カイはナイフを強く握りしめた

「狂ってる？違うよ

これが本当の俺だよ

本当の自由を手に入れたんだ

神様の世界では手に入れることのできない自由だ。

でも、隊長の世界ではこれが手に入る

カイもこっちに來い

すごく面白いぞ」

「・・・断る」

「あっそう、じゃあ死んじゃえ」

そう言つと、トイは何の躊躇ちゅうちうもなく

拳銃の引き金を引いた

火事場の馬鹿力って凄いよね・

耳を切り裂くような音が

部屋の中を木霊こだまする

ただ、カイはトイの首元にナイフを置き

トイに「動くな、力も使おうとするな」と言っていた

「な、なんで？今まで避けた人いなかったのに」

「残念だったな

拳銃の事は俺も知っているんだ」

「え？」

「隊長が、だれかに襲われた時

俺の能力で、隊長の異変に気づき、その場に向かったんだ

着いた時には、すでに戦闘も終わっていて

隊長が倒れていたんだ

側によると隊長は、俺に拳銃の事

そして、お前の事も教えてくれた

正直、俺は信じなかった

でも、実際にこういう風になってるからな

いやでも、信じるしかない」

そんな事を言っても

カイは、何とも思っていないのか

「どうして？玉を避けたんだ」

その一点張りだった

「それも隊長だ

確かに、玉が出てからは避けるのは無理だが

その一歩手前の、銃口の向きと

引き金を、引く指に集中しろって言われた

そうすれば、相手は一発で当たると油断してるから

避けたらすぐに、相手との間合いを詰めるってさ」

トイは、避けられたのが悔しいのか

カイが自分より拳銃について詳しくかったのが
悔しいのか、まるで子供のように

目は怒りに燃え

鼻息は荒く、顔には悔しさを滲^{にじ}みだしていた

「それから、この世界を守ってくれとも言われた

だから、俺はこの世界を守るそれが隊長の意志だ」

「そうか、そいつは残念だ」

誰かが、後ろからそう言う

カイをそいつは鞘から刀を抜き出し、後ろから腹部を横に切った
「なっ・・・なんで」

そう言いながらカイはその場に倒れた

「自分の能力に頼りすぎだ

ちゃんと目で確認しないとな」

そう言いながら、刀についた血を拭^{ぬぐ}い鞘に戻した

カイの特殊能力は、能力者の位置なら

手に取るように、わかるはず

なのに相手が、後ろにいた事に気付かなかった

カイは、力を振り絞り

自分を切ったのは、誰か見ようとした

そして、視界に入った人を見て驚いた

「た、隊長・・・」

そう言い残すと、カイは力尽きた

カイが倒れることで

トイは、自分の苛立ちをぶつける所がなくなり
謎の言葉を発しながら

拳銃をカイに向け引き金を引こうとした
それを見た、巧真は拳銃の前に手を置き
「止せ、トイ

こいつはもう死んだ

死人に引き金を引こうとするな

それに、銃声が上がってからかなり時間がたった
そろそろ、人が来る

その前に、退散するぞ」

苛立ちを発散できず、退散すると言われて

トイは、我慢できず

拳銃を上に向け弾が尽きるまで発砲した

撃ち終わると銃を地面に叩きつけ

巧真の方に歩み寄り

服の一部にしがみついた

巧真は、トイと移動しようとした時、

扉が一瞬動いたことに気づき

「どうやら、元同居人は立ち聞きが好きらしいな」
鼻で笑いながら、そう言い残し

トイと一緒に姿を消した

姿が消えたことを確認し

カイの部屋にチコが入ってきた

カイは、傷は深いはまだ、かすかに脈があった
チコは能力を使い治療を始めた

しばらくするとカイは、意識を取り戻した

「気づいた？」

「チョコさん・・・」

「ダメ、まだ動かないで」

「お、俺はもう大丈夫です」

「そんな事より隊長を・・・」

「大丈夫、あれはあなたの知ってる隊長じゃない」

「知ってます。そんな事」

「そうじゃなくて、隊長を連れ戻してきてください」

「・・・でも、巧真はもう能力を」

「何言ってるんですか」

「隊長は・・・」

カイはチョコの肩を強くつかみ

「力を失ってなんかいません」

そう強く言った

牛が子供に突進する中

巧真は、牛よりも先に前に子供の前に回り込み

突進してくる牛を待ち構え

牛を抑えた

「フンガッ　！！」

牛の頭はかなり固く

真正面から受けてみるとかなり痛い

地面がぬかるんでいて、どんどん牛に押されていく

それを、ただ呆然と見ている子供に対し

「な、何ボーっとしてるんだ

早く逃げろ」

その言葉で、我に返ったか

子供は立ち上がり走って行った

だが、牛の怒りは収まらない

「牛、落ち着け

俺だ、わかるか？」

前足を動かし前に進もうとする

だが、俺が邪魔していて動かない

どうやら、俺が見えていないらしい

そんな中、俺は牛を止めてる事に驚いている

いや、その前に、牛よりも先に回り込めた事もおかしい
どういう事だ？ 火事場の馬鹿力ってやつか？

なんて思っていると

牛は後ろ足で立ち始めた

牛の顔に全体重を乗せていた俺は、軽々と持ち上げられ
どうにかしようと降りると

下がぬかるんでいて、ああむけの状態で倒れてしまった

「痛いなあもう」なんて余韻に浸っていると

俺の顔めがけて牛の前足が落ちてきていた

「うわっ・・・」

「おお、気が付いたか？」

大丈夫か」

気がつくくと、俺は蒲団の上で寝ていた

横には、かなり俺の事を心配していたのか
安心した表情をしている村長がいる

「う、牛は大丈夫ですか？」

「まずは自分の心配をしたらどうだね？」

初め見た時は、死んでるかと思ってよ」

そう言われてみると

胸には大きな痣があり

左目を覆い隠すように包帯を巻かっていた

「でも、左目は正直、眼球が無事なのか

無事だったとしても、回復するのかわからない状態だ」

「・・・そうですか」

「子供たちの事は、許してやってくれ

あの子たちは、トカゲに両親を殺れたんだ」

「別に、気にしてませんよ」

どうせ、消える運命だしどうでもよかった

「そんな事より、ここにいていいんですか？

異端者が、いる家に居たりして」

「ん？そうだな、それじゃそろそろ出て行くのでしょうか」

そう言っと、立ち上がり出て行こうとした

その時、俺はこの前の夢を思い出した

「あの・・・」

「ん？なんだい？」

「もしも・・・もしもですよ

息子さんを殺した人が俺の知り合いにいたら

どうしますか？」

村長は、しばらく悩み無表情のまま

「その人を聞き出して、そいつを殺す」

そう冷たく言った

「・・・と言うのは冗談だ」

「え？」

「今更、殺したって仕方がない」

「それは、本当の気持ちですか？」

「さあ、どうだろうね

ただ、戦争だったから仕方がないと言う訳ではない
実際、今でも本当の気持ちなんてわからない

巧真君だつてそうだろ？」

「わからないです」

「いつか、わかるさ」

そう言つと村長は家から出て行つた

しばらくし、俺は蒲団から起き上がり

外に出た左目が今は見えないので

距離感がつかみにくい

そんな状態で、裏庭に行つた

畑には、小さいが新しい苗が植えられていた

そして、牛は

「おい、牛」

どんなに呼んでも近づいて来ない

「なんだよ、俺が怒つてるとでも思つてるのか？」

ふざけやがつて

「怒つてないつて、大丈夫だから」

お前のせいで、左目が見えなくなつた

「本当だつてば、いいから来いつて」

殺してやる

「・・・こつち来いつて」

お前なんか殺してやる

「違う　！！俺はそんな事思つてない」

突然、巧真が叫んだから

牛は近づきはしたが、ビクついてまた下がってしまった
だが、異変に気づいたのか

牛は恐る恐る巧真に近づいて行つた

「止める、近づくな」

そう言つて、右手を大きく振り回した
ハッとして巧真は我に返つたが

急いで、家の中に入り包まって
その後、村長がやってきても扉をあけることはなかった

引きこもり生活再開

「隊長　！！」

誰もいなくなつた、壁の向こう側の世界に巧真とトイはいた

「隊長、カイは駄目でしたけど

まだ心当たりのある部下はたくさんいます
そいつ等を誘いに行きましょう」

「いや、駄目だ」

トイが熱く語る中、巧真はその、一言で一刀両断した
「何故です、一人でも多い方がいいじゃないですか」

「今、城ではその事で

大忙しだ、そんな中行つたりしてみろ

俺は大丈夫だが、お前が捕まるぞ」

「でも、このまま乗り込んだとしても

俺達に勝ち目がないじゃないですか」

「いいんだよ、戦力なんて必要ない

神の部屋に入つちまえば関係無いんだ」

「どうしてです？」

「あの部屋には、神が認めた奴しか入れん
俺を含めてな」

「でも、したら俺は入れない・・・」

「大丈夫だ、それもちゃんと考えてある」

落ち込む、トイに頭を撫でるようにそう言つと

「はい、ありがとうございます」

そう言つて、顔を輝かせていた

城では、カイの報告により
パニック状態になっていた

神の部屋には、厳戒態勢になれば
やってくる老人がいない

老人は、トイによってすでに殺されていた

そのため、指示を出すものがないく

何をすればいいのか、わからない状態が続いた

「テニムさん、俺たちの隊はどうすれば？」

「隊を数個にわけ、他の部隊と合流させる

警備は、随時入れ替えて続ける」

「はい、わかりました」

混乱の状態の中、テニムは混乱を抑えようと
周りに指示を出していた

「貴様、何を勝手な行動をしている」

そう言いながら、隊長格の一人がやってきた

「上からの指示が出るまで勝手な行動をするな」

隊長格としてのプライドか、この混乱を抑えようとしてか
テニムにひどく当った

「上からだと・・・？」

上の奴らは、もう死んだんだぞ

死んだ奴等が、口を出すと思っていんのか」

「それは・・・」

そう言うのと、隊長格は腰が引けてしまった

そいつの態度を見て、テニムはそいつを思いっきりぶん殴った

「それでも、隊長格か　！！

上がしつかりしないでどうする」

倒れて立ち上がる際、そいつは、テニムを睨みつけた

「お前らの部隊は、城の周辺警護だ

さっさと、行け」

隊長は、嫌々ながらもその場を去って行った

それと行き違いにリムがテニムに近づいてきた

「テニム、おっかない」

軽い口調でそう言われると

少し気が緩む

「うるさいっ・・・」

それより、そっちは

「終わったわよ、扉と壁の周辺には私の部隊を置かせた」

テニムがすべて言う前に口を挟むようにそう言った

「カイがいれば、もっと順調に事が進むんだが・・・」

「それは、無理よ」

報告してから、また倒れちゃったんだし

まだ、完全じゃないもの

急いで治そうにも、チコちゃんがないんだもの

「どこ行っただろうな」

大体予想はつくが、二人は口に出さなかった

「上は死んだねえ・・・まだ一応神様がいるんだけど？」

「神様の指示を待って、一体何日たったと思う」

「それは、そうだけど」

「神様は何もしないさ・・・ただ見てるだけ」

助言はしたとしても、この世界に直接関与しようとは思えない

「そうなのかもね」

「だけど、そんな神様を、俺たちは守るんだ」

世界を守るために

「そうね、頑張らなきゃ」

「それじゃ、俺たちは」

神様の部屋の前の警護だ」

「了解です」

そう言いながら、二人は神の部屋へ向かった

村では、冬が近づいてきているのか
吐く息が白くなつてきていた

巧真は、毛布をかぶり両膝を抱え
ただ、一点だけを見据え

動こうとはしなかった

巧真の目の先には、ゲル状の球体が浮かんでいる
大きさは、丸まっている

巧真と同じぐらいで、何やら胞子のような物をばらまいている
巧真がゲルを見つめると、ゲルも巧真を見つめ返す
これが、目だとはつきりとした所は、わからないが
多分あるだろう

巧真は、重い体を動かし

顔を洗おうと、水を溜めてある場所に移動した
そこまで、移動するのにどれだけ時間がかかった事やら
筋肉が固まっているのか、足を一歩動かすのに
かなりの時間がかかった

水面に映る顔は、髭ひげは無造作に生え
頬ほほはやせ細り

左目は、赤く爛れただ、完全に潰れてしまった
無理やり左目を開こうとすると激痛が走る
右目は、問題ないが相変わらず
死んだような眼をしている

ここ何日か、何も食べていない
のどの渴きは、この水で何とかなっているが
腹の虫は、しばらく鳴いていたが、諦めたのか
この頃は全く鳴かない

また、布団の中に戻り

ゲルをずっと見ていると

自分が、どれほど危険な存在だったか思い知らされる
なぜかと言つと・・・

その時、誰かが扉を強く叩いている

どうせ村長だろう

そう思い、動こうとはしなかった

しばらくすると、叩く音がしなくなった

ようやく帰ったか、そう思っていたが

扉の向こうから、

小さな「えい」と言う掛け声とともに

そして、小さな声とは裏腹に、扉が豪快に吹き飛んだ

「うわっ、なんだ？」

そう言いながら、急いで立ち上がろうとしたが

何も食べていなかったから、体力が衰えていたのか

立ち上がれず、その場で倒れてしまった

「ようやく見つけた」

さっきの小さな掛け声といい、今のセリフといい

どこかで、聞いたような声だ

倒れた状態で、顔を上げると

目の前に、チコが立っていた

お互いに黙っていたが

俺の第一声は

「起き上がれないから、助けてくれ」

チコは、力を使って俺の上半身を起こしてくれた

そして、俺の左目を見て

治そうと思ったのか、近づいてきた

「いや、多分チコでもこれは治せないよ

眼球がダメになってる」

そう言いながら、手を使って後ずさりしようとしたが、思っている動作と、実際に行っている動作に矛盾点があり、せつかく起こしてもらったのにまた、倒れてしまった

そんな事、気にしないのかチコが近寄ってくる
って言うか、顔近い　！！

両膝ついちゃって何やってるの？

いや、やばいって

この状況で、一般男児でドキドキしない奴はいない
って言うくらいヤバイ

「ちよつちよつちよ、ストップストップ

いや、無理だから」

「・・・大丈夫」

大丈夫？大丈夫って何？

どういう意味？え？こう言う意味？

「前に言っただと思うけど

直すのに、物も人も関係無い

壊れる前の状態に、私の能力は戻すことができるから」

へえ〜そうなんだ・・・なんて思っていると

「この方が時間がかからない」

そう言いながら、突然、抱きついてきた　！！

「　　っ！！！！！！！！」

体全体が硬直し、手足の指先に力が入る

いや、落ち着け、チコは今治療をしてるんだ

別にそう言う訳じゃない

割り切れ、俺

いや、でも・・・いやそうじゃなくて

え・・・でも・・・

なんて、思っているうちに

チコは、左目だけじゃなく固まっていた筋肉や他の部分も直してくれたいた

「あ、ありがとう・・・」

うわっ、俺めっちゃ照れてるし

鼻の下伸びてるんじゃないか？

相変わらず、チコは無表情だし

ん？いやちよつと赤くなってる？

気のせいかな？

「どうしてここがわかったの？」

心の中で、思っていることは、違う言葉が出てくる

「カイが教えてくれた」

正直、チコが来てくれて嬉しかった

「ありえない、カイの能力は

能力者以外は、感知できないはず」

「でも、カイはあなたの位置が分かっている

その意味わかる？」

「さあ、わからないな」

もちろん、嘘だ

牛の事があってから、薄々気づいていた

「だから、戻ってきてほしい」

「無理だ・・・戻ることはできない」

これも、嘘・・・

「どうして？」

「俺はこの世界にとって

危険な存在だから」

これは、本当

チコが話さないの俺は、このまま続ける

「神様が、来るまでこの世界は

争いが絶えなかった

だけど、神様は能力を使って
争いを無くした

この世界は、この、5年間は神様によって

争いなんてない、完璧な世界だったんだ

例えるなら、バケツの中にある水だよ

その水は、何にも不純物が入っていない

無菌の状態

ちよつと衝撃を与えても、すぐに揺れは収まってしまふ

そんな中、みんなが生きている

そんな世界を神様は創った

だけど、水は問題なかった

ただ、バケツに蓋ふたをしてなかった

そこに水さえあれば生きていける

単細胞生物が入ってきた

それが俺だよ

俺は、どんどん分裂を繰り返し増えていく

そのせいで、予定とは違う動きをする

人が、増えてくる

でも、いくら俺とはいっても思考が違う

俺が出てきてもおかしくはない

それが、甘次郎さんの事だ

だから、水にとつてそれは、そいつが邪魔に感じる

で、実はその単細胞生物は、オリジナルしか

分裂することができないと言う事がわかった

だから、水は俺を追い出そうとしている」

こんなに喋ったのは久しぶりだ

そう思いながら一息つく

「水は感情を持っていない」

「いや、そこは追及しないで、例え、だから例え

そんでもって、水の行動に気づいた

俺の分身は、それを阻止しようとする奴が出てきた

それが、もう一人の俺とトイだ」

その言葉に、チコが反応した

「今、何が起こっているのか知っていたの？」

「全てじゃないが、知っているさ

力が失われる前に、抽象的だが

この未来は、見えていたからね

で、俺の分身はどうやって

俺を守ろうとしているかと言うと

水を飲み干そうとしている」

しばらく、チコが理解しようと

黙っていたが、ある事に気づいた

「でも、それじゃ・・・」

「そう、この世界は滅ぶし、

水がなくなれば、俺は死ぬ」

引きこもり生活に終止符を・

「世界は、滅ぶし

水がなくなれば、俺は死ぬ」

何もしゃべらないチコに

さらに、巧真は話を続けた

「しかも、それを阻止しようとしているのも

実は、俺の分身

意味わかる？」

「・・・どういう意味？」

「本来なら、神様と俺の争いのはずなのに

俺と俺が争っているんだ

つまり、神様にもう世界をまとめる

力が残っていない

神様の持っている龍はお飾りになってしまったんだよ」

「龍？」

「・・・ああ、いやなんでもない」

「どうにかできないの？」

「俺がもう一人いる意味わかる？」

「あいつも、分裂ができるって言う意味だよ」

「でも、分裂ができるのは

オリジナルだけだってさっき」

「じゃあ、オリジナルはどうやって生まれた？」

「それは・・・」

「それと同じだ

突然、分身ができる奴が生まれてもおかしくない」

巧真は、頭をグツタリと下げた

「なあチコ・・・どっちがいいと思う？」

「どっち？」

「別に、神様が死んでも俺が死んでも
この世界が滅ぶわけじゃない

ただ、神様が死ぬと社会が崩壊するんだ
そして、新しい、社会が出来上がる

俺の分身が死ねばこれまでの社会が続く」
「私はもちろん」

言い続けようとするチコに

巧真は割り込むように言った

「規律か自由か」

「え？」

「神様が生き残れば、殺人も起きないし
なにしろ平和だ

ただ、それは俺たちにとっては、

退屈なことなのかもしれない

俺の分身が生き残れば、

戦争、殺人、暴行、強盗、全てが起きる

平和なんて言葉は、ないかもしれない

でも、すべての欲求が満たされる

退屈なんて事もなくなる

自由を手に入れることができる

チコはどっちがいい？」

両手で頭を抱え、悩む巧真の姿を見て

チコは何も言わず帰ろうとしていた

「え・・なんも助言もなし？」

「私は、自分の立場からしか言えないから

私の立場上では、こっちに味方してほしい」

「でも、俺にはもう力はない」

「そう思ってるだけ

それと、自由って本当にそんな事？」

巧真がここで踏みとどまっている理由はそれでしょう？
どうしたいかは、自分で決めて」

そう言い残し、チコは家から出て行った
破壊した扉も直さずに・・

壁の向こうでは、

トイは、なりふり構わず銃を発砲し続けていた
弾が切れては新しいのを作り出し
また切れては新しいのを作り出す
それを繰り返していた

巧真は、地べたに座り込み

自分の頭上を旋回する、龍を見つめていた

「そろそろ、行くか」

そう言いながら、巧真は、立ち上がり

トイに合図した

「トイ、行くぞ」

トイは駆け足で、近寄ってきた

巧真のそばに近寄ると服の端をつかんだ

その瞬間、巧真とトイは消えた

巧真たちは、下の階の石段の前に現れた

石段には、何やら懐かしい

こわもて

強面の太ったおっさんが指揮をとる

部隊が、巧真たちを取り囲んだ

「よお、おっさん

久しぶりだな、今回は木刀じゃないぜ」

巧真は、刀を取り出し

鞘から抜き、鞘をその場に放り投げ

石段に向かって走り出した

「かれ　！！」

おっさんの図太い掛け声と同時に

巧真たちに部隊が襲いかかって行った

村長は、家の扉が壊れているのに驚き

「巧真君、大丈夫か？」と言いながら家に入ってきた
一方、巧真は家の掃除をしていた

「こ、この扉は、子供たちがやったのか？」

「いやいや、違いますよ」

「かしだな・・・」

そう言いながら、下に目線をやると

壊れた扉の横に、巧真の物らしき荷物がまとめてあった

「巧真君・・・まさか」

「え？」

「また、出て行くつもりかい？」

「ええ、そのつもりです」

「待ってくれ、子供達には、

もうこんな事やらせないから、行かないでくれ」

「大丈夫ですよ・・・ケイトさん」

今の言葉に、理解ができないのか村長は固まり

巧真は照れ隠しのように鼻をかいいた

巧真の動作を見て

理解したのか村長は

「もう一度、ケイトさんと呼んでくれ」

と頼んできたので、巧真は

「もしくは『父さん』の方がいいですか？」

と憎たらしく笑って見せた

村長は、「バレてたか」と頭をかきながら笑ってくれた

「牛にはちゃんと言ってありますから

牛の事よろしくお願いします」

「うん、任せておきなさい」

そう言って胸を張って見せた

巧真は、荷物を背負い

「ちよっくら、行ってきます」

そう言い残し、家を出て行った

「報告します。侵入者は下の階から現れ

現在、上の階の部隊と交戦中」

リムの部下が力を使い神の部屋で待つ

テニム達にそう告げる、

それと同時に、石段の方で大きな音が響く

「・・・部隊を撤退させる」

テニムが小さくつぶやいた

「しかし、それでは・・・」

「俺とリムでどうにかする、

撤退だ」

部下は声しか聞こえないが、

悔しさは伝わってくるような気がした

「・・・わかりました」

そこで、通信は終わった

「やるしかない・・・」

テニムが自分にそう言い聞かせる姿を見た

リムも、かなり緊張していた

「大丈夫、テニムができなくても

私が、どうにかする」

「そう言う訳には・・・」

「自分の能力を巧真君に使えるの？」

真剣な顔でそう聞いてくるリムに

テニムは少し戸惑った

「それは・・・使うしかないだろ

あいつを止める方法はそれしかない」

「巧真君が、目の前に来ても

それが言えるといいけど」

「ああ・・・そうだな」

石段の方では、戦闘の音はなくなり

その代りに、階段を駆け上がる音が二つ

段々と近づいてきた

「来たぞ」

テニムがそう言う

と階段の目の前に巧真とトイが現れた

トイの方は、息使いが荒くかなり疲労していた

だが、巧真は返り血を浴び赤く染まっては、いるが
息は、全く乱れていなかった

「巧真　！！俺は、お前を全力で止める　！！」

テニムは、そう叫び

巧真に向かって、右手を向ける

力を使おうとした時、テニムは昔の記憶が蘇える

手を向けてる方には、おびえた目をした子供がいる

だが、実際はおびえた目ではなく

すべてを見下すような目をした巧真が立っている

「テニムっ　！！」

リムの叫びで、テニムは我に返った

「くそっつ！！」

テニムは、腰に差してあったナイフを取り出し

巧真に、向って走り出した

走り寄ってくる、テニムにトイは、銃口を向ける

引き金を引こうとした瞬間

誰かに、胸ぐらを掴まれたかと思うと

一瞬にして、別の場所に移動し、壁に激突した

また、別の場所に移動し床に叩きつけられた、かと思うと

上から、周りにあった城の装飾品がトイに向かって落ちてきた

「リムの野郎・・・」

「おい、何よそ見してやがる」

テニムは、そう言いながらナイフを巧真に向かって投げた

巧真は刀で、そのナイフを地面に叩きつけた

その隙にテニムは、巧真に近づき

ほぼ密着した状態で、刀を使わせないようにした

「さすがテニム、考えたな」

巧真は、刀から手を放しテニムの顔めがけて

思いつきり、右の拳を振った

だが、拳は空を切り

テニムは、巧真の両足を払い

巧真は、あおむけ状態で倒れた

すかさず、落ちていたナイフを取り

巧真の胸に目掛けて振り下ろした

「終わりだ、巧真　！！」

巧真は、一瞬笑ったかと思うと

姿を消した、ナイフは地面に突き刺さり

「終わるのは、テニムだよ」

と、テニムの後ろで声がした
テニムが後ろを振り返ると巧真が刀を振り下ろしている所だった
終わった・・・そう思いテニムは目を閉じる

だが、気がつくとりムの横にテニムは立っていた

「大丈夫？」

「・・・いや、もう駄目だ

今までにないくらい、お前が女らしく見える」

「あら、ありがと」

「男だつて知らなかったら、今頃お前に求婚してるかもしれない」

「誰かさんみたく

一週間、熱でうなされるわよ」

「そうだな」

「二人で、巧真君を止めるわよ」

「ああ、援護頼む」

「まかせといて」

その時、装飾品に埋められていたトイが
装飾品を吹き飛ばし、復活した

「だあつ、くそがつ」

トイは、テニム達に指をさし何かを叫んでいる

「ごめんね、援護またしばらくできないかな？」

「大丈夫だ、それまでは、

俺だけでもつてみせる」

「すぐに、終わらせるから」

テニムは再度、ナイフを構え、

リムもトイの方へ、右手を向けた

「大丈夫ですよ、リムさん」

そう言いながら、階段の方から

槍を持った、カイが現れた

「すみません、報告してから気を失ってたみたいです」

リムは、力を使って

カイをすぐ横に連れてきた

「怪我は？大丈夫なの」

「問題ないです」

チコさんが、大体治してくれました

ですから、トイは俺がやります

リムさんは、テニムさんの援護に集中してください」

「じゃあ、任せるわ」

その代り、あなたの援護もしっかりしてあげる」

「え？でも、一つに集中した方が」

「大丈夫よ、昔からこういう状況で

二人のお守り^もをしていたんだから二つあった方がちょうどいいの」

胸を張りながらそう言う、リムに対し

「おい、あいつならともかく

俺はリムにお守りをされた覚えはないぞ」

と、テニムが猛反発した

「なによ、知らない人の髪を間違えて燃やしちゃって

逃げる時に、あなた達、私がいなかったら

どうなっていた事やら」

「いつの話、してるんだよ

ああ、やつぱり、お前、女らしくないわ

男だ、男」

言い争いする二人をカイがなだめようとする中

「トイ、生きていたか」

そう言いながら、巧真はトイに近づいて行った

「すみません、隊長

俺、足手まといですね」

「そんな事はない

お前は、よくここまで付いてきてくれた」

「でも、俺・・・」

「確かに、お前は、城の警護だったから、ここに入れてはいるが
所詮、レベル3はレベル4には、勝てないってことだ」

「大丈夫です、今度こそ」

「いや、もう十分だ

そろそろ、先に進もう」

「先に、進んでいいと誰が言った」

気がつく、テニムが巧真の目の前に現われていた

「やべっ・・・」

テニムの蹴りを腹にもろに喰らい

巧真は、壁まで吹き飛ばされ、崩れた壁が巧真に降ってきた

「隊長　！！」

トイが巧真の所に駆け寄る途中

トイの目の前に、カイが現れた

「今度は、何も躊躇ちゅうちゆしない

全力でお前を止めてやる」

そう言つと、カイは槍をトイの顔めがけて

振り下ろしてきた

反応しきれなかった、トイの左頬を槍がかすめた

「上等だ、今度こそお前を殺してやる」

巧真は、上にある瓦礫をどけ

立ち上がると、テニムが待ち構えていた

横では、トイとカイが戦っている

「巧真・・・」

「リムの能力って便利だよな」

「もう、止めにしよう」

「断るって、言ったら」

「ここで、倒す」

「無理だな、俺はもう行くよ」

「もし、お前が神の部屋に入れたとしても

トイは、どうなる？置いてくつもりか」

「まあ、そこで黙って見てな」

トイは、リムの能力によって

宙に飛ばされていた

「終わりだ、トイ　！！」

カイは、トイめがけて衝撃波を飛ばした

「隊長　！！」

トイが、そう叫ぶ中

巧真は、トイの横に現われた

「捕まってる」

巧真はトイの腕をつかみ

衝撃波が来る前に二人とも姿を消した

テニム達が、どこへいったか

姿を探す中

二人が、姿をあらわした場所は

神の部屋の中だった

「よお、取り戻しに来たぜ

あいつの生きる希望を」

神の部屋には、神とチョコが待っていた

「チョコちゃん、下がってて」

「どうして？」

私もレベル4です。だから一緒に」

「いいから　！！」

神は、椅子から立ち上がり

巧真の方に歩み寄って行った

「いい判断だ

これ以上、犠牲者を出したくないからか？」

「違うわ、あなたの暴走を

素早く止めるためよ」

「そうだな、お前を殺してそれで終わりだ」

巧真は、刀を高々と上げた

「可哀想な人」

「なんだと？」

「あなたは、これが巧真君の為になると

本当に思っているの？」

「当たり前だ、これであいつは

この世界でトップになれる」

「この行動が、巧真君を苦しめる結果に

なるとも知らないで」

「そんな事はない　！！

俺は、これまでもあいつのために行動してきた」

「あなたは、巧真君を蝕^{むしば}む

癌細胞よ。それが正しいと信じて行動しても

結果的に、本人を苦しめる」

神は、哀れんだ表情で巧真を見つめる

「黙れ　！！

俺を見下すな」

巧真は、神に向かって刀を振り下ろした

切られるそう思い

目をつぶったチコは、

恐る恐ると、目を開いた

そこには、腰を抜かした神の前に

振り下ろされた刀を鞘で受け止める、巧真が映った

「く、来るのが、遅い

また迷子？」

「違う、こういう物語の場合

ヒロイ主人公は遅れてくるんだ」

それは、スケールの問題

「違う、こういう物語の場合
主人公は遅れてくるんだ」

状況が、理解できないのか

その場で、フリーズする巧真を俺は蹴りで
壁の方まで、吹き飛ばした

「んゝ、まだ今一、力の加減が難しいな」

「巧真・・どうしてお前がここにいる　！！」

「決まってるんだろ」

お前の暴走を止めるためだ」

俺は、巧真に握っていた鞘を向けながらそう言った
だが、その鞘には、刀が入っていないかった

「俺を殺しに来たのか？」

「違う、止めに来たって言ってるんだろ」

「なんで、刀を持っていない」

「お前だって、鞘を持っていないだろ」

これは、俺たちの立場を表わしている」

「？」

「お前は、自分の事を本能とか言ってる」

そして、俺はそれを抑える理性だ

刃物をむき出しにしてたら手が切れちゃう

だから、鞘がある

今のおまえは、鞘を失った刀だ

刀を鞘に収めるのが、理性の義務だ」

「出来るのか？そんな事が」

壁にいたはずの巧真が消え

神の背後に現れた

「こいつを殺せば終わりだ」

神に刀を振り下ろす巧真の目の前に

突然、鞘が現れた

「くそっ」

かろうじて、避けたが

巧真の中段蹴りをまともに食らい

トイが立つ場所に飛ばされ

トイが、巧真をキャッチした

「隊長、大丈夫ですか？」

巧真は、心配するトイを払いのけた

「なんで、お前に力が戻ってるんだ　！！」

「別に、力を失っていたわけじゃなかったんだ

力の使い方が、わからなかったただけなんだ

今までは、本能が教えてくれていたからな

理解するのに苦労したよ・・・それから」

苦労話を淡々と話し始める

巧真に、トイが銃口を向けた

「よせ、あいつは殺すな」

引き金を引こうとするトイを巧真は、突き飛ばし

巧真に右手を向け

「しばらく、眠ってろ」

巧真の右手から巨大な衝撃波が飛んできた

俺に向かってくる衝撃波に向け

衝撃波を出し相殺した

だが、分散した衝撃波の一つがチコの目の前で破裂した

「真由、チコを頼む　！！」

神は、チコの所に行き

外傷がないか調べた

「大丈夫、気を失ってるだけみたい」

「つたく、こういう時ぐらい

声出せよ」

「なによ、巧真が衝撃波を相殺しなければ

チコちゃんも、こんな事にはならなかったのよ」

「なんだと、じゃあ、あれか？」

俺に、衝撃波をまともに喰らえと？」

「そんな事、言っていないじゃないの　！！」

「いいや、言ってるね

遠まわしに、言ってるわ

遠まわしに、俺に死ねって言ってるわ」

「違っ・・ああもう、死んじゃえ　！！

巧真なんか、死んじゃえ」

「なっ、そう言う事言うか？」

せつかく助けてやったのに恩をあだで返すのか

そう言う風に、親に教わったのか？

まったく、親の顔が見てみたいね」

「なによ、そんな事あんたに言われたくないわ」

「なんでだよ、意味わかんないし」

言い争う、二人に巧真は、痺れを切らせた

「おい、いい加減にしろ　！！

そもそも、なんでそいつの味方をする

そいつは、お前を殺そうとしてたんだぞ

そんなやつを、どうしてかばう？」

「だったら、聞か何で、俺を殺そうとしてるからって
国を滅ぼそうとする？」

「この世界が国だと？」

馬鹿言つな、これは、神が創つた想像の世界だ

だが、神にもう世界を創り直すほどの力は残っていない
どの道、この世界は滅びる」

「そうだよ、真由にもう力は残っていない
だから、俺を殺すこともできない」

「神に力がないからこそ

新しい、統率者が必要なんだよ

新しい社会を作る、統率者が必要だ」

「関係無い」

「はあっ？」

「どうでもいいんだよ、んな事

世界がどうか、社会がどうか

俺には、世界を創る力があるとか

だからなんだ？ いらねえよ。そんな力

それに、これから、世界がどうなるうが

俺には関係無い、けどな

この世界にある俺の大切な物を壊そうとしてんなら

俺は、全力でそれを阻止する」

「・・・そんなに神が大事か？」

「いや、全然」

即答する、巧真に「ちよつと」と突っ込みを入れる

真由に対し巧真はまだ、話を続ける

「だけど、真由も大切な物の一つだ

それにそう思ってる奴は、俺一人じゃないはずだ」

その言葉と同時に、扉の一部が崩れ

そこから、テニム達が現れた

「おお、うまくいった

案外やってみるものだな」

テニム達は、服はボロボロで

一部、破けてたりと、扉を壊すのがどれだけ大変だったかを証明していた

「考えてみたら、私ってこんな苦勞しないでも普通に神の部屋に入れてたのよね」

「まあ、そう言わないでください

リムさんいなくなったら、

テニムさんと僕ですよ。華がないじゃないですか」

「その、華は腐ってるけどな」

「なんですって？」

「ちよつと、二人とも落ち着いて」

扉が崩れるのを見て真由も驚いていたが

それ以上に、巧真も驚いていた

「馬鹿な、あの扉が壊れるだと？」

「ありえない」

「ありえなくなんかないさ

心の壁なんてその気になりゃ壊せるもんさ

俺だって、心の壁が壊されたから、ここにいるんだ

まあ、あんな壊し方、反則だけどな」

そう言つて、チコの方に視線を向けたはず

だったが、なぜかその横にいた真由が反応した

「えっ、私？」

「違うつー！！馬鹿か、お前は？」

自分の殻に引きこもってる奴が

どうやって、人ん家の扉を吹き飛ばすんだよ」

「なによ、自分の事は棚にあげといて

私に説教なんかするな」

「やかましい、お前と俺とではスケールが違うんだよ

確かに、俺は自分の殻に引きこもってたかもしれないけど
お前の場合、殻じゃなくて、

城だぞ、城、城わかるか？ お・し・ろ　！！

キングダムだ　！！」

「大きななんて、関係無いじゃない

要は、引きこもっていたかどうかよ

お城、お城って強調しないでよ」

「そりゃ、協調したくなるよ

誰も入れたくないからって警護までつけやがって

どんな、引きこもり生活だよ」

「おい、お前等、いい加減にしるよ

話が進まないだろ　！！

巧真、お前は大切な物は、全力で守ると言ったよな？」

「？」

「だったら、それを俺に証明してみろ」

巧真は、どこからかナイフを取り出し

テニム達に向かって、投げようとしていた

だが、気付かないうちに、手首を抑えられていた

「止せ、もうお前の負けだ」

「だから、前にも言っただろ

甘いつて」

巧真は、押さえられた手とは、

反対の手にもナイフを持っていた

そして、トイも俺に銃口を向けて引き金を引こうとしていた

気づいた、カイがトイに向かって走り出したが

間に合いそうにない

だが、巧真の手に持ったナイフの行く先は、

俺の脇腹にではなく、トイの脇腹に刺さった
「ど、どうして？」

状況が理解できないトイはわけもわからず
その場に倒れた

「言っただろ、こいつは殺すなつて」

巧真が冷たくそう言う

トイが倒れ、カイはそのまま
トイの所に向かった

「トイ、大丈夫か？」

頭を支え、上体を持ち上げるが
服からは、血が滲みだしていた

「か、カイ・・・俺、こ・・・の道、

せ、選択して、間違えて・・・た、たのかな？」

「しっかりしろ

頼むから・・・」

カイの目からは涙が溢れていた

「で、でもな・・・俺こ、の道

選択して、こ、後悔してないから・・・」

そう言い残すと、トイの目からも

一滴の涙が流れると同時に、

トイの体から生気が失われた

カイが、トイを抱きながら泣き叫ぶ声が響く中
俺は、巧真の胸倉を掴んでいた

「てめえ、何したのかわかってんのか　！？」

「知っているさ

お前を助けたんだ」

「あいつは・・・トイは、お前を信じて

ここまで、付いてきたんだぞ

それなのに、お前は・・・」

自分の目から涙が流れているのは知っていたが
巧真の目にも涙が溜まっていることに気づいた

「知らなかっただろ？」

本能は、お前を助けるためにだつたら
おれ

仲間だつて、殺しちゃうんだぜ

これは、全部、お前のためにやってきたんだ
！！

俺を、本気で止めたかつたらな」

巧真は、俺の手を無理やり放し

その場に、落ちていた刀を取った

「俺を、殺せ　！！」

そう言つて、俺に襲いかかってきた

俺は、流れる涙を拭い

鞘を取り出した

「巧真　！！」

だから、甘いつて言つてんつが・・・」

俺は、巧真の横に現われ

右肩に向かつて、鞘を思いつきりぶつけた

鞘からは、巧真の腕の骨がつぶれる感触が伝わってきた

巧真は、一度は痛みで、刀を落としたものの

左手で刀を拾い、また襲いかかってきた

「巧真　！！」

無造作に振り回す刀をかわし

振り下ろしてきた刀を、上にはじき

左腕から鈍い音が出るほどの威力で鞘をぶつけた

両膝をつき、肩で息をし

両腕が肩からぶら下がった状態でも

まだ、俺に襲いかかろうとした巧真の顔の目の前に
先ほど、はじいた刀が地面に突き刺さった

俺は、その刀を地面から抜いた

「そうだ、巧真

それで俺を殺せ、それでいいんだ」

俺は、刀を高々と上げた

巧真は、目をつぶり死を覚悟した

俺は、上を向いた刃を、下に向け

刀を勢いよく下ろし、鞘に収めた

「どうして・・・どうして殺さない　！！」

「言つたはずだ、止めに来たって

それと、刀に鞘があるように

鞘に刀がないと、意味がない

俺のもとに戻れ

今まで、すべてお前に任せていて悪かった」

「それでいいのか？」

後悔しないか？」

「ああ、すべてを受け入れてやる」

「そうか・・・それならいい」

巧真は、俺に今まで見た事がないような

満面の笑みを見せ

一瞬、ゲルになったかと思うと

俺の体の中に取り込まれていった

何が起こったか、わからない

テニムは、ただ上を向き、立ち尽くしている
巧真のもとに向かった

「巧真、大丈夫か？」

「い．．」

「い？」

「いつてえええ　　！！」

巧真は、顔じゅうに脂汗をかき

両膝をつきながらそう叫んだ

「痛いってこれ、うわっ、本気で叩くんじゃなかったこれ
うわっ、右肩うごかねえっ！！ああっ、なんかこれ

アバラも逝ってるっ、ちよっテニム！！

俺は、吹き飛ばすときに本気で飛ばしてんじゃねーよ
アバラが何本か逝ってるのはそのせいだ」

「なっ、馬鹿言うな

あの時は、お前を止めるので必死だったんだよ」

「だあーくそっ、すべて受け入れるとか言ってたけど
そんな事、言うんじゃなかった

いや、でもそうじゃないと俺も納得しなかったし．．

．．あ、段々痛みが麻痺してきた．．

ああ、でも動かすと痛い」

両膝をつき、頭を地面につけながら

一人でぶつくさと喋る巧真を見て

テニムとリムは、いつもの巧真だと安堵し

カイは、今まで見た事のない一面を見たとき驚いていた

テニムは、巧真に歩み寄った

「巧真．．」

「んゝ、なに？」

「お帰り、待っていたよ」

巧真は、一瞬、鼻で笑い「ああ、ただいま」と呟いた

それは、スケールの問題（後書き）

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

なんか、突然の急展開や理解できない事も

たくさんあると思います。

まあ、そこは気にしないで軽く流してください。

なんやかんやで、次最終話にしようと思います。

最後までよろしく願います。

「難去ってもまた一難・・・？」

「けど、この緊急事態にあの老人達は何やってる逃げたのか？」

「何を言ってる、お前たちが殺したんだろ」

「はあっ？ いや、俺達はやってないぞ」

「老人達は、トイの武器で全員殺されていたんだぞお前たち以外に誰がいる」

「とりあえず、トイが下の階で

拳銃使って、人を殺してるのを見つけて捕まえたんだよ

あいつ、甘次郎さんの家で銃を見ていたから勝手に作っていたみたいなんだ」

「なんだって？」

「だから、俺達は老人は殺してない」

「なら、一体誰が？」

「隊長　！！」

カイの叫び声と一発の銃声で

穏やかになりかけていた、この場が一気に崩れた

「甘次郎さん・・・」

穴のあいた扉に甘次郎さんが立っていた

「どうも、お疲れさん

ちなみに、銃を彼に作らせたのは私だ

私の分も作ってもらったがね」

カイは、俺をかばい甘次郎の銃弾に撃たれた

「カイ　！！大丈夫か？」

テニムは、カイの所に駆け寄った

「はい・・・大丈夫です」

どうにか、俺もカイの所まで行けたが

カイは太ももから大量に出血していた

「血が止まらない

おい、真由　！！チコを引っ叩いてでもいいから起こせ
このままじゃ、駄目だ」

「わかったわ」

真由は、横になっているチコを必死に起こそうとしていた
「いや、まさかこんなに

うまく行くとは思わなかったよ

こんな風にこの世界を救うとは思っていなかったが、

まあ、結果的に私がここに来れたからよしとしよう」

リムは、甘次郎さんから銃を取り上げようと

甘次郎の目の前に、移動したがそれが裏目に出た

甘次郎は、それを先読みし

リムの後頭部に銃を叩きつけた

甘次郎は、リムの首を腕で抱え

リムの頭に銃を突きつけた

「誰も動くな　！！動くと

こいつの命は保証しない」

甘次郎は、壁伝いに中央に置いてある

椅子のほうに向かった

「甘次郎さん、なんで？」

俺は、日記は読んでいないぞ」

「別に、読まなくてよかったんだ

日記を受け取った時点で、私の物語は進んでいたんだ」

「うわっ、ズルい」

「やかましい、頭がいいと言ってほしいね

巧真君、感謝するよ」

甘次郎は、椅子を乱暴に蹴った

椅子は、横に飛んでいったものの

巨大な背もたれだけは、倒れることはなかった

背もたれだと思っていた物は、やはり巨大な扉だった

「駄目　！！そこは開けないで」

真由は、必死に叫んでいる

「私は、この日のためにこれまで生きてきたんだ

誰にも邪魔させない」

「駄目　！！開けないで」

「甘次郎さん、開けちゃ駄目だ真由の様子がおかしい」

「あいつは、私達を日本に帰らせたくないだけだ

私は、帰るんだ」

甘次郎は、扉を蹴りで開けリムを突き飛ばした

両手を広げ扉に近づいて行った

「帰るぞ　！！」

扉の中は暗闇が広がっていた

そして暗闇が突然、扉から出てきて甘次郎の頭を包んだかと思うと

一瞬にして、甘次郎の頭は体から無くなっていた

「なっ・・・」

この場にいる全員が、凍りつき息をのんだ

暗闇は、甘次郎の体に絡み付き

扉に奥へと引きずって行った

真由は、叫び声を上げ、その声でチコは目を覚ました

「何があつたの？」

「チコ、カイの手当をしてやってくれ

その後、巧真の手当をしてくれ」

テニムは、そう指示すると

扉の近くに倒れているリムを助けに向かった

巧真は、何とか立ち上がり

フラフラと真由の近くへ行き、その場に倒れこんだ

「真由、ありやなんだ？」

「・・・無の世界よ」

「あれが、か？」

巧真が、いつも見ていた夢の無の世界とは、違っていた

「暗闇があるじゃないか」

「あの闇はもともと、この世界にあつたものなの

戦争を止めるには、それしか方法がなかった。

戦争で生まれる、憎悪や悲しみそれらをひつくるめて

私は、無の世界に放り込んだの

そうしたら、戦争はピタリと止んだわ

でも、それも一時的なものだった。

光があれば、影ができるように

憎悪や悲しみも日に日に増えていった

それを、私は、龍を使って

毎日回収しては無の世界に捨てていた

そうしていると、いつの間にか、私は神様にされていた。

でも、それでも限界があつた

石油や重油に限りがあつたように、無の世界にも限りがあつた

今のあるそこは、存在する物を

全てを欲しがる闇の世界よ」

何も変化がなかった、向こうの世界から突然

黒い無数の手が飛び出してきた

「うわっなんだ　！！」

テニムは、リムを急いで担ぎ扉から離れた

「とにかく、あの扉を閉じないと

チコ、カイの治療は終わってたか？」

巧真は、確認を取ろうとカイがいる場所に

目をやるがそこにはチコはいなかった

「ここ」

チコは、気付かないうちに巧真の横にいた

「頼む、とりあえず、動けるようにしてくれ」

「わかった」

そう言うのと、その後は、まあその・言うまでもないただ、その光景に全員が目を丸くしてたね

真由が、驚いた表情をしてるので

「まあ、その、これは・・なんだ、あのーあれだ」

曖昧な事を言っていると

「フンっ」と言いながらそっぽを向いてしまった

結局、怪我はすべて治った

いや、別にあの状況でしばらくいたかったから

とか、そんなやましい理由で完治したわけじゃないからね

ただ全快の方がこの後も楽かなって思ったからであって

本当に、そんな理由じゃないからね

「とにかく、あの扉を閉じないと」

「でも、閉じるってどうやって」

「そりゃ、決まってる

人力だろ」

巧真は、扉の方へ歩いて行っ

たと、真由が引きとめた

「ちよっ、待って

なんで巧真が行くの」

「俺が行くしかないだろ

それに、これは決まっていた事だ

毎回、俺は無の世界に飛ばされる夢を見ていた

この場面が、きつとそうだったんだ

これが、俺の運命なんだ」

「何言ってるの

運命は変えられるのよ」

「そうかもしれない

でも、例えそうでないとしても

夢の中の俺と

今の俺は受け止め方が違う

俺は、死なないし消えたりなんかしない
っと言う訳で行ってくる」

巧真は、扉に向かって走り出した

無数の手をかわし

扉の前に到着した。扉は両側全開になっていた

そして、扉は、向こう側の世界にあった

巧真は、向こうの世界へ一歩踏み入れた

だが、向こうの世界には、地面がなかった

「ヤベッ」心の中で地面を創造すると

この世界に地面という概念が生まれた

周りは、真っ暗

ただ、扉とあっちの世界はくつきりと見える

片側の扉にしがみつき閉じようと踏ん張るがとても重い

反対側までとても手が届かない

そう思ったら、反対側の扉に俺が現れた

「この扉、閉じるぞ相棒　！！」

「なっ、誰が相棒だ　ボケ」

「いいじゃねーか、二心同体」

「それただの、多重人格だ　！！」

「そうなんだから、仕方ないだろ」

少しずつだが、扉が徐々に閉まってきた

扉をあと少しの所まで持ってきた
無数の手も扉が閉まるにつれ

無くなっていた

「ねえ、待つて

なんで、そっちの世界にいるの」

巧真は、あと少し手閉じるというのに
無の世界側にいた

「ああ？今それどころじゃないんだよ」

「この扉、結構重いんだ

だからこのまま閉める」

「えっ？なんで

駄目よ、そんなの」

真由は、あと少しで閉まる扉を両手で押さえた

「うわっ、馬鹿押すな！！」

「こっちの身にもなれ」

扉は、また半開き状態になってしまった

「なんで？なんで、そっちに残るのよ

無の世界に残ったりしたら

消えてなくなるのよ」

「いや、もうここは無の世界なんかじゃないよ」

「そうだ、ここは闇の世界だ」

「無も闇も同じよ

お願いだから、戻ってきて」

真由の目には涙が溜まっていた

「真由・・お前、言ったよな

光がある所に影があるって

逆を言えば、影があれば光がある」

「無いかもしれないじゃない

周りを見てよ、暗闇だけよ」

「いや、ある必ずある

それにもし、なくても」

「俺が光になってやる

真由、お前はもう一人でも大丈夫だ

それに、お前はもう一人なんかじゃない」

真由は、ゆっくりと抑えていた手を下した
うつむく真由に巧真は

「真由・・・」

「笑え、苦しい時こそ、悲しい時こそ笑え」

真由は、腕で涙をぬぐうと

「私もう、大丈夫

巧真なんかいなくても全然平気だから」

満面の笑顔を巧真に見せてくれた

一人に戻った巧真は、あと少しの所で扉を止めた

「あつ、そうだ。真由」

「え、なに？」

「お前も、あの夢

見た事あるのか？」

「う、うん

一応、私が考えた物語だから」

「聞きたかったんだけど

最後、あれなんて言ってるの？」

「えっ？なにってそりゃ、色々よ・・・」

「はあっ？何？聞こえない

ちよつ最後なんだし教えてよ

ほら、この扉閉まっちゃうよ

俺があと少し力入れたら閉まっちゃうよ」

真由は、しばらく黙っていたが

口を開き、巧真に呟いた

「・・・」

それを聞いた。巧真は少し驚いた表情をしたが

一瞬、笑ったかと思うと二度と開くことはない扉を閉じた

あの出来事から、しばらく経った

一日で、この国を破壊しようとした奴が

一夜あけると、この世界を救った、英雄称されるようになったのは、
言うまでもない

神は、神と言う名称から姫と名称を変え

絶対的存在から象徴的存在へと変わった

また、扉や壁と言う境は、なくなり

政治の面は、それぞれの代表が合議によって
行われるようになった

そんな中、テニムとカイは

姫のいる部屋の扉の前で警護をしていた

カイは、扉越しに中で楽しそうに会話する

姫の声を必死に拾おうとしていた

「おい、カイ

盗み聞きなんかするな品がないぞ」

「だって、おかしくないですか？」

「ん？なにが」

「今、部屋の中には、姫しかいないんですよ

リムさんだって、他の警護だし

チコさんも、何もしゃべらないでどっか行っちゃったし

姫、もしかしておかしくなったんじゃないですか？」

「なんだ、そんな事か」

「え？他に誰がいるんですか？」

「いや、いないさ

姫、一人だろ」

「？」

「俺、一度だけだが

宿で、巧真が独り言を喋ってる所を見た事があるんだ」

「え？でも隊長はもうこの世界には」

「んなもん、簡単なことだ」

テニムは、胸を張りながら

「愛だよ、愛

世界をはさむような障害がある方が燃えるんだよ」

「うわっ・・・なんスカそれ？

くさっ、て言うかキモっ　！！

テニムさん、キモっ」

「ああ？なんだとコノヤロー」

「うわっ、冗談ですよ

ちよっと、まって・・・ごめんなさい　！！」

未だに、問題は山積みだがこの世界は回っていく
創られた世界ではなく、これから自らが創っていく世界で

一難去ってもまた一難・・・？（後書き）

最後まで読んでいただいて本当にありがとうございます。
もう、ほとんど無理やりつと、投げやりって感じです。

一応、これで終わりです。

最後にまたくだらないオマケみたいな物書いてますけど、終わりで
す。

最後まで読んでいただいて本当にありがとうございます。
意見や感想、お待ちしています。

これは、とらえ方の問題（オマケ）

「ええ、それではただいまより

会議を開始したいと思います

司会進行は、わたくしリムでございます」

丸型のテーブルにテニム、リム、カイ、チョコが
全員、顔を合わせるように座っていた

「え？これなんの会議ですか？

姫は？と言うか、他の代表者は？」

「カイ君、フライングは駄目です

姫や他の代表者は抜きで会議をいたします
そして、今回の問題提起はこちら」

リムは、テーブルの上に

一面にでかい文字を書いた紙をおいた

『姫は、巧真君に最後、一体なんと言ったか』

しばらくの沈黙の後

テニムが最初に口を出した

「知らねーよ、つか、どうでもいい

俺、帰っていい？」

「駄目です」

「なんで、俺、色々忙しいの」

「忙しいって何よ

ただ、道を整備してるだけじゃない」

「はあ？残念でした

今は、新しい道を作ろうとしてるだけです
いや、道の名前はテニムロードってどお？」

「どお？っじゃないですよ

テニムさん、道なんかいらないですから

そんな事より、こっちは差別だの偏見だので忙しいんですから
こっちを手伝ってくださいよ」

「はいっ、皆さん、話がずれてますよ
とりあえず、私の仮説から行きます」

リム説

真由は巧真に呟いた

「ありがとう、愛してるわ」

巧真は、少し驚いた表情をしたが

一瞬笑ったかと思うと二度と開くことのない扉を閉じた

「キヤ　！！いいこれ最高」

「おい、この頭のおかしいオカマをどうにかしろ」

「なんですって？」

「わかった、そう言うことなら

俺の仮説でもいいんじゃないか」

テニム説

真由は、巧真に呟いた

「・・・・・・」

え？何？御免聞こえなかった

もう一回言ってくれない？

つと巧真は言えず

一瞬、戸惑った表情をしたが、まあいいか、

と開きなおり、一瞬アホらしくて笑ったかと思うと
扉を閉じた

「どお？」

「うわっ、なんか微妙ですね・・・」

「え？そお？」

「よし、じゃあ俺も考えました」

カイ説

真由は、呟いた

「私、実はカイ君が好きなの

ごめんね」

巧真は、一瞬残念そうな顔をしたが

悔しさの余り二度と開くことのない扉を勢いよく閉じた

「どうですかね？」

「それは、お前のただの願望だろ」

「いや、願望なんかじゃ・・・

まあ、願望ですけど

いいじゃないですか願望だって

テニムさんは、面倒くさいからって

適当にやったのが見え見えなんですよ」

そんな言い争いをしていると

姫が、やってきた

「何やってるの？なんか会議？」

一瞬、場の空気が凍ったが

カイが、その氷を一瞬にして溶かした

「あの・・・姫

聞きたかったんですけど

隊長に最後に一体なんて言っただんですか？」

「え・・・？どうしたの突然」

「そもそも、巧真って今、何やってるんだ？」

「意外と、あの後、簡単にぽっくり逝ってたりして」

縁起でもないような事をたまに言うのが

厄介だなど、カイとテニムは思った

「面はいいのに・・・男だけど」

そう呟いたのはテニムである

「ねえ、姫様？」

巧真君、死んじゃったっていう可能性はないの？」

「ああ、それは、全然ない」

と、あっさりと否定した

全員が、首をかしげる中

チコが、口を開いた

「どうして、そんな事が言えるの？」

「どうしてってそれは・・・」

姫は、「なんでって言われても」と独り言を

喋りだした「ええ、でも・・・」

一向に答えが聞けない中

「ああ、もうこの会議止めましょう

答えが結局わからないんだし

意味無いわ」

リムの一言で全員が部屋から立ち去る中

チコは

「私が、生きてるからかな？」

と言う姫の独り言が耳に入ってきたが聞き流した

気がつくと、そこはいつしかの病院の天井だった

「あれ？」

「あつ、気がつきましたか？」

待っててくださいね

今、担当の者連れてきますから」

どうなってるの？」

「巧真さん、公園で倒れているのを発見されたんですよ」

「夢だったのか？」

「はい？」

「え？」

「・・・ああ、とにかく脳に外傷は無いようなので

ご安心してください」

あれ？ちよつと違うな

「まったく、そんなに髭なんか生やしちやってるから

おじさんなんかと間違えられておやし狩りなんかに会っんですよ」

「え？」

「ん？気づいてない？」

ああ、まだ麻酔取れてないんですね」

麻酔？

「両腕とろつ骨は骨折

左目は六針も縫いましたからね」

どうなってるんだ？」

「とにかく、しばらく入院ですね」

そう言つと、看護師と医者が出て行つた

俺は、夢の中で起きた出来事を読み返す

そして、けがの部分が同じことがわかつた

「夢？現実？」

なんて考えていると

俺は、最後に言われた一言を思い出し

「まじかよ・・・」と頭を抱え

背筋が凍える思いをすることになる

「ありがとう・・・お父さん」

以上、チコの仮説

「え？どこから？」

テニムがチコにそう聞くと

「・・・最初から」

「いや、最初ってどこの最初？
ん？どういう事？」

テニムが頭を抱える中

リムは、「それいいねえ」と絶賛

「でも、夢落ちって言うのはちょっと」

「あら、何言ってるの

夢じゃないかもしれないじゃない」

「ああ、そうか・・・」

「じゃあ、これで決定　！！」

「ちよっと待て、俺の説は？」

「テニムのなんか誰もいいとは思わないわよ」

「なんだと」

「なによ」

「ちよっと、お二人とも落ち着いて」

「これが、落ち着いてられるか」

「その通りよ」

そんな、口喧嘩をしていると

姫が入ってきた

「ちよつと、なに？」

「何やってるの？会議？」

その場で、全員が凍る中

リムの一言で全員が動き出す

「か、解散　！！」

「え？ちよつと？何？なんなの？」

「冗談じゃない、いくら創られた世界だからと言って
あんなエンディング創ってたまるか　！！」

「え？エンディング？」

「そつよ、あれ意外と意味深よ」

「何？何の話？」

「結局、姫は、俺の事なんか眼中になかったんだ」

「はあっ？」

勢いよく、出て行った三人に対し

チコはゆっくりつと歩きながら

扉を閉める時に何やら勝ち誇ったような笑顔を姫に見せて
姫が訳が分からずフリーズする中、扉を閉めた

これは、とらえ方の問題（オマケ）（後書き）

これで、本当に終わりです。
どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0206e/>

創られる世界に入り込む、俺

2010年10月21日22時48分発行